

# 機能言語学研究

第7巻 2013年5月

論文

- 日本語のコト、ノの扱い：名詞群の Head か助動詞化か ..... 1  
早川知江
- 機能文法による日本語説明モダリティの分析 ..... 23  
角岡賢一
- Two Characteristics of the Essay as a Genre ..... 43  
Akira ISHIKAWA
- クチコミサイトにおける修辞機能の商品評価の高低による違い ..... 59  
—修辞ユニット分析による検討—  
田中弥生
- クライアントの過程構成のマッピングより得られる ..... 75  
変化測定尺度としての起動者性  
—心理療法を基に—  
加藤 澄

日本機能言語学会

## Foreword

Two years have passed since the previous issue, Vol. 6 was published. This journal appears every other year, so two years seemed far ahead when we published Vol. 6. During those past two years, Japan was confronted with several severe trials including the devastating earthquake and tsunami in the Tohoku region and the critical nuclear plant accident in Fukushima. Japan is still reconstructing the social system in those areas. On behalf of the JASFL members, I sincerely hope that we will see the complete restoration of those areas soon and wish that we could make contributions by making use of SFL analysis and its applications for linguistic study.

2012 was the 20th anniversary year of the founding of JASFL. On this special occasion, I am proud to publish Vol. 7 of *The Japanese Journal of Systemic Functional Linguistics* that represents a new era of Systemic Functional Linguistics in Japan. This volume covers a wide range of current topics in the field: lexicogrammatical analysis of the Japanese nominal group, modality in Japanese, genre analysis proposing new approaches, online text analysis from rhetorical viewpoints and clinical text analysis from therapeutic viewpoints. Though there is no particular order to the articles themselves, they have been grouped into lexicogrammatical analysis, genre theory and text analysis. All these articles will interest readers of this journal, and their insights will impact on the framework of Systemic Functional Linguistics.

I hope that this journal will be of interest to those who study Systemic Functional Linguistics not only in Japan but also globally, since SFL has now spread and is studied all over the world.

President of JASFL  
Masa-aki Tatsuki, Ph.D.

# 機能言語学研究

## JAPANESE JOURNAL OF SYSTEMIC FUNCTIONAL LINGUISTICS

### 第7巻 2013年5月 目次

#### 論文

- 日本語のコト、ノの扱い：名詞群の Head か助動詞化か .....1  
早川知江
- 機能文法による日本語説明モダリティの分析 .....23  
角岡賢一
- Two Characteristics of the Essay as a Genre .....43  
Akira ISHIKAWA
- クチコミサイトにおける修辞機能の商品評価の高低による違い .....59  
-修辞ユニット分析による検討-  
田中弥生
- クライアントの過程構成のマッピングより得られる .....75  
変化測定尺度としての起動者性  
-心理療法を基に-  
加藤 澄

Japan Association of Systemic Functional Linguistics

# 日本語のコト、ノの扱い：名詞群の Head か 助動詞化か

## *Koto* and *no* in Japanese: Conditions to Work as Nominal Group Heads

早川知江

Chie Hayakawa

名古屋芸術大学

Nagoya University of Arts

### Abstract

This paper discusses how to analyze Japanese formal nouns like *koto* and *no* when they follow clauses. An example is *kare wa chikokushite kuru koto ga aru* (there are times when he comes late). We can take two approaches to such a clause. In one approach, the relational clause *koto ga aru* (there are times when) is considered to be downranked and to work as a part of the Predicator *chikokushite kuru koto ga aru* with the verbal group *chikokushite kuru* (come late). The other approach takes only the verbal group *aru* (exist) as the Predicator. In this case, the entire clause is Relational: existential, and *koto* serves as the Head of the nominal group *[[chikokushite kuru]] koto ga* which functions as the Participant, Possessed.

This paper concludes that *koto* and *no* function as Heads of nominal groups when I) a group or phrase can be inserted between *koto* or *no* and the following nominal, verbal or adjectival group and when II) the nominal, verbal or adjectival groups following *koto* or *no* can be repeated in the dialogue to negotiate. These phenomena verify that the clauses such as *koto ga aru* function as ranking clauses, not as embedded ones.

### 1. はじめに：問題点

早川 (2012) では、主にモダリティ(modality)を表現する手段の一つとして、節に後続するコト・ノの扱い方を考えた。「彼は遅刻してくることがある」などがその例にあたり、「ことがある」という表現によって「頻度(usuality)」のモダリティが具現されている。そして、この例の分析法として、以下の2つのどちらが適切かを論じた。

1 つ目の分析法は、表 1 のように、「ことがある」という関係過程節(Relational Clause)が階層下降(downrank)して、「遅刻してくることがある」という動詞群の一部になると分析するものである。この場合、コトは後続の「がある」とともに一種の助動詞としてはたらくと考えられる(関係過程節が階層下降する、という考え方は Teruya (2007: 210)を参考にした)。この場合、「遅刻してくることがある」が述部(Predicator)となり、節全体は物質過程節(Material Clause)と分析される。

表 1: コトを助動詞の一部とする分析

彼は	遅刻してくることがある
Subject	Predicator
Actor	Process: material

2 つ目の分析法は、表 2 のように、コトを名詞群の Head、コトに先行する節をその名詞群への埋め込み節として分析するものである。この場合、「遅刻してくることが」という名詞群が主語、「ある」という動詞群が述部と分析でき（「彼は」を埋め込み節の中に入れていない理由は、本稿第 2 節を参照のこと）、節全体は関係過程節となる。

表 2: コトを名詞群の Head とする分析

彼は	[[遅刻してくる]]ことが	ある
Complement	Subject	Predicator
Possessor	Possessed	Process: relational

表 1、2 どちらの方法で分析するかによって、節の述部がどこかや、節全体の過程型(Process type)が何かが変わってくるため、この問題に関して統一した方針をもつことは、日本語のテキスト分析を行う上で非常に重要である。

早川 (2012)では、分析テキスト中にコト・ノを含むモダリティ表現が登場したときのみを分析対象とし、どのような場合にコト・ノを名詞群の Head と判断できるかを、いくつかの文法テストを提案しながら考えた。しかしコト・ノは、モダリティを表わすためにのみ用いられるわけではない。コト・ノは、節を名詞化して他の節の構成要素(participant)とするために広く用いられ、また、「そのこと・このこと」のように節を伴わずに用いられる場合もあるなど、日本語においてさまざまな機能をもって多用され、分析法に迷うことが多い。そこで本稿は、早川 (2012)から少し視点を変え、モダリティ表現に限定せず、日本語でコト・ノが用いられる場合を包括的に扱い、選択体系機能言語学(Systemic Functional Linguistics; 以下 SFL)の枠組みから見て、どのような場合にコト・ノが名詞群の Head としてはたらき、どのような場合に助動詞の一部となっていると判断できるのか、を整理し直すことを目的とする。

その際、前提として重要なのは、言語は同じ形式であってもテキスト中では異なる機能を果たすことがあり、言語分析は、形式にとらわれず、その機能の違いを反映するものでなければならない、ということである。というのも、コト・ノは、既にみたように「～することがある」のように、かなり形式的に用いられることもあれば、「彼が言ったこと (=ことがら) は本当だった」といった例におけるように、内容語としてはたらく場合もあるからである。つまり、コト・ノが節に後続していれば常に埋め込み節を伴う名詞群の Head として分析する、とか、あるいは逆に、常に助動詞の一部として、先行する名詞・動詞・形容詞群とともに述部を成すとする、といった単純な

分析はできないのである。

同様の考え方を、寺村(1992: 300)がモノという単語を扱う際にとっており、以下のように述べている：

同じ「モノ」でもそれがどう使われているかによって形式名詞かどうかを判定する〔中略〕。名詞が、その内包する意味的特性によって、構文的に様々に使い分けられるさまを、また逆に構文的な（つまり使われ方の）違いが、同じ名詞の意味的内容の違いとなって反映するさまを日本語の文法全体の中の重要な一つの現象として眺めてみたい。

こうした考え方は、言語をそれが使われるコンテキストの中で分析する SFL の考え方と一致する。したがって、本稿はこれと同じ立場に立ち、コト・ノを、それがテキスト中で「どう使われているか」によって、その都度、助動詞化しているのか、名詞群の Head なのか、あるいはそれ以外のものとして分析すべきなのか、を考えていく。

本稿で「助動詞化した」と呼ぶのは、表1のように、コト・ノが、節中で名詞としてはたらくよりも、後続の助詞・助動詞・用言とともに、モダリティなどを表わすために形式化した場合のことである。もちろん、助動詞化しているか否かは程度の問題であり、「名詞群の Head」「助動詞の一部」という2つの用法は明確に区分できるものではない。助動詞化はいわゆる文法化(grammaticalization)の一種であり、文法化が程度の問題であることは、節境界認定の問題を扱った早川他(2011)の中でも述べた通りである。しかし、一貫したテキスト分析を行うためには、なんらかの基準が必要である。本稿では、この前提のもと、まずコト・ノが明らかに名詞群の Head としてはたらくしている用法から出発し、その性質・はたらきが徐々に変化して、最終的に完全に助動詞化しているといえる用法までを順に見ていく。そして、分析上は、どこからを助動詞化と扱うのか、これについて一定の基準を提案し、その根拠を論ずることを主眼とする。

これらの考察に先立ち、まず第2節では、コト・ノを修飾する節の範囲を考える。例えば先の「彼は遅刻してくることがある」という例で、仮にコトを名詞群の Head と考える場合、コトに埋め込まれているのは「彼は遅刻してくる」なのか、「遅刻してくる」のみなのか、という問題である。

続く第3節からは、コト・ノのさまざまな用法を順に見ていく。第3節ではまず、コト・ノが明らかに名詞群の Head として機能しているのはどのような場合かを見るため、コト・ノが節に後続しない場合を取り上げる。

第4節では、コト・ノが節によって修飾され、かつ、明らかにその節が埋め込まれた名詞群の Head として機能している場合を取り上げる。これは、節がいわゆる「内の関係」でコト・ノを修飾している場合である。

次に第5節では、節がコト・ノに先行し、その節が「外の関係」でコト・ノを修飾する場合を、第6節では、コト・ノに後続するのが助詞・助動詞・コンピュータのみという用例を取り上げる。第5、6節で扱うような用法におい

て、コト・ノが助動詞的にふるまう場合が多くなっていく。本稿では、①「コト・ノ+格助詞」と後続する名詞・動詞・形容詞群との間に他の群・句を付加することができる ②コト・ノに後続する名詞・動詞・形容詞群をやりとりの中で反復して会話を成り立たせることができる、などの基準により、コト・ノが名詞群の Head として機能していると判断とすることを提案する。上記の判定基準に当てはまらない場合、コト・ノは助動詞化しているものとする。

なお、分析に用いたのは、早川 (2012)で用いたのと同じ、以下の日本語テキスト (一部抜粋) である。どちらも、美術論を含む画集の解説部である：

- ・ 赤瀬川原平 (編、解説) (1998) 『赤瀬川原平の名画探検：印象派の水辺』講談社 (本文中『印象派』)
- ・ 日本アート・センター (編)、黒江光彦 (解説) (1975) 『新潮美術文庫 13 フェルメール』新潮社 (本文中『フェルメール』)

これらのテキストから無作為に抜粋した 419 節 (clause ; 日本語の節境界については、早川 他(2011)を参照のこと) を対象に、コト・ノの含まれる用例を改めて収集し直し、分析した。

## 2. コト・ノに埋め込まれる節の範囲

次節でコト・ノの各用法を詳しく見る前に、コト・ノに節が先行する場合の、修飾節の範囲を明確にしておきたい。例えば、冒頭にとりあげた「彼は遅刻してくることがある」の場合、仮にコトが名詞群の Head として機能しているとすると、コトに埋め込まれる節は「彼は」から始まるのか、あるいは「遅刻してくる」だけなのだろうか。前者の場合、

[[彼は遅刻してくる]]ことがある

後者の場合、

彼は[[遅刻してくる]]ことがある

と分析される。すなわち、「彼は」をコト・ノの修飾節に含むかどうかの問題である。

早川 (2012)では、簡易的なテストとして、コト・ノに先行する「～は」「～が」を、コトより後ろの述部の前に移動させてみることを提案した。つまり、「彼は遅刻してくることがある」が、「遅刻してくることが彼はある」と言い換えられるならば、「彼は」は「遅刻してくる」の主題ではなく、「ある」の主題であるため、「彼は遅刻してくる」という節は形成しない。この例の場合、「遅刻してくることが彼はある」と言い換えられるため、

彼は[[遅刻してくる]]ことがある

が正しい分析法であるといえる。

この判定法を多くの用例に適用してみると、結果的に、「～は」は修飾節に含まれない場合が多く、「～が」は修飾節に含まれると判定される場合が多いことが分かる。例えば、先の例を「彼が…」に変えると、「遅刻してくることが彼がある」とはいえないため、

[[彼が遅刻してくる]]ことがある

が適切な分析となるだろう。

この現象を説明するのに、大島(2010)の研究が参考になる。大島は、「～は」と連体修飾構造の関係を述べる中で、以下のような例を挙げることで、「いわゆる提題（「主題」とも）の「…は」は連体修飾節に入れることができない(p43)」ことを示している：

- (1) 良夫はその演奏会に行った。→ \*[[良夫は行った]]演奏会  
(大島(2010: 43)より)

ただし、いわゆる対比の「～は」は連体修飾節に入れることができ(p54-55)、また、修飾節が恒常的な性質や状態を表わす場合も、「～は」が連体修飾節に入る(p57-61)として、それぞれ以下の例を挙げている：

[対比の「～は」（初心者には難しいが上級者にはちょうどよい、という意味で）]

- (2) この問題は初心者には難しすぎる。→ [[初心者には難しすぎる]]問題  
(大島, 2010: 43 より)

[修飾節が恒常的な性質・状態を表わす場合]

- (3) a. [[地球は太陽の周りを回っている]]ことを先生が教えてくれた。  
b. [[芳枝はゴキブリが嫌いな]]ことを三郎は忘れていた。  
(大島, 2010: 57 より)

よって本稿では基本的に、上記に挙げられた、対比の「～は」と、恒常的な性質・状態を表わす節の「～は」以外の「～は」は名詞修飾節に含めず、「～が」は含めるものとして分析を進める。



### 3. コト・ノが節に後続しない場合

ここからは、コト・ノのさまざまな用法を、明らかに名詞群の Head である場合から始め、徐々に、助動詞化している可能性が高い用法へと順に見ていく。

まず、コト・ノが明らかに名詞群の Head として機能している場合として、そもそもコト・ノが節に後続しない場合を見てみる。これは、コト・ノが節ではなく語で修飾され、その修飾語とともに名詞群をつくる場合である。この場合の「語」には、「この・その」などの指示詞や、「さっきの」などの、名詞とそれにつづく格助詞などが含まれる。例は以下の通り：

- (4) このことは覚えておかなければならない。（作例）
- (5) ブリュージュの巨匠のは鋭く輝くのだが、デルフトの画家の光の粒は、にじむように大きくひろがる。（『フェルメール』）
- (6) モネというのは[[凄く筆力の旺盛な]]人で、（『印象派』）

こうした用法におけるコト・ノは、そもそも先行する動詞や形容詞がないため、当然、動詞や形容詞にくっつく助動詞の一部としてはたらいっているわけではなく、常に名詞群の Head として機能していると分析できる。

注意が必要なのは、コト・ノが「大きい」「きれいな」などの形容詞（I型・ナ型を含む）や、「描く」などの動詞に後続する場合である。例は以下の通り：

- (7) <リュートを弾く女>（図版 20）にも同じことがいえる。（『フェルメール』）
- (8) フェルメールの生涯について確実なことがわかっていないと同様に、（『フェルメール』）
- (9) 彼にとっては、描くことが何より大切だった。（作例）

例(7-9)においてコトを修飾している「同じ」「確実な」「描く」という形容詞や動詞は、単なる語なのか、あるいは節と捉えるべきなのだろうか。

SFL の枠組みでいうと、節とは叙法部(Mood)をもつ単位であり (Halliday and Matthiessen, 2004: 153)、そして叙法部は日本語においては述部が中心となる(Fukui, 1998)ため、日本語の節とはすなわち述部をもつ単位である、と定義できる。また本稿では、Teruya (2007)、早川他(2011)などに従い、日本語においては、名詞・動詞・形容詞群が節の述部になれるとする。

すると、例えば「絵を描くこと」のコトは、明らかに「絵を描く」という節によって修飾されているといえる。それは、修飾部に「絵を」という名詞

群と、「描く」という動詞群の、複数の群が含まれるためである。そのため、このコトは、複数の群から成る節によって修飾されていると容易に判断できる。一方、単に「描くこと」といった場合の「描く」は、はたして動詞群を述部とする節（1語から成る1群から成る節）ととらえるべきなのか、節ではなく語と考えるべきなのか、判断が分かれるところである。

しかし、少なくとも本稿の、コト・ノのふるまいを検討する、という目的からすると、「（彼は）描くことがある」「（彼は）描くことができる」のように、コト・ノの前に形容詞や動詞1単語のみがきて、「描くことがある」「描くことができる」のような述部を形成している可能性のある用例が非常に多いことから、これらのコト・ノを初めから「節ではなく語で修飾されている名詞群の Head」と分析してしまうのは不適当だと考えられる。コト・ノに先行するのが動詞・形容詞の場合は常に、「節によって修飾されている」と扱い、次節以降でその機能について検討していくのが妥当だろう<sup>1</sup>。

まとめると、コト・ノを修飾する部分が（動詞・形容詞以外の）語のみである場合、コト・ノは「節に後続しない」と扱われ、その際のコト・ノは常に名詞群の Head であると分析できる。その他の場合はすべて、「節による修飾」と考え、次節以降でその機能を検討していく。

#### 4. 節によって「内の関係」で修飾される

コト・ノが節に後続していても、コト・ノが明らかに名詞群の Head として機能している場合もある。それは、コト・ノが、寺村(1992)、大関(2001)、大島(2010)らによって「内の関係」と呼ばれる関係で、先行する節によって修飾される場合である。例は以下の通り：

- (7) <リュートを弾く女> (図版 20) にも[[同じ]]ことがいえる。
- (8) フェルメールの生涯について[[確実な]]ことがわかっていないと同様に、
- (10) [[彼が私に打ち明けた]]ことはわかには信じ難かった。(作例)
- (11) [[フェルメールの背景から闇を追いはらった]]のは、レンズではなかったか。(『フェルメール』)
- (12) [[ (フェルメールが) ほんとうに興味をもち、打ち込んだ]]のは、[[暗箱のスクリーンの上に戯れる]]光の粒子であったろう。(『フェルメール』)

内の関係というのは、外の関係とともに、名詞修飾節と名詞との関係を示す用語として用いられるもので、例えば寺村(1981: 92; 大関, 2001: 11 より引用)は、内の関係を、「底の名詞が修飾部に対して、それに何かの格助詞

をつけて修飾部と結びつけることができるような関係」と説明している（「底の名詞」とは、節で修飾される名詞を指す）。一方、外の関係というのは「底の名詞にどのような格助詞をつけても修飾部のどこにも納めることができない」（寺村, 1975: 109 ; 大関, 2001: 11 より引用）修飾関係である。例えば以下の例を比べてみる：

(13) [[太郎が花子に言った]]ことは本当か。

(14) [[太郎が花子に会ったという]]ことは本当か。

(いずれも作例)

例(13)の場合、コトは「太郎が（その）ことを花子に言った」という形で修飾節の中に納めることができるので、内の関係である。しかし例(14)の場合、コトはいかなる形でも修飾節の中に入ることができないため、外の関係である。

この区別に従うと、上例(7), (8), (10-12)では、すべて節が内関係でコト・ノを修飾していることが分かる。例(7)は「ことが同じ」、例(8)は「ことが確実」、例(10)は「彼が（その）ことを私に打ち明けた」、例(11)は「の（＝もの）がフェルメールの背景から闇を追い払った」、例(12)は「（フェルメールが）の（＝もの）にほんとうに興味をもち、打ち込んだ」のように、修飾節中に納めることができるからである<sup>2</sup>。

こうしたコト・ノは、どのように分析されるべきだろうか。「内関係」の定義からも明らかのように、これらのコト・ノは、もともとは修飾節中の構成要素である。それが「[[彼が私に打ち明けた]]こと」のように、結果的に修飾節の外に出ているだけなので、後続する要素（例えば例(10)における「は信じがたい」）とともに助動詞化しているとは考えられない（＝「ことは信じがたい」というひとかたまりの助動詞は形成しない）。よって、内関係で節に修飾されるコト・ノも、節に後続しないコト・ノと同様、常に名詞群の Head であると分析できる。

## 5. 節によって「外関係」で修飾される

一方、コト・ノが「外関係」で節によって修飾される場合もある。例は以下の通り：

(9) 彼にとっては、[[描く]]ことが何より大切だった。

(15) むしろ[[[[中の島に群がる]]人々の風俗やその雰囲気を描く]]ことに力がそそがれている。（『印象派』）

(16) [[現実を正しく観察する]]ことがこの世紀のオランダの画家の信条となり、

- (17) まして[[版画の修業をしている]]者にとっては、[[反転する]]ことを頭に入れて描くのは造作もないことなのだ。
- (18) [[レンズを通してものを観た]]人間は、[[迷信をはらいのける]]ことに成功して、
- (19) われわれは[[永遠の謎をさまよい続ける]]ことを強いられる。
- (20) それに対して、[[たとえ永くはなかった生涯とはいえ、数少ない部屋の、しかもほとんど同じ窓辺に限定して絵を作っている]]フェルメールは、[[室内画の概念から出発している]]ことは否めないながら、
- (21) 映像の時代、われわれは[[ブラウン管の上で毎日のようにこの光の珠を目にする]]ことができる。(以上(16-21)『フェルメール』)

外の関係というのは、前節で述べたように、修飾節の内部に底の名詞を復元できない構造である。その中で特に「同格」の関係というのがあり、「修飾節が主名詞の『内容を補充する』などの説明が与えられている(大島 2010: 211)」関係と定義される(この場合の「主名詞」は、「底の名詞」と同じ意味)。このような関係で節に修飾された名詞を、大島は「同格連体名詞」と呼び、「修飾節と主名詞の間に「という」が介在可能である(大島, 2010: 110)」という特徴を挙げている。本節で扱うのは、コト・ノがこの同格連体名詞として機能する場合である。

外の関係で修飾され、かつ同格連体名詞でないものとしては、大島が「相対名詞」と呼ぶものがある。「[[詳しく調べた]]結果、その書類にはミスが見つかった」のように、「修飾節の内容をふまえ、そこから相対的に、ある時点や空間内の位置、関係することから示す名詞」である(大島, 2010: 18)。つまり、「詳しく調べた」という節は「結果」を外の関係で修飾しているが、ただし「結果」は「詳しく調べた」と同一のものではなく、「詳しく調べた」ことによって生じるものである。この用法では、修飾節と主名詞(底の名詞)の間に「という」は入れられない。ただし、本稿の主題であるコト・ノには相対名詞としての用法がないため、本稿ではこの修飾関係についてはこれ以上触れず、「外の関係」と「同格の関係」は、本稿中では同義であるものとする。

以上のように、修飾節とコト・ノの間に「という」が入るかどうかを外の関係の条件であると考えると、上例(9), (15-21)はすべて「という」が入れることが分かる。例(9)は、「描くということが…」例(15)は「中の島に群がる人々の風俗やその雰囲気を描くということに…」、例(16)は「現実を正しく観察するということが…」、例(17)は「反転することを頭に入れて描くというのは…」、例(18)は「迷信をはらいのけるということに…」、例(19)

は「永遠の謎をさまよいつけるということを…」、例(20)は「室内画の概念から出発しているということは…」、例(21)は「…毎日のようにこの光の珠を目にするということが…」のよう言い換えられるからである。

また、以下のように、もともと「という」が入っている例も、当然、外の関係として扱う。これらの「という」は、逆に省略することもできる：

- (22) そして[[フェルメールが暗箱を使ったという]]ことは、かなりの確度をもっている。
- (23) しかし[[光学装置がオランダでかなり発達していたという]]ことは厳然たる事実である。
- (24) しかし、[[形の正確さを期するために[[レンズの力を借りたという]]ことは大いにありうることだった。
- (25) [[彼の作品の年代についても明確な証拠がないという]]のが現実である。(以上『フェルメール』)

これら外の関係で修飾されたコト・ノは、内の関係で修飾されていた場合よりも、助動詞的な性質が高い場合が見受けられる。例えば、例(18)や(21)では、「ことに成功して」「ことができる」という表現が、可能性を表す助動詞の「～られる」に近いはたらきをし、例(19)では、「ことを強いられる」が、義務性を表す助動詞の「～べきだ」と似た意味を表わし、例(20)では、「ことは否めない」という表現が、蓋然性を表す助動詞の「～らしい」に似たはたらきをしている。よって、これらの表現がそれぞれ先行する動詞とともに、「はらいのけることに成功して」「目にするることができる」「さまよいつけることを強いられる」「出発していることは否めない」という述部を成していると分析することもできそうである。

しかし、意味的に助動詞に近いからと言って、これらの表現を即座に助動詞化していると分析することはできない。意味と文法は言語の別の層に属する選択肢であり、文法的には助動詞でないものによって、助動詞と同じ意味を具現することも可能だからである。これが文法的比喩(*grammatical metaphor*)というものである。例えば例(21)は文法的にはあくまでも「できる」という関係過程であり、それが文法的比喩によって可能の意味を表わしているとも分析できる。

本稿では、こうした場合に、これらのコト・ノが本当に助動詞の一部になっているかどうかを判断するために、以下の2つの文法テストを提案したい。

1 つ目は、早川 (2012)でも用いた方法であるが、コト・ノに後続する名詞・動詞・形容詞群をやりとりの中で反復させてみることである。これは、「ことは否めない」「ことができる」のような節が、階層節としての資格をもつのか、あるいは階層下降して動詞群に埋め込まれているのか、という観点

からみて、重要なテストである。

というのは、階層節とはそもそも、叙法部の中心的な構成要素である述部をもつ単位であり(Teruya, 2007: 48; Fukui, 1998)、その叙法部によって情報をやりとりするのが、対人的に見た節の重要な機能だからである。したがって、Teruya (2007: 162)に、“the Predicator plays a central role in the interpersonal structure of the Mood” または “Japanese grammar in general uses the Predicator and the Negotiator that follows it to indicate mood type (Teruya 2007: 135)” とされているように、階層節の述部というのは、会話の中で疑問形になったり否定形になったりしながら繰り返されて、対人的やりとりを前に進める役割を果たす部分であるといえる。

したがって、「ことは否めない」「ことができる」などの表現中の「否めない」「できる」が、やりとりの中で独立して反復できるのならば、それらは階層節の述部として機能しているといえる。一方、これらが助動詞化しているならば、付属語である助動詞（の一部）は、単独ではやりとりの中で反復できないはずである。これは、「彼は遅刻するだろう」などの通常の助動詞が、「だろうか？——だろう」などのように単独でやりとりの中で反復されないのと同様である。

例(9), (15-25)にこの基準を当てはめてみると、ほぼ反復させることができるが、中にはやや不自然な例もある（不自然な例には「？」を付した）<sup>3</sup>：

- (9) 彼にとっては、[[描く]]ことが何より大切だった。  
→ (何より) 大切だったか？——大切だった。
- (15) むしろ[[[中の島に群がる]]人々の風俗やその雰囲気を描く]]ことに力がそそがれている。（『印象派』）  
→ (力が) そそがれているか？——そそがれている。
- (16) [[現実を正しく観察する]]ことがこの世紀のオランダの画家の信条となり、  
→ (信条と) なったか？——なった。
- (17) まして[[版画の修業をしている]]者にとっては、[[[反転する]]ことを頭に入れて[[描く]]のは造作もないことなのだ。  
→ 造作もないことか？——造作もないことだ。
- (18) [[レンズを通してものを観た]]人間は、[[迷信をはらいのける]]ことに成功して、  
→ 成功したか？——成功した。
- (19) われわれは[[永遠の謎をさまよい続ける]]ことを強いられる。  
→ 強いられるか？——強いられる。

- (20) それに対して、[[たとえ永くはなかった生涯とはいえ、数少ない部屋の、しかもほとんど同じ窓辺に限定して絵を作っている]]フェルメールは、[[室内画の概念から出発している]]ことは否めないながら、  
→ ? 否めないか? —— 否めない。
- (21) 映像の時代、われわれは[[ブラウン管の上で毎日のようにこの光の珠を目にする]]ことができる。  
→ できるか? —— できる。
- (22) そして[[フェルメールが暗箱を使ったという]]ことは、かなりの確度をもっている。  
→ ? (確度を) もっているか? —— もっている。
- (23) しかし[[光学装置がオランダでかなり発達していたという]]ことは厳然たる事実である。  
→ ? (厳然たる) 事実か? —— 事実だ。
- (24) しかし、[[形の正確さを期するために||レンズの力を借りたという]]ことは大いにありうることだった。  
→ (大いに) ありうることか? —— ありうることだ。
- (25) [[彼の作品の年代についても明確な証拠がないという]]のが現実である。  
→ ? 現実か? —— 現実だ。

つまり、判定法1とは、コト・ノに後続する名詞・動詞・形容詞群をやりとりの中で反復させることができれば、その用例は、その名詞・動詞・形容詞群のみを述部とする節であり、先行するコト・ノは名詞群の Head である、ということである。

ただし「?」を付した例は、むしろ[[ ]]の中の述部を反復したほうが自然である：

- (20) それに対して、[[たとえ永くはなかった生涯とはいえ、数少ない部屋の、しかもほとんど同じ窓辺に限定して絵を作っている]]フェルメールは、[[室内画の概念から出発している]]ことは否めないながら、  
→ 出発しているか? —— 出発している。

- (22) そして[[フェルメールが暗箱を使ったという]]ことは、かなりの確度をもっている。  
→ 使ったか?—使った。
- (23) しかし[[光学装置がオランダでかなり発達していたという]]ことは厳然たる事実である。  
→ 発達していたか?—発達していた。
- (25) [[彼の作品の年代についても明確な証拠がないという]]のが現実である。  
→ (証拠は) ないか?—ない。

この現象は、これらの「ことは否めない」「ことは(かなりの)確度をもっている」「ことは(厳然たる)事実である」「のが現実である」という表現が、ある程度助動詞化し、「出発していることは否めない」「使ったという」ことは、かなりの確度をもっている」「発達していたということは厳然たる事実である」「ないというのが事実である」という述部の一部になりかけていることを示している。しかし、本稿では、これらの表現はまだ「完全に助動詞化している」とはいえないと考える。というのも、これらのコト・ノに後続する「否めない」「(確度をもっている)」「事実である」「現実である」などの動詞・名詞・形容詞群は、階層下降して他の動詞群の一部になったというよりは、独立して述部を成すという性質がまだ充分に残っているからである。そのことを確かめるため、2つ目の文法テストを課す。

それは、「コト・ノ+格助詞」とその後ろの名詞・動詞・形容詞群の間に群・句を付加して試みることである。これは早川他(2011)で動詞・形容詞の文法化を扱った際にも採用した判別法である。例えば以下は、「いう」という動詞が、助詞の「と」とともに「という」という後置詞として文法化している場合の性質を述べた部分である：

例えば「する」という動詞が、先行する助詞「と」とともに後置詞化して「として」となった場合、この表現は、「として」という形でシステム上に位置付けられたのであり、ここに、さらに群・句の階層に位置する要素を付加することはできない。つまり、文法化した動詞・形容詞は、主語を付加したり、その他の群・句の階層に属する要素を付加できない、という制約が生ずる。(早川他, 2011: 30)

同じことを今回の問題に当てはめて考えてみると、「ことは否めない」「ことができる」などが文法化して1つの助動詞になっているならば、「ことは」と「否めない」または「ことが」と「できる」の間には群・句の階層に属する要素を付加できない、ということになる。これを例(9), (15-25)に当てはめてみると、いずれも付加できることが分かる：



- (9) 彼にとっては、[[描く]]ことが何より大切だった。  
→ 「何より」がすでに付加されている。他にも、  
[[描く]]ことがとりわけ／とても大切だった。
- (15) むしろ[[[中の島に群がる]]人々の風俗やその雰囲気を描く]]ことに力がそそがれている。(『印象派』)  
→ [[…描く]]ことに何よりも／常に／とりわけ力がそそがれている。
- (16) [[現実を正しく観察する]]ことがこの世紀のオランダの画家の信条となり、  
→ 「この世紀のオランダ画家の」がすでに付加されている。他にも、[[…観察する]]ことがこの時代の／あらゆる画家にとって信条となり、
- (17) まして[[版画の修業をしている]]者にとっては、[[[反転する]]ことを頭に入れて[[描く]]のは造作もないことなのだ。  
→ [[…描く]]のは全く／少しも／どんなときも造作もないことなのだ。
- (18) [[レンズを通してものを観た]]人間は、[[迷信をはらいのける]]ことに成功して、  
→ [[…はらいのける]]ことにまんまと／すぐさま／上手に成功して、
- (19) われわれは[[永遠の謎をさまよい続ける]]ことを強いられる。  
→ [[…さまよい続ける]]ことを常に／いつまでも／心ならずも強いられる。
- (20) それに対して、[[たとえ永くはなかった生涯とはいえ、数少ない部屋の、しかもほとんど同じ窓辺に限定して絵を作っている]]フェルメールは、[[室内画の概念から出発している]]ことは否めないながら、  
→ [[…フェルメールは、室内画の概念から出発している]]ことは俄かには／誰にも／どうしても否めないながら、
- (21) 映像の時代、われわれは[[ブラウン管の上で毎日のようにこの光の珠を目にする]]ことができる。  
→ …われわれは[[ブラウン管の上でこの光の珠を目にする]]ことが毎日のようにできる。
- (22) そして[[フェルメールが暗箱を使ったという]]ことは、かなりの確度をもっている。

→ [[…使ったという]]ことは、誰が見ても／紛れもなく／どう考えてもかなりの確度をもっている。

(23) しかし[[光学装置がオランダでかなり発達していたという]]ことは  
厳然たる事実である。

→ [[…発達していたという]]ことは誰が見ても／紛れもなく／どう考えても厳然たる事実である。

(24) しかし、[[形の正確さを期するために||レンズの力を借りたという]]  
ことは大いにありうることだった。

→ 「大いに」がすでに付加されている。他にも、  
[[…借りたという]]ことは確かに／充分／明らかにありうることだった。

(25) [[彼の作品の年代についても明確な証拠がないという]]のが現実である。

→ [[…証拠がないという]]のが残念ながら／今のところ／私にとっては現実である。

まとめると、判定法 2 は、「コト・ノ+ 格助詞」とその後ろの名詞・動詞・形容詞群の間に群・句を付加できれば、コト・ノは助動詞化していない、すなわちコト・ノは名詞群の Head ということである。上記の結果は、例(9)、(15-25)において、コト・ノに後続する名詞・動詞・形容詞群がいずれも階層節の述部であること、すなわち、コト・ノが名詞群の Head であることを示している。

結局、今回の分析テキスト中に見つかった例に限っていうと、コト・ノの後に名詞・動詞・形容詞群が続く場合は、すべてコト・ノは名詞群の Head という結果になった。これが、どのような例にも当てはまる結論なのか、それとも、もっと分析例を増やせば、コト・ノの後に名詞・動詞・形容詞群が続く場合でも、判定法 1, 2 に当てはまらない、すなわちコト・ノが助動詞化している例が見つかるのかどうか、今後の課題である。

しかしいずれにせよ、ここで提案した判別法を用いることによって、コト・ノが先行する節によって外の関係で修飾された場合の、その機能を明確に判断することができるようになったと考える。

ただし、分析テキスト中に、コト・ノが助動詞化している例がまったくなかったわけではない。今回の分析で、コト・ノが明らかに助動詞の一部として用いられていたのは、コト・ノの後に続くのが「か」などの助詞や「だろう、だ」などのコピュラのみで、述部になりうる動詞・名詞・形容詞群がない場合である。この用法について、次節で詳しく見ていく。

6. コト・ノの後ろに名詞・動詞・形容詞群がない場合

コト・ノのさまざまな用法として最後に、コト・ノが節に後続していて、その後が続くのが「か」などの助詞や「だろう、だ」などのコピュラのみで、述部になりうる動詞・名詞・形容詞群が存在しない場合について考えてみたい。以下に、コト・ノに先行する節を〔 〕で示して例を載せる：

- (26) [あの[[[[[[地図の掛かる]]壁に至る]]までの空間を、諸物をたどって立ち入っていく]]視線が、なんと豊かな光と色彩の明滅に出会う] ことか。(『フェルメール』)
- (27) [その[[劇的ともいえる]]明暗を、画家たちはアトリエのブラインドの開け閉めや角度をかえて||実際のモデルに即して試してみた] ことであろう。(『フェルメール』)
- (28) [この絵は果たして驟雨の中を現場で描いた] のだろうか。(『印象派』)
- (29) [[[画家のアトリエそのものを輝かしく描き表す]]ことによって、[[絵画がうけるべき]]栄光を定着させ||永遠化している] のだ。(『フェルメール』)

これらの例は、第5節までに見たような、コト・ノの後にも動詞・名詞・形容詞群が現れる例とは根本的に構造が違って、〔 〕部がもしコト・ノという名詞に埋め込まれているとすると、全体が、「～こと」という名詞に助詞やコピュラのついた、単一名詞群となる。つまり、例えば例(27)は、「[[その…試してみた]]ことであろう」というコピュラ付きの名詞群となり、これは「太郎であろう」などの名詞群とまったく同じ構造である。表3にこの分析を示す。

表3: 例(27)が名詞群と考えた場合の分析

[[その[[劇的ともいえる]]明暗を、画家たちはアトリエのブラインドの開け閉めや角度をかえて  実際のモデルに即して試してみた]]	こと	であろう
embedded clause complex	noun	copula
nominal group		
≡		
太郎		であろう
noun		copula
nominal group		

しかし、例(26-29)が、テキスト中で名詞群として機能しているとは考えにくい。やはりこれらは、「コト・ノ+助詞・コピュラ」が助動詞化して、見た

目上の埋め込み節中の動詞・名詞・形容詞群とともに述部をなす、節として分析されるべきだろう。

ただし、コト・ノの後に助詞やコピュラしか続かない場合は、常にコト・ノが助動詞化しているというわけではない。これは、冒頭に、「言語は同じ形式であってもテキスト中では異なる機能を果たすことがあり、言語分析は、形式にとらわれず、その機能の違いを反映するものでなければならない」と述べた通りである。というのも、例(26-29)と全く同じ構造をもっている、機能が異なる例もあるからである。以下のような例である：

(30) 彼の趣味は何ですか？—[[釣りに行く]]ことであろう。

例(30)の場合は、「彼の趣味が何か」と聞かれた質問の答えとして、「釣りに行くこと」という名詞群を解答として与えている。この場合は、全体が「であろう」というコピュラのついた名詞群として分析して差し支えない。つまり、例(30)の場合、コトは明らかに名詞群の Head である。

例(26-29)のような用例と、(30)のような用例を区別するにはどのようなテストが適切だろうか。ここでもやはり会話中の反復テストが有効である。つまりこの場合は、会話中で反復されるのが、「～こと」という名詞群全体なのか、コト・ノに先行する節中の述部なのかを見ればよい。例(30)の場合、

(30-a) 釣りに行くことであろう。——釣りに行くことか？——釣りに行くことだ。

のように、「～こと」という名詞群全体が反復される。これは、「釣りに行くこと」という表現が、テキスト中で名詞群として用いられていることを示している。一方、例(27)の場合は、

(27-a) …試してみたことであろう。——\*試してみたことか？——試してみたことだ。

のように、「～こと」という名詞群を反復してのやりとりは成り立たない。反復するなら以下のように、

(27-b) …試してみたことであろう。——試してみたか？——試してみた。

コト・ノに先行する節中の述部が反復される。すなわち、例(27)においてコトは、「[[その[[劇的ともいえる]]明暗を…試してみた]]こと」という名詞群は形成していないのである。「ことであろう」という助動詞と化して、「試してみることであろう」という述部の一部になっているのであり、会話においては、この述部がやりとりの中心になるのである。

まとめると、コト・ノが節に後続していて、その後が続くのが助詞やコピ

ユラのみで、述部になりうる動詞・名詞・形容詞群が存在しない場合、やりとりで反復されるのが「～コト・ノ」という名詞群全体ならば、コト・ノはその名詞群の Head として機能している。一方、反復されるのが、コト・ノに先行する節中の動詞・名詞・形容詞群である場合、コト・ノはそれらの動詞・名詞・形容詞群とともに述部を成す助動詞となっていると判断できる。

## 7. まとめ

以上の議論をまとめると、コト・ノのさまざまなはたらきと、各用法の分析法は以下のようになるだろう：

### 1. 節に後続しない場合

コト・ノが（動詞・形容詞以外の）語のみで修飾される。

→コト・ノは名詞群の Head

### 2. 節によって「内の関係」で修飾される場合

コト・ノを何らかの形で修飾節内に納めることができる。→コト・ノは名詞群の Head

### 3. 節によって「外の関係」で修飾される場合

コト・ノを修飾節内に納めることができず、修飾節とコト・ノの間に「という」が入れられる、またはもともと「という」が存在する。

判定法 1: コト・ノに後続する動詞・名詞・形容詞群を反復してやりとりができる。

判定法 2: 「コト・ノ+ 格助詞」とその後ろの名詞・動詞・形容詞群の間に群・句を付加できる。

いずれかに当てはまる場合 →コト・ノは名詞群の Head

いずれにも当てはまらない場合 →コト・ノは後続の格助詞、動詞・名詞・形容詞群とともに助動詞化

### 4. コト・ノの後ろに名詞・動詞・形容詞群がない場合

コト・ノが節に後続しているが、その後続くのが「か」などの助詞や「だろう、だ」などのコピュラのみで、述部になりうる動詞・名詞・形容詞群がない。

やりとりで、「コト・ノに先行する節+コト・ノ」全体が反復される  
→コト・ノは名詞群の Head

やりとりで、「コト・ノに先行する節中の動詞・名詞・形容詞群」のみが反復される→コト・ノは後続の助詞やコピュラとともに助動詞化

このような分類に従うと、冒頭に掲げた例「彼は遅刻してくることがある」は結局どのように分析できるだろうか。まず、コトは「彼は遅刻してく

る」という節の中に納めることはできないため、外の関係で修飾されているといえる。上記の判定法 1. を適用してみると、「あるか?—ある」のように、コトに後続する動詞群を反復させてやりとりが成立する。また、判定法 2. を考えてみると、「遅刻してくることがよく／たびたび／頻繁にある」のように、コトと後続の動詞群の間に他の群・句を付加することができる。以上のことから、この例におけるコトは表 2 のように名詞群の Head として分析できると判断できる。以下に、冒頭に示した表 2 を再掲する。

表 2：コトを名詞群の Head とする分析

彼は	[[遅刻してくる]]ことが	ある
Complement	Subject	Predicator
Possessor	Possessed	Process: relational

以上、日本語のコト・ノのさまざまな用例を取り上げ、それらのコト・ノが名詞群をなすかどうかを考察してきた。締めくくりとして、コト・ノ以外の形式名詞についても、ごく簡単に触れておきたい。コト・ノ以外にも、テキスト中で他の要素と結びついて助動詞的に機能する場合があると考えられる名詞は数多くあり、さまざまな研究がなされている。例えば寺村(1992: 310)は、「助動詞的形式名詞」という用語を用い、例として「つもり(だ)、はず(だ)、わけ(だ)、様子(だ)、もの(だ)、こと(だ)、ところ(だ)、こと(がある)、甲斐(がある)、気(がする)、感じ(がする)、ほう(がいい)」といった表現を挙げている(この中で、「もの(だ)」は、一見、助動詞としての機能はないように思われるが、実際には義務性などのモダリティを表すのに頻繁に用いられる。早川(2012)でも用いた作例としては、「人に会う時は帽子をとるものだ」など)。

また、これらの名詞には名詞群の Head と助動詞の一部としての両方の機能があり、その名詞がテキスト中でどのように用いられているかをその都度判断しなければならない、というのもコト・ノの場合と同様である。例えば角田(2004: 207)は、「(～した)わけだ」という表現の使用には、人間の思考のプロセスから見てどのような原理があるかを扱っているが、その注の中で、「本論では、単に「ワケ」を「事情」と言い換えられるような場合は扱っていない」と述べ、「ワケ」という同じ形式でも、機能的には、実質名詞的用法と、文末助動詞化した用法とがあることを示唆している。そして、これらの「つもり」「はず」「わけ」などの名詞も、本稿で扱ったコト・ノと同様、助動詞的に用いられた場合は名詞群を形成しないと考えるべきだろう。

本稿では、これらのコト・ノ以外の形式名詞についてはまったく触れなかったが、こうした名詞が使用されている場合の分析についても、本稿で採用したような判別法(あるいはそれを適宜修正したもの)が適用可能であると考えられる。こうした分析基準を採用することによって、日本語の分析が、よりことばの機能の実態に即したものになると考える。

註

- <sup>1</sup> そもそも「何が節か」に対しては、さまざまな主張がある。例えば寺村(1981: 89; 大関 2001: 93-94 より引用)は、名詞修飾節について説明する中で、節とは何かについて触れ、「主体が具体的にその文(脈)から分かるということと、(中略)テンスの意識があるということ、この2点が認められるときは「節」とする」と定義づけている。例として、「きのう読んだ本」「お茶がほしい人」などの修飾部は「節」であるが、「やせた人」「生きる喜び」などの修飾部は「語」「句」(=本稿でいう「群」)と考える、としている。この定義によれば、本稿で例として用いた「描くこと」の「描く」は、一見、主体もテンスも表わされていない。しかしコンテキストによっては、「(フェルメールが)(その晩年に)描く(=描いた)こと」を表わす場合もある。
- このように、「主体が具体的にその文(脈)から分か」り、「テンスの意識がある」かどうかはそもそも客観的判断が難しく、判定基準として利用するのは不適切であると考えられる。よって本稿では、寺村の定義は採用せず、本文中に示した通り、コト・ノに先行するのが動詞・形容詞の場合は一律に「節によって修飾されている」と扱った。
- <sup>2</sup> 「(11) [[フェルメールの背景から闇を追い払った]]のは…」 「(12) [[(フェルメールが)ほんとうに興味をもち、||打ち込んだ]]のは…」における「の」は、それぞれ、「A がフェルメールの背景から闇を追い払った」「(フェルメールが) A にほんとうに興味をもち、||打ち込んだ」の「A」が埋め込み節の外に出たものだと考えられるが、「の」のままでは節中に復元することができないため、本稿中では「もの」として復元した。
- <sup>3</sup> 用例の不自然さは、使用されるコンテキストによっても当然変化する。本稿では、用例が実際に使われていたテキスト中で、前後の内容や論理展開から見て反復が自然か、という観点で判断した。

参考文献

- Fukui, N. (1998) *A description of the mood system of a set of Japanese spoken dialogic text*. MA thesis, University of New South Wales.
- Halliday, M.A.K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar*. 2<sup>nd</sup> ed. London: Edward Arnold.
- Halliday, M.A.K. and Matthiessen, C.M.I.M. (2004) *An Introduction to Functional Grammar*. 3<sup>rd</sup> Ed. London: Hodder Arnold.
- 早川知江 (2012) 「日本語のモダリティ：階層下降か文法的比喩か」『Proceedings of JASFL』 Vol. 6 日本機能言語学会
- 早川知江、佐野大樹、水澤祐美子、伊藤紀子 (2011) 「機能文法における節境界の問題と認定基準の提案」『機能言語学研究』第6巻 P17-58 日本機能言語学会
- 角田三枝 (2004) 『日本語の節・文の接続とモダリティ』東京：くろしお出版
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』東京：くろしお出版
- 仁田 義雄、益岡 隆志 (編) (1989) 『日本語のモダリティ』東京：くろしお出版
- 大島資生 (2010) 『日本語連体修飾節構造の研究』(ひつじ研究叢書〈言語

編) 第 78 卷) 東京：ひつじ書房

大関浩美 (2008) 『第一・第二言語における日本語名詞修飾節の習得過程』  
東京：くろしお出版

鈴木 重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』 東京：むぎ書房 (教育文庫 3)

寺村秀夫 (1992) 『寺村秀夫論文集 I——日本語文法編——』 東京：くろしお出版

Teruya, K. (2007) *A Systemic Functional Grammar of Japanese*. London and New York: Continuum.



# 機能文法による日本語説明モダリティの分析<sup>1</sup>

## A Functional Analysis of the Explanative Modality in Japanese

角岡賢一

Ken-ichi KADOOKA

龍谷大学

Ryukoku University

### Abstract

This paper's main purpose is to analyze the explanative Modality systems of Japanese, using the framework of Systemic Functional Linguistics. The most fundamental dichotomy of Modality would be Modalization and Modulation from SFL. When applying the framework of Modalization and Modulation, we can find many common features in English and in Japanese. The explanative Modality seems to be unique in Japanese, however. Its counterpart can't be found in English. It expresses the speaker's or the writer's strong attitude vis-à-vis the proposition in order to emphasize the assertion. The nature of this explanative Modality seems to be different from those of Modalization and Modulation.

### 1. はじめに

この小論では日本語の説明モダリティを選択体系機能文法(以下では、「機能文法」と称する)の枠組みから、それぞれどのように捉えるかについて考察する。日本語モダリティ分析は、益岡(2001, 2003, 2007, 2012)や仁田(1999, 2009)、野田(1997)など多くの先行研究がある。これらは日本語独自のモダリティ観を形成している。これらの日本語モダリティ分析には、例えばモダリティの定義として「命題に加わる話者の心的態度」というような共通点が見られる。方法論としては、「判断のモダリティ、発話のモダリティ、説明のモダリティ」というような意味範疇から分類していく手法が主流である。これら日本語学者による先行研究を、仮に「日本語学派」と括っておく。

他方で、機能文法の枠組みとしては Halliday (1994), Halliday and Matthiessen (2004)などを出発点とする。機能文法によるモダリティ分析の最大特徴は、モダライゼーションとモジュレーションという 2 つの範疇を立てている点であると考えている。そして機能文法の枠組みで日本語モダリティを分析している例として Teruya (2006)を挙げることができる。英語の枠組みを受け継いでいるため、モダライゼーションとモジュレーションが分析の出発点であるという特徴が見られる。さらに「説明のモダリティ」を叙法に位置づけていることも一大特徴である。次節以下の議論では、このような分析と日本語学

派の分析を対照する。

日本語学において「モダリティ」という用語・概念で研究が進められてきたのは比較的新しく、この30年ほどのことと考えられる。日本語におけるモダリティの体系は、英語における分析とかなり異なる様相を呈する。即ち英語ではモダリティは *can, will, shall, must, may* などの所謂「法助動詞」が出発点であり中心である。これら法助動詞は数が限られているという点から、英語モダリティは比較的単純な体系であると言える。他方で日本語では、モダリティ表現に「だ、だろう、しなければならない」など助動詞を含む複合表現が用いられる点では英語と同様であるが、助動詞等の組み合わせにおいても意味においても英語より遙かに多様である。

もう一点、日本語モダリティ研究に関して興味深い傾向が観察される。それは Heiko (2009), Johnson (2003), Sawada (1995) など英語で書かれた日本語モダリティ研究書が、「のだ」に代表される説明モダリティ(詳細は第3節で検証する)など日本語固有と考えられる枠組みでモダリティ体系を構築していないという点である。例外は Teruya (2006) である。前者は「英語で書かれているから、英語の枠組みをそのまま準用している」という理由ではなさそうである。後者は機能文法の分析手法に立脚するので、日本語学の分析手法とは自ずから発想が異なる。

次節では、機能文法の特徴であるモダライゼーションとモジュレーションについて触れておく。第3節以降で日本語モダリティの下位分類が先行研究でどのように異なっているかを通じて、日本語モダリティの下位範疇について総括する。続いて、モダリティ下位範疇の一つとして「説明のモダリティ」を意味的観点から考察する。Teruya (2006) は説明のモダリティを叙法の一つと位置づけているが、この小論では日本語学派の立場を採ってモダリティ下位範疇の一つであると考ええる。

## 2. モダリティ、モダライゼーションとモジュレーション

この節では機能文法においてモダライゼーションとモジュレーションがモダリティの下位範疇としてどのように位置づけられているかを中心として、それぞれを簡潔に定義していく。

英語におけるモダリティについて、Halliday and Matthiessen (2004: 116) では次のように定義がなされている。

**Modality means likely or unlikely (if a proposition), desirable or undesirable (if a proposal). A proposition or proposal may become arguable through being assessed in terms of the degree of probability or obligation that is associated with it.**

「モダリティ」とは、命題であれば蓋然性があるかないか、提言であれば望ましいか望ましくないかを意味する。命題や提言は、それに関連づけられる蓋然性や義務の程度によって評価されることを通して議論となりうる。

(著者訳)

ここでは、モダリティの定義として「命題」と「提言」から始めているのが特徴的である。下位区分は、命題と提言においてそれぞれ蓋然性と望ましきの有無によって二分されている。このようにモダリティが命題と提言に二分されているのは、モダライゼーションとモジュレーションに直結しているからである。命題には肯否極性があり、肯定と否定の中間的領域も存在する。中間領域では蓋然性(probability)と通常性(usuality)が関わる。これをモダライゼーションと称する。提言における肯否極性とは、肯定の命令文「～しなさい」と否定「～してはいけない」である。この中間領域とは義務性(obligation)と志向性(inclination)であり、これをモジュレーションと称している。

このようにモダリティの下位範疇であるモダライゼーションとモジュレーション、さらにそのまた下位範疇である蓋然性・通常性・義務性・志向性は全て意味的な基準によって区分されている。従って原理的に、この枠組みを日本語に応用することは可能であるように思われる。但し、細かい部分では英語と日本語において分析結果等に違いが生じることを前提とした上である。両言語には、語順を始めとして種々の語彙文法的な差が横たわっているからである。

ここで、上述のような機能文法でのモダリティ分析を日本語に適用した先行研究を見ておく。まずは Teruya (2006: 205)によるモダリティの定義である。

MODALITY ... is the interpersonal manifestation of the semantic domain whose boundaries are defined by the opposition in polarity between positive and negative

モダリティとは、その境界が肯定と否定という相反する極性によって定義される意味的範疇の対人的表明である

(著者訳)

ここで「対人的表明」と表現しているのは、モダリティが叙法という対人メタ機能に関わる範疇であることから自明と考えられる。他方で肯否極性に言及しているのは、Halliday and Matthiessen (2004: 116)において「蓋然性があるかないか、望ましいか望ましくないか」という2極の間に位置づけようという発想である。この定義は、Halliday and Matthiessen (2004: 116)と Teruya (2006: 205)が英語の機能文法による枠組みに根ざしながら日本語にも応用できるという汎用性を示していると考えられる。

次に Teruya (2006: 162)では、日本語の述部とモダリティの関連について次のように言及している。

Unlike English, the Predicator in Japanese functions to specify various

modalities such as probability, obligation and permission, within the systems of MODALIZATION and MODALITY ... and the system of EVIDENTIALITY ...

英語と異なり、日本語では述部はモダライゼーションやモダリティという体系、また証拠性という体系内で蓋然性・義務・許可というようなモダリティを特定する

(著者訳)

英語のように主語と定性部を合わせて叙法部として立て、残余部とに二分するという分析は日本語では適用できない。そこで Teruya (2006: 162)のように、述部がモダリティを具現するというように議論を組み立てたものである。Teruya (2006: 162)ではモダライゼーションとモジュールーションのうち、モダライゼーションについて言及している一方でモジュールーションが欠落している。他方で「モダリティ」という用語が小文字と大文字で併用されている。もしも大文字と小文字の区別を Halliday and Matthiessen (2004: 150)と同様に考えるとすれば、小文字のモダリティは全体を括る広義の意味合いである一方、大文字はモダライゼーションとモジュールーションを指すものであろうか。

Teruya (2006: 213-214)は、日本語のモダライゼーションとモジュールーションを表1と表2のように纏めている。

表1: モダライゼーション-命題

下位分類	肯否極性	
	肯定	否定
能力	することができる	することができない
通常性	することが(も)ある する場合がある	することはない
		しないこともない しないわけでもない
蓋然性	するかもしれない するかもわからない するにちがいない	するとはかぎらない

(著者訳)

表 2: モジュールション-提言

		肯否極性	
		肯定	否定
必要性		しなければならない しなくてはいけない/ ならない/だめだ	してはいけない/ ならない/だめだ
	「必要性」の 経験的理解	する必要がある	
義務	常識的	するべきだ	するべきでない
許可	受容可能性	してもいい	しなくてもいい
期待	推奨、期待	すれば/したら/ するとい	しなければ/しなかつ たら/しないとい
傾向 (志向)	傾向、意図	するつもりだ する気である	するつもりではない する気ではない

(著者訳)

モダライゼーションは能力・頻度性・蓋然性という命題の客観的な側面を扱う一方で、モジュールションは提言に関して必要性・義務・許可・期待・傾向(志向)という主観的側面に分類している。表 1 と表 2 における分類を Halliday and Matthiessen (2004: 116)による英語におけるモダリティの定義とそれぞれ単純に比較してみると、次のような差異が認められる。

1. Halliday and Matthiessen (2004: 116)による英語でのモダライゼーション定義では通常性と蓋然性のみであるが、Teruya (2006: 213-214)では「能力」が加わっている。
2. モジュールションでは、Halliday and Matthiessen (2004: 116)での義務性と志向性の他に必要性・許可・期待という下位区分が加わっている。

英語のモダリティは助動詞一語で表されることが多いので、モダライゼーションとモジュールション全体で4つの下位区分で足りるという事情が考えられるかもしれない。日本語では例えば蓋然性を表すにも「かもしれない、かもわからない、にちがいない」というように助動詞以外の統語範疇を動員して複合表現になるなど、英語よりも遙かに複雑な統語構造であると言える。しかも似たような言い方で何通りにもなるなど、英語と異なった事情もある。この小論では主たる目的が日本語の説明モダリティ分析にあるので、モダライゼーションとモジュールションの下位分類についてはこの辺りで留めておく。

日本語モダリティの定義を、日本語学派の各研究者によって比較してみる。日本語学派は機能文法と異なり、対人的メタ機能から分析を始めるというような方法論を採らない。「命題と話者の心的態度」という捉え方が出発点である。例えば仁田(2009: 4)では、次のように定義されている。

<モダリティ(言表態度)>とは、現実との関わりにおいて、発話時に話し手の立場からした、言表事態一文の対象的な内容—に対する捉え方、および、それらについての話し手の発話・伝達的なあり方を表した部分である。

明確に「命題」と「言表態度」を区別しているという点において、基本的な定義と言えるであろう。次に澤田(2006: 2)では、次のように述べられている。

モダリティとは、事柄(すなわち、状況・世界)に関して、たんにそれがある(もしくは真である)とのべるのではなく、どのようにあるのか、あるいは、あるべきなのかということを表したり、その事柄に対する知覚や感情を表したりする意味論的なカテゴリーである。

これは仁田(2009: 4)に比べると、やや抽象的であるという印象を受ける。全体として命題と話者の評価について言及しているが、その境界が明確であるかそうでないかについてもよくわからない。

最後に宮崎他(2002: 2)から引用しておく。

文は、客観的な事柄内容である「命題」と話し手の発話時現在の心的態度(命題に対する捉え方や伝達態度)である「モダリティ」からなり、モダリティが命題を包み込むような形で階層構造化されている。

ここでは Halliday and Matthiessen (2004: 116)と同様に、「命題」と「心的(言表)態度」への二分を明確に打ち出している。ここで言う「階層構造」とは、益岡(2007: 3)や仁田(2009: 3)で考えられている構造を指すものであろう。階層構造を端的に図示したものとして、仁田(2009: 3)から「日本語の意味-統語構造」と題した図を引用しておく。

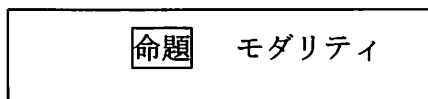


図 1: 仁田 (2009) でのモダリティ/命題階層

この図は、宮崎他(2002: 2)でも指摘されているように「モダリティが命題を包み込む」—つまり、命題は発話の核心なす一方でモダリティは「周辺の領域」を占める—という関係概念を表している。

益岡(2012: 4-5)では命題を「中核命題の領域」と「時空間の領域」に、モダリティを「判断のモダリティの領域」と「発話のモダリティの領域」にそれぞれ二分割している。ここでは、下位区分は4つである。これを図示すれば、以下ようになるであろう。

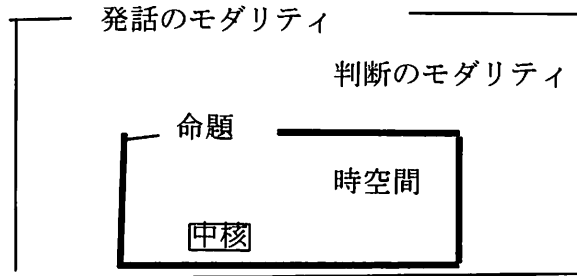


図 2:益岡 (2012) でのモダリティ階層区分

図 2 では、命題を太枠で囲んだ。この 4 区分においては、命題がさらに「中核」と「時空間」に細かく分けられている。モダリティも 2 種類に下位区分され、「発話のモダリティ」が最周辺部に位置するように示されている。

以上、日本語モダリティについての先行研究における定義を概観してきたが、発話を命題と言表態度(モダリティ)に二分割するというのが最大公約数的共通点であるように思われる。これはまた、日本語モダリティ研究に特有である方法論とも言えるであろう。研究者によっては、命題と言表態度をさらに細かく区分する場合もある(例えば、益岡(2012))。機能文法による英語モダリティの定義(Halliday and Matthiessen, 2004: 116)は命題を自明のこととして扱い、話者の言表態度をモダライゼーションとモジュレーションに区分するところから出発していると考えられる。

### 3. 日本語モダリティの下位範疇

本節では、日本語モダリティの下位範疇をどのように組み立てるかという問題に論を進める。

日本語のモダリティ分析は、意味範疇を区別する接近法が主流である。これは、機能文法においてモダライゼーションとモジュレーションに区分する方法論と根本的に異なる。日本語においてモダリティの下位区分をどのように立てるかについては、見解は研究者毎に異なっている。

益岡(2007: 5)では、日本語モダリティを次のように下位区分している(原著では「特殊なモダリティ」以外すべて「～のモダリティ」という表示であったが、以下では「のモダリティ」を略して記す)。

- ・判断—真偽判断、価値判断
- ・発話
  - ／ 発話類型
  - ＼ 対話—丁寧さ、対話態度
- ・特殊なモダリティ—説明、評価

ここでは大区分として、「判断、発話、その他」という 3 類型を立てていると考えられよう。その 3 つでは判断と発話に関わるものが無標であり、説明と評価は有標と考えられているようである。三大区分は、下位区分では 7 つに細分化されている(判断が 2、発話が 3、特殊なモダリティが 2)。「説明のモダリティ」は判断や発話のモダリティとは異なって、有標な部類に分類されているようである。

次に日本語記述文法研究会<sup>2</sup>(2003: 8-15)であるが、ここでは評価・認識・説明・丁寧さ・伝達という 5 区分に表現類型を組み合わせる表に纏めている。この表はモダリティを単に下位分類するだけではなく、2 次元的に組み合わせる構成要素同士の共起制限などを考察しようという試みで興味深い。しかし本小論の目的がそのような下位分類について細かく追求することではないので、この課題については別の機会に譲る。「説明のモダリティ」が主要な 5 区分の一つとして立てられていることは注目に値する。

仁田(2009: 20)は、日本語モダリティ全体を発話・伝達と事態目当てという 2 つに大区分している。事態目当ては、認識・(当為的な)評価・意志願望的把握という 3 つに下位区分している。認識モダリティの下位区分に判定と説明のモダリティがある。これを図示すると、以下のようになるであろう。

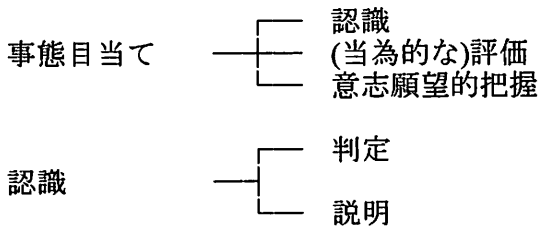


図 3: 仁田 (2009) による日本語モダリティ体系

宮崎他(2002: 15)は、日本語モダリティの全体像を次のように図示している。大区分が 3、それぞれに下位区分が 2 つずつ設けられて小区分としては六つが立てられている。

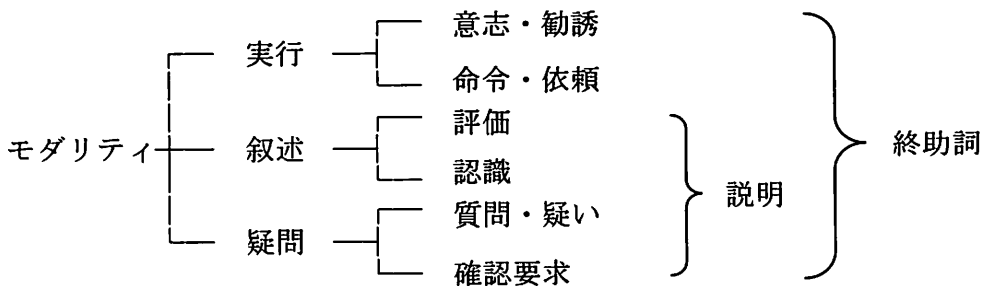


図 4: 宮崎他 (2002) による日本語モダリティ体系



注目すべきは「説明のモダリティ」を叙述と疑問の双方に跨がる範疇として、大区分や小区分と別立てになっている点である。「終助詞」という統語範疇が六つの小区分全てを対象としているのも、同様の趣旨で興味を引く。つまり意味的な下位範疇は実行・叙述・疑問の3つであり、説明のモダリティは平行して立てられている<sup>3</sup>。これは益岡(2007: 105)においても同様であり、「かくして、説明のモダリティは、判断のモダリティと発話のモダリティの階層のどちらか一方に位置づけられるのではなく、両方の階層に跨がるものと考えられる」と述べられていることで傍証されよう。

澤田(2006)は日本語と英語の対照研究を主眼としているが、日本語モダリティは認知的・存在的・束縛的という3区分である。この考え方は、上記の益岡(2007)や仁田(1999, 2009)、日本語記述文法研究会(2003)とはかなり異なっている。その原因は、章立てなども英語助動詞に立脚している部分が多いことに求められそうである。即ち「英語におけるモダリティ研究で助動詞を出発点とする接近法を採用する限り、日本語を分析する手法とは自ずから異なる」という傾向が窺えるのである。

Teruya (2006: 161-194)は、対人メタ機能の枠組みにおいて叙法(Mood)とモダリティを論じている。日本語学の枠組みと大きく異なるのは、叙法という考えをモダリティの上位に置いているというのが第一点である。そして日本語の叙法体系という観点からは、英語の体系とも異なる。つまり日本語においては、定性などを担うのは節末の述部である。Teruya (2006: 161-194)の見出しに沿って、叙法の下位区分を列举してみる。

叙実法<sup>4</sup>: 叙述、疑問

説明法

命令法: 要求、提案、禁止、要望、申し出、願望

ここでは、説明を叙実法や命令法と並ぶ位置に並べていることになる。この考え方は、次のような理由から受け入れがたい。叙実法や命令法はそれぞれ、「命題についての客観的陳述」「聞き手に対する話し手の「～しなさい」という命令」という意味を持っている。両者は、統語範疇という括り方でもある。しかし「命題や提言に関して、話者の主観を交えて説明を加える」というのは極めて語用論的な機能であり、叙実法や命令法と同列に論じること異種の範疇が混在しているように思われる。これ以降の議論では Teruya (2006: 161-194)の分類を踏まえて、説明「モダリティ」というように括弧付きで言及する。Teruya (2006: 161-194)のように説明を叙法に位置づける方法論の利点としては「わけなのだ、ものなのだ」というように「わけ、もの」と「のだ」を重ねることについては説明がしやすいことが挙げられる。

もう一点 Teruya (2006)において特徴的と考えられるのが、終助詞を「干涉詞」(Negotiator)と扱っていることである。次に、その具体例を Teruya (2006: 175-178)より引用する(漢字表記と終助詞部の下線は著者による)。

- (1) 明日、誰が行きますか
- (2) カメラはどこにあるの
- (3) 何を食べたのかい
- (4) いつシドニーに来るんですか
- (5) どうやってここまで来ましたか
- (6) うん。これだけ皆さんがベント乗ってるんですから

(1)から(5)までは疑問文の例として挙げられていたので、いずれも意味的には質問の意図を表すものである。下線を施してある終助詞によって質問の意図が示されていると言える。(6)では節末の「から」は理由を述べているが終助詞ではない。言い切りでなく、完結していない節末である。これは白川(2009)の謂う「言いさし文」である。図5において終助詞が複数のモダリティに跨がる範疇として挙げられていたことから、日本語の対人的側面には「か、の、ね、よ、ぞ」などの終助詞が欠かせないことは明らかである。この点から日本語モダリティを論じるに際しては、終助詞を正當に扱う必要があるだろう。

ここまでは日本語モダリティを意味範疇によって分類してきた。ここで日本語の付加詞について触れておく。益岡(2007)の第8章は「付加部のモダリティ」と題されているが、副題が「評価のモダリティ」である。この副題によって、付加詞が評価のモダリティと深く関わっていることが示唆されている。まず形式一節における位置であるが、次のような3類型に区分することができる。c.の節中のみ、実例を益岡(2007: 113)より引用して該当部に下線を附す。

- a. 節頭 「たぶん、ひょっとすると、きっと、どうやら、なんでも、むろん、あいにく、さいわい、幸か不幸か、残念にも」
- b. 述部 「あいにくだった」
- c. 節中 「収容されている患者たちは、厳密に言えば、患者でさえない、いわば長逗留の旅行者である」

これら評価のモダリティに関わる付加詞は、節における位置として冒頭・述部(節末)・途中のどこにでも出現できるという結論が得られる。他方で意味的側面からは判断階層と発話階層に属するモダリティとして益岡(2007)は、真偽判断・判断・評価・発話類型・発話様式と五種類を立てている。

このような評価のモダリティは、英語でも分析されている。Halliday and

Matthiessen (2004: 121-134)は、法付加詞について議論している。大区分としてモーダル付加詞があり、下位区分で法(mood)と評価(comment)の2つを立てている。紙幅の関係で細かく紹介できないので、以下では評価に関わる付加詞を並べてみる。この類は、naturally, obviously, wisely, truly, franklyなどの文副詞である。次の表はHalliday and Matthiessen (2004: 130)の表を簡略化したものである。

表3: Halliday and Matthiessen (2004: 130)による文副詞の例

命 題	全体に	断言	naturally, obviously, doubtless
		性質	unsurprisingly, evidently, presumably, luckily
	主語に	賢愚	wisely, foolishly
		道德	rightly, wrongly
発 話 機 能	非限定	説得	truly, admittedly
		事実	actually, really, in fact, as a matter of fact
	限定	有効性	generally, broadly, roughly, ordinarily
		個人的 関わり	frankly, candidly, to be honest, confidentially, personally, for my part, truly, tentatively

(著者訳)

ここで挙げた副詞類は、元の表で列挙されていた数の数分の一に過ぎない。また表での分類も、左から4・5列目は省略した。それにしても多様な文副詞類が分類されているものである。ここでは下位区分は、意味によってなされている。これらの語類は、日本語モダリティで「評価」と分類される区分に属するように考えられる。

このように日本語モダリティ分析においては、判断・説明・発話・認識というように意味範疇によって下位区分することが一般的である。次節では、日本語モダリティの下位区分として最も特徴的であると考えられる説明モダリティについて論じる。

#### 4. 日本語の説明「モダリティ」

前節で見たように、日本語モダリティの下位区分では研究者毎に千差万別の扱いであった。一つ特徴的と考えられるのは、Heiko (2009)やJohnson (2003)、さらにはSawada (1995)のように英語で書かれた文献には「説明のモダリティ」を独立した範疇として立てていないという共通点が見られるという点である。これは即ち、英語における助動詞を出発点とする接近法には「説明のモダリティ」というような発想が起こりえないという傾向の示唆であるように考えられるのである。例外はTeruya (2006)である。同書は機能文法の枠組みで日本語モダリティを論じているというのが一大特徴であること

に加えて、説明モダリティを独立した見出しで扱っている。但し Teruya (2006: 161-194)が示したように、モダリティよりも上位範疇である叙法の一部として扱っていた。

翻って仁田(1999, 2009)や益岡(2007, 2012)というように、日本語から出発したモダリティ研究では「説明のモダリティ」は柱の一つとして位置づけられている。これは英語から出発するか、日本語独自の視点で一貫するかという接近法の差に帰結できる可能性を指摘しておく。

まず、説明のモダリティを各研究者がどのように定義しているかを比較してみる。宮崎他(2002: 230)では、次のように定義されている。

〈説明〉のモダリティとは、典型的には、先行する文で示された内容が聞き手にわかりやすくなるように、〈事情〉〈帰結〉などを後の文で示すものである。

説明のモダリティについて、宮崎他(2002: 230)は基本的に定義ができているものと考えられる。「事情」と「帰結」に〈 〉を附しているのは、専門用語として扱っているという意味であろう。

先行研究に共通しているのは説明のモダリティを、「のだ、ものだ、ことだ、わけだ」という文末表現で具現される形式として考察している点である。これらは事態を名詞化し、命題として客観化する手段でもある。上掲の宮崎他(2002: 230)は意味論的観点からの定義であり、益岡(2007)における「拡大名詞文としてのノダ」という捉え方は統語的な側面が強いと言えよう。

宮崎他(2002: 15)が示したように、説明のモダリティを叙述と疑問に跨がる領域として表示していた。他方で第4部「テキスト・談話とモダリティ」に一章を設けて説明のモダリティを扱っている。宮崎他(2002: 229)では、この並列関係について次のような説明がある。

モダリティの中には、本書の第3部(引用者註: 第1部は実行のモダリティ、第2部は叙述のモダリティ、第3部は疑問のモダリティという構成である)までで取り上げたモダリティと共起・共存しながら、テキスト・談話のレベルで機能するものがある。

この説明によって、説明のモダリティが叙述と疑問という2領域双方に係る並列関係として宮崎他が捉えている様子が窺える。「共起・共存関係にある」という捉え方が、英語においては法助動詞を中心としてモダリティ理論が組み立てられている接近法との決定的な違いと言える。

最後に Teruya (2006)において、説明を叙法に位置づけている点について検討を加える。Teruya (2006: 161-194)が示したように、説明「モダリティ」を叙実法や命令法と同格の位置に並べている。「説明法」は同書の英語原文では *explanative mood* と称され、「説明という意味が付加された命題」(*propositions with an added meaning of 'explanation'*)というようにごく簡単な定

義がなされている。例として「途中で事故があったんです」を挙げ、「遅れてきた理由の説明にできる」と補足している(Teruya, 2006: 174-176)。「あったんです」の「ん」は元来が「の」であるから、「のだ」表現の一変種と言える。このような説明の機能を、Teruya (2006: 161-194)が示したようにモダリティと捉えずに叙法の一部として位置づけているのである。日本語の説明モダリティを別個に独立して位置づけている点は、機能文法に立脚する研究者の中でも稀有の存在と考えられる。但し叙法の一つと捉えるか、モダリティの下位範疇として位置づけるべきかは疑問が残る。

そしてモダリティを具現するために「わけ、ところ、もの」という統語範疇 3 つを挙げ、「説明的名詞」と括っている。これらは、いずれも元を辿れば「訳、所、物」という形式名詞である。他方で「のだ」における「だ」は助動詞であり、叙法部の表現であることと区別している。その違いは「わけなのだ、ものなのだ」というように「わけ、もの」が「のだ」によって補強されるという統語的側面に求めている。益岡(2007)など日本語学の伝統に立脚すると考えられる枠組みでは、「わけ、もの」をモダリティ分析の対象とする一方で「ところ」は対象外としているように思われる。

次に説明「モダリティ」について、具体例を挙げながら分析していく。

益岡(2007)では、説明のモダリティに 1 章が充てられている。第 1 部第 7 章で「のだ」「わけだ」「(という)ことだ」「ものだ」、否定形式というように節が立てられ、第 5 節は意味的階層構造における位置づけが論じられている。第五節で「拡大名詞文」という名称の下で、次のような構造が定義されている(益岡 2007: 104)。

XハY { ノ / ワケ / コト / モノ } + ダ  
(Y の部分に述語を取る)

つまり日本語には説明のモダリティとして「のだ、わけだ、ことだ、ものだ」という 4 種類があり、益岡(2007: 104)はそれを構造化したものと言える。

益岡(2007: 104)では「のだ、わけだ、ことだ、ものだ」を同列に扱っていると考えられる。これに対して Teruya (2006: 176)は「のだ」をモダリティではなく 1 段上位の叙法という枠組みで扱うことに加えて、「わけ、もの、ところ」はモダリティであると位置づけている。これは、日本語学で主流と考えられる考え方とかなり異なると言える。つまり日本語学ではモダリティ一本で分析しようとしているところを、Teruya (2006)は叙法とモダリティという 2 段階に階層化しようとしている。

ここで「のだ」の統語構造について考察してみる。野田(1997: 12)では、「(の)だ」は、名詞化の機能をもつ準体助詞の「の」に「だ」が後接し、それが一語化したものだ」と述べられている。「の」が名詞的機能を帯びているという考え方は本小論においても極めて重要であり、議論の核心を形成する。つまり「のだ」の「の」は「わけ、もの、こと」と近い性質を持っていると言える。例えば「～のだ」は、ほぼ自動的に「～ということだ」と言

い換えることができる。そうすると Teruya (2006)で論じられている「のだ」叙法説への反証となる。

ここから「わけなのだ、ものなのだ」に加えて「ことなのだ」の用例を検証してみる。これらは「わけ、もの、こと」という名詞に断定の助動詞「だ」の連用形「な」が後続し、準体助詞「の」と断定の助動詞終止形「だ」という構成と分析しておく。言い切りはそれぞれ「わけだ、ものだ、ことだ」という形である。角岡(2012)では「のだ、わけだ、ことだ、ものだ」について、否定形も含めて用例を挙げた。その際に使用したのが、国立国語研究所によって作成された1億語規模の現代日本語書き言葉均衡コーパス「少納言」である。以下では、このコーパスから「わけなのだ、ものなのだ、ことなのだ」の例を検索してみる。「わけなのだ」は57件、「ものなのだ」は791件、「ことなのだ」は972件が該当した。それぞれ2件ずつ引用する(下線は著者による)。

- (7) 「同じ霊長目の他の科と比べて、人間と類人猿には大きな違いがないのだから」というわけなのだ。ヒトとゴリラを比較すると、酷似する点が見つかるだけでなく、、、(ジェフリー・シュワルツ(著)/ 渡邊 毅(訳)『オランウータンと人類の起源』 河出書房新社、1989年)
- (8) レストランでのように給仕係がサービスするのではない。身内の家庭食卓というわけなのだ。魚料理のあとで、またお皿が取り替えられる。今度は肉のコースだが... (小塩 節(著) 『トーマス・マンとドイツの時代』 中央公論社、1992年)
- (9) 悔んでいるというよりは、彼にとってすれば、草や木を相手に語りかけているようなものなのだろう。事実、室長もひとり言をつぶやくような調子で話しはじめた。(杉山 隆男(著) 『日本封印』 小学館、2001年)
- (10) そうした世界について話をしているのだ。一大事というのは、つまりそういうものなのだ、ということです。さて、「勿交渉」といったその根拠を臨済和尚は示そうとします。(里道 徳雄(著) 『臨済録 禅の神髄』 日本放送出版協会、1995年)
- (11) 家のことに必ず影響は出るので。それは、社会に出ている夫が一番良く知っていることなのだ。夫は仕事のために家庭を犠牲にし、妻は家庭のために自分を犠牲にする...。(齊藤 勇(著) 『会社は好きなことをするためにある 「働く」から苦しい、「天職」なら楽しい』 中経出版、2003年)

- (12) 憑依者は、はなはだしく自己を顕示するのである。神と交流している以上、当然なことなのだろう。宇佐八幡宮の託宣(神託)集という本がある。十三世紀末、神宮に付属する...(司馬 遼太郎(著)『街道をゆく』 朝日新聞社、1990年)

(9)と(12)は「だろう」が続くが、他は言い切りで「なのだ」が節末である。このように「のだ」が必ずしも節末でないという事実も、説明を叙法と位置づけることに対して反証材料になりそうである。いずれの例においても、下線部を加えることによって説明的意味合いが濃くなっている様子が明白である。例えば(11)で下線部にかかる節を、仮に「それは、社会に出ている夫が一番良く知っている」と言い切りしてみよう。読者には「知っていることなのだ」の方が、説得力があるように思われるであろう。言い切りの方が説得力に欠けるといふ、一見矛盾するような修辞学的効果が出ている。言い切りは、読者に与える印象が妙に不安定である。「知っていることである」としても、「知っていることなのだ」とほぼ同等の修辞的効果が認められる。つまり「ことである、ことなのだ」という説明モダリティは、聞き手または読み手に対して説得力を生じるのである。

また(7)から(12)の「なのだ」をすべて「だ」に置き換えたとしても、説明という意味合いは基本的に変わらないと思われる。例えば(7)で下線部を「身内の家庭食卓というわけだ」と変えても、基本的な説明の意味合いは同様である。このことから、「わけだ」と「わけなのだ」の違いは、筆者の修辞的な主観もしくは好みによると言えそうである。但し「わけなのだ」と2重モダリティにすると、文体として濃密過ぎるとも言えよう。角岡(2012)では少納言の検索で「わけだ」が5,000件余り、「わけです」が16,000件余り該当したのに対して「わけなのだ」が僅かに57件というのは、そのような文体上の違いを反映した結果であろう。

次に同じく少納言から「ところなのだ」の例を引いてみよう。98件が該当した(下線は引用者)。

- (13) しかもこれもまた、すこぶる格が上の本である勅撰和歌集の見せ場のところなのだ。何しろこの詞書を書いたのは『千載』の撰者、藤原俊成で、勅撰集となればいい加減に...(丸谷 才一(著)『文章読本』 中央公論社、1977年)
- (14) 藤吉郎の人物に、捨てがたいものがあると眺めているからだった。「もう、一と押しのところなのだが」と、藤吉郎は柄になく、顔を赤らめた。「まかしておけ」利家は胸をたたいた。(戸部新十郎(著)『前田利家』 光文社、2001年)

このように、「わけ、もの、こと」と同じように「ところ」も形式名詞という語源から説明モダリティへと転用されたと考えられそうである。(13)で

「見せ場のところ」というのは、「ところ」に本来の「場所」という意味合いが残っているとと言えるかもしれない。しかし(14)で「一と押しのところ」となると、「到達度合い」というような抽象的な意味合いのように読み取れる。

以上この節では、益岡(2007: 104)で挙げた「のだ、わけだ、ことだ、ものだ」に加えて「ところだ」も説明「モダリティ」として分析した。書き言葉コーパスから実例を検索した結果からは、命題に対して書き手が「説明を加えたい」という心理が働いているという動機が共通して見られる。日本語学派が概ね説明モダリティを日本語モダリティ体系において不可欠な要素として位置づけていることは明白である。これを受けて本小論でも、説明モダリティを体系づけることが必要であると考えられる。このような説明モダリティを、機能文法におけるモダライゼーション-モジュレーションという枠組みにどう位置づけるかというのは大きな課題である。現段階においては、モダライゼーションとモジュレーションというのが英語の助動詞を前提とした統語範疇下での区分であるのに対して、日本語の説明モダリティは話者または書き手が命題をどのように捉えているかという心的態度の表明であるという指摘に留めておく。

## 5. 日英語モダリティ体系の比較

この節ではこれまで検証してきた日本語のモダリティ体系を英語の体系と比較対照して、機能文法の枠組みにとってどのような知見が得られるかを考えてみたい。

法助動詞や付加詞という統語範疇は、日本語モダリティにおいても意味分析の前提として考察の対象になってきた。日本語学においては、例えば法助動詞を「～しなければならない」という拘束(義務)や「～かもしれない、～に違いない」(認識)というように単純に割り切るだけでは不十分であるという捉え方をしていると考えられる。一つには、英語では助動詞 1 語(must)で表せる表現が日本語では「なけれ+ば+なら+ない」というように非常に複雑な構造であるという原因がある。また説明「モダリティ」に到っては、英語でこれに対応する表現が乏しい(付加疑問など、ごく少数に限られる)という事情もあるであろう。

日本語のモダライゼーションは表 1 で、モジュレーションは表 2 で一覧にした。ここでは日本語のモダライゼーションとモジュレーション表現に対して、英語でどのように対応するか横に並べてみる。



表 4: 日本語と英語におけるモダライゼーション・モジュレーションの対応

することができる／できない	can / can't
すること(場合)が(も)ある	may
することはない	never
するかもしれない	may
するにちがいない	must
するとはかぎらない	not always
しなければならない／する必要がある	must
してはいけない	mustn't
するべき／べきでない	should / shouldn't
してもいい／しなくてもいい	may / needn't
すればいい／しないといい	should / shouldn't
するつもりだ／する気ではない	will / won't

一瞥してわかるように、日本語と英語は概ねよく対応している。モダライゼーションやモジュレーションというのは普遍的な意味範疇であると考えられるから、日本語と英語に限らず、他の言語においてもこのような表現は日常的に頻繁に見られるはずである。日本語と英語を比較すると、統語的な分析からは次のような特徴を見いだせる。即ち表 4 のような意味範疇においては、英語は基本的に助動詞一語で言い切っている。否定詞 *not* を伴ったとしても 2 語である。ところが日本では、最も単純な「べき+だ、つもり+だ」でも 2 語、「なけれ+ば+なら+ない」となると 4 語である。「なければならない」などは拘束的意味の表現としてはごくありふれた言い方であるにも拘わらず、統語分析では非常に複雑になる。意味としては比較的単純なモダライゼーション・モジュレーション類を表すのに、日本語の統語分析がこのように複雑であるというのは興味を惹かれる。

表 4 で英語表現の統語範疇を見てみると、*never*, *not always* を除けば全てが助動詞である。例外の *never*, *not always* は副詞と考えられる。これもやはり、英語のモダリティは助動詞を中心とする比重が大きいということの裏付けになるであろう。

次に、付加詞について日本語と英語を比較してみる。命題に対して話者が評価を下すのが付加詞のモダリティであるが、これも言語横断的で普遍的な考え方であると言えよう。そして「命題について、どのような評価を下すか」ということについても、ある程度普遍性が認められそうである。これは、取りも直さず意味範疇の次元で論じなければならない。Halliday and Matthiessen (2004)における付加詞の下位分類は上述のような意味を基盤として、かなり細かく区分されている。英語では、法助動詞と同様に「文副詞の類でも一語で簡潔に話者の評価を表現できる」という状況が窺える。日本語においても益岡(2007: 113)で挙げられている節頭副詞類で「たぶん、ひょっとすると、きっと、あいにく」などは一語で独立している。この点は、英語

の文副詞と共通点が認められる。

結論としては、日英両言語において助動詞と付加詞というのはモダリティを表す統語範疇として存在するという共通点が挙げられる。しかしながら意味的範疇で比べてみると、機能文法ではモダライゼーションにおける通常性と蓋然性、モジュレーションにおける義務性と志向性に対して日本語学派(特に益岡(2007)の枠組みに準拠するとすれば)の判断/発話/説明/評価という大きな差異が生じる。この差異は、機能文法が助動詞という統語範疇から分析を始めているのに対して日本語学派は話者(書き手)の心的態度という意味範疇を分析の起点としている方法論的な部分が大きいと言えよう。

## 6. 結び

ここまで日本語のモダリティ体系、とりわけ説明モダリティについて統語的・意味的にどのように位置づけるかという分析を試みてきた。さらにこれを英語のモダリティ体系と比較してみた。全体としてはモダリティに関して、両言語における共通点と相違点が浮き彫りになりつつあるように思われる。特に法助動詞と法副詞という範疇では、両言語で意味的に重なる部分が多かったと言える。

機能文法でモダリティをモダライゼーションとモジュレーションに二分するのは、日本語学派で発話を命題と話者の心的態度に二分した後に後者をモダリティとして分析することに対応すると考えられよう。このように解釈すれば、機能文法と伝統的日本語学の接点が見い出せそうである。

その反面、両言語における分析手法の違いは大きい。日本語モダリティを分析するに際しては、話者または書き手がどのように命題を捉えているかという意味的分析を出発点とする必要がある。その理由は日本語のモダリティ体系においては、モダライゼーションやモジュレーションに係る表現が統語的に複雑極まりない構造になっているという点である。付け加えるとすれば「そもそも日本語学の枠組みにおいては、叙法を位置づける必然性が乏しい」という背景が考えられる。反面で英語におけるように、主として助動詞という統語範疇で分析できる言語においては機能文法の枠組みは有効であろう。

一つの可能性として、日本語の説明モダリティを機能文法の枠組みで体系づけるとすればモダライゼーションとモジュレーションと同じ位置づけにするという仮定を試みる。概念的にこれを図示すると、次のようになるであろう。

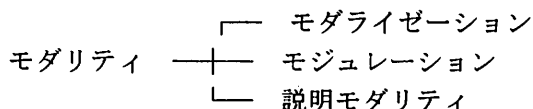


図 5: 説明モダリティの体系化

これは説明モダリティが意味的にモダライゼーションともモジュレーションとも異なる点に着目し、別個の独立した範疇として立てるという考え方である。

もう一つの可能性は図 5 を単純化したもので、説明モダリティをモダライゼーションもしくはモジュレーションのいずれかに取り込んで仕舞うという考え方である。モダライゼーションは蓋然性か通常性か、モジュレーションは義務性か志向性かという括り方をしていたことからすると、説明モダリティはモダライゼーションに近いと考える方が妥当であると現段階では考えておく。

ここまでは説明モダリティを日本語固有と捉えてきたが、英語にも部分的に説明モダリティと考えられる表現がある。それは一般に「擬似分裂文」と呼ばれる *it ... that* という形式である。例として例文(5)の「それは、社会に出ている夫が一番よく知っていることなのだ」を英語に対応させてみよう。

(5') It is what husbands, who work outside their homes, know better than anyone else (inside homes).

(筆者訳)

このように擬似分裂文においては強調したい語を *it is ...* という形式で前置することによって、話者(または書き手)の意図を文法形式に具現している。これは日本語における説明モダリティに対応していると考えられる。例文(5')を機能文法の観点、特に意味論から分析すれば英語においても説明モダリティを体系化することに繋がる可能性があるだろう。

## 註

<sup>1</sup> 本論文の査読を担当いただいた匿名の評者から有益な指摘を多数、受けました。ここに記して謝意を表します。本論文に関しての誤謬などは筆者の責任に帰されます。本研究は、2012~2013 年度の龍谷大学国際社会文化研究所共同研究の補助を受けています。課題:「機能文法の枠組みによる日本語モダリティ研究」

<sup>2</sup> 日本語記述文法研究会は、巻末に執筆者として次の五人が挙げられている(五十音順)。安達太郎、雨宮雄一、高梨信乃、野田春美、宮崎和人。

<sup>3</sup> 同書 15 ページでは、このような分類について以下のように断りが述べられている。「なお、この枠組みは、多分に記述の便宜を考慮したものであって、モダリティ

の体系についての、我々の最終的な考え方を提示したものではない。」(以下、略)

<sup>4</sup>「叙実」という用語は澤田(2006)を踏襲している。「叙述」という語は一般的であるが、「事実を客観的に記述する」という意味を包含した用語として採用した。

## 参考文献

- Halliday, M.A.K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar*. 2nd ed. London: Edward Arnold.
- Halliday, M.A.K. and Matthiessen, C.M.I.M.. (2004) *An Introduction to Functional Grammar*. 3rd ed. London: Arnold.
- Heiko, N. (2009) *Modality in the Japanese Language*. Amsterdam: John Benjamin.
- Johnson, Y. (2003) *Modality and the Japanese Language*. Ann Arbor: Center for Japanese Studies, University of Michigan.
- 角岡賢一 (2012) 「日本語説明モダリティとその否定形式について」『龍谷紀要』34(1): 15-31
- 益岡隆志 (2001) 「説明・判断のモダリティ」『神戸外大論叢』52(4)
- 益岡隆志 (2003) 『三上文法から寺村文法へ』東京: くろしお出版
- 益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探求』東京: くろしお出版
- 益岡隆志 (2012) 「現代日本語のモダリティをめぐって一文の意味階層構造の観点から」関西外国語大学(編)『平成 23 年度科学研究費補助金によるモダリティワークショップ予稿集』1-14
- 宮崎和人、安達太郎、野田春美、高梨信乃(2002)『モダリティ 新日本語文法選書 4』東京: くろしお出版
- 中右実 (1979) 「モダリティと命題」『英語と日本語と』東京: くろしお出版
- 日本語記述文法研究会(編) (2003)『現代日本語文法 4: 第 8 部モダリティ』東京: くろしお出版
- 仁田義雄 (1999) 『日本語のモダリティと人称』(増補第 2 版)東京: ひつじ書房
- 仁田義雄 (2009) 『日本語のモダリティとその周辺』東京: ひつじ書房
- 野田春美 (1997) 『の(だ)の機能』東京: くろしお出版
- Sawada, H. (1995) *Studies in English and Japanese Auxiliaries—A Multi-stratal Approach*. Tokyo: Hituzi.
- 澤田治美 (2006) 『モダリティ』東京: 開拓社
- 白川博之 (2009) 『「言いさし文」の研究』東京: くろしお出版
- 高梨信乃 (2010) 『評価のモダリティ 現代日本語における記述的研究』東京: くろしお出版
- 田野村忠温 (2002) 『「のだ」の意味と用法 現代日本語の文法 I』東京: 和泉書院
- 武内道子、佐藤裕美(編) (2011) 『発話と文のモダリティ 対照研究の視点から』東京: ひつじ書房
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』東京: くろしお出版
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』東京: くろしお出版
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味 III』東京: くろしお出版
- Teruya, K. (2006) *A Systemic Functional Grammar of Japanese*. London: Continuum.
- 角田三枝 (2004) 『日本語の節・文の接続とモダリティ』東京: くろしお出版

# Two Characteristics of the Essay as a Genre

Akira Ishikawa  
Sophia University

## Abstract

Although the essay is considered as a literary genre, its diversity as to themes, styles, and size makes it difficult to give a satisfactory definition which can explain its perception in a unitary manner. This paper attempts to present two approaches to characterizing the essay. One approach uses the distinction between internal and external conjunction, which is discussed in Martin and Rose (2007: 115-152), to distinguish between non-fictional prose mainly concerned with recording historical facts, whose representative is the diary, and that with a different concern such as the essay. That essays are not chiefly concerned with the recording of facts is generally reflected in their abstinence from external conjunction, leading to their general impression of desultory progression of topics and informality. The second approach tries to shed some light on these apparent traits of essays by comparing them with scientific writing, which is defined by Halliday and Martin (1993). It is hypothesized that essays have a diametrically opposite stance toward “complex conceptual structure and thread of argument”. We will illustrate the two opposite stances of essays and scientific writings by contrasting how explanation by means of analogy is presented to the reader in the two genres.

## 1. Introduction

Although the name was coined by Montaigne and Bacon in the 16<sup>th</sup> century, the essay, as a non-fictional literary genre of writing, has been practised since ancient and mediaeval times both in the East (Sei Shonagon and Yoshida Kenko) and the West (Seneca, Cicero, and Plutarch), suggesting the existence of a text type with an open-ended character. Yet if we try to define the genre in the functional terms of Martin and Rose’s (2008) Genre Relations framework, we find similar problems to those treated by Eggins and Slade (1997) when they present a comprehensive theory of casual conversation. Casual conversation exists as a firmly established social institution, but compared with other types of conversational exchanges, it lacks any immediate specific task to be accomplished through the exchange. It is spontaneous in the sense that it results from natural impulse instead of being forced or caused by some external requirements:

At other times we talk simply for the sake of talking itself. An example of this is when we get together with friends or workmates over coffee or dinner and just “have a chat”. It is to these informal interactions that the label casual conversation is usually applied. (Eggins and Slade, 1997:6)

Unlike those genres which belong to the four genre families, stories, histories, reports & explanations, and procedures & procedure reports, essays do not seem to be restricted to any specific purpose. The subject treated in an essay can range from observations on ordinary everyday scenes to analyses of sociological, political and philosophical issues based on factual data, although the latter may constitute one extreme edge of the vast expanse of topics dealt with in essays. It is not just the enormous variety of themes but also the range of ways in which a theme may be discussed in the essay which makes one wonder whether we are justified in setting up the genre of the essay. As it seems that the essay does not squarely belong to any of the four genre families, it may be worth considering the possible relations it can have with them. Casual conversation, as studied by Eggins and Slade (1997), may provide us with a good guide in this regard because (1) it contrasts with other more transactional and purposeful conversational genres, (2) it may also comprise some clearer genre components such as stories, gossip, joking, sending-up, etc. and (3) it is not so much concerned with a record of events as with an interpretation of various entities.

In order to illustrate some of the initial traits of essays that indicate the direction of this investigation, we consider a short essay entitled “copula”, written by Quine (1987)<sup>1</sup>, to which sentence numbers are added so that they can be identified later<sup>2</sup>.

Despite the title, which induces an expectation of a report on the copula in the reader, this essay’s focus centers around the absence of the copula, which is clearly **a deliberate shift in focus from the initiated topic**. In essays, deviation from an ongoing topic is the norm rather than the exception. The reader has the impression that he is led from one topic to another rapidly although the consecutive topics are ideationally linked through lexical chains of taxonomic and componential relations. This impression of **desultory progression** is in sharp contrast with how the text unfolds in a report, where the focused item is classified and described without ever being backgrounded. A third trait is the use of an episode which suggests a **tone of informality**. As we will examine later, this trait is related to or may be subsumed by a broader characteristic of **naturalness**, roughly in the sense of being free from institutional restrictions associated with text development. Essays indeed often make a point of renouncing formally prescribed formats of argumentation, which is reflected in the impression of desultory progression. The episode described by sentences 12 and 13 implies a relaxed attitude in the exposition on the part of the author, who is a renowned logician and philosopher. The last paragraph (sentence 17 to sentence 20) exemplifies another point related to naturalness which might be termed **non-alignment**. In the paragraph, a theory on the semantic contribution of the copula (*a shade of meaning*) to the progressive aspect in English is presented as a corollary to the optionality of the copulative verb because of its lack of semantic contribution. The exposition is like a sketch and leaves a great deal to the reader’s discretion and responsiveness. In other words, it does not try to persuade the reader of the validity of the theory. In fact, it seems to be a characteristic of essays that they present thoughts but do not particularly try to win the reader’s assent for them,

separating the text from a specifically argumentative genre such as Martin and Rose's *exposition*.

## 2. The backgrounding of external conjunction

There are a number of other characteristics of the essay exemplified by this text, but they are marked not by explicit signals but by their noticeable absence in the text. One prominent absence is interest in leaving one's experience as historical records as seen in recounts. As discussed in Martin and Rose (2008), recounts are not dissociated with appraisal, but they place evaluation in the background and put the record of events in the foreground. In this regard, essays should be contrasted with the diary, which is also a non-fictional genre concerned with personal thoughts but foregrounds the recording of personal experience as historical facts. This difference of prominence given to the elements of fact recording is crucial as grounds of distinction among non-fictional genres. Diaries may have some specific objectives other than recording what has happened depending on the author's "agenda", but their text development is based on external conjunction of events. On the other hand, essays tend to de-emphasize the aspect of fact-recording and foreground that of analysis, interpretation and appraisal<sup>3</sup>.

In order to capture the difference between diaries and essays, we appeal to the notions of external and internal conjunction proposed by Halliday and Hasan (1976). Internal conjunction refers to "the system for logically organizing discourse" whereas external conjunction is "the system for linking events in an activity sequence" (Martin and Rose, 2007:117). The next excerpt, **Sunday, 30 January**, from Mark Latham's *The Latham Diaries* (2005: 24-25) illustrates how a diary text is organized as an ordered sequence of acts and events which are all grounded in reality and whose precise position in the order relative to others is important.

A comparison of **Copula** and **Sunday, 30 January** shows that the diary is based on external conjunction, sequencing events in the external world. Sentences 1-5 of **Sunday** are a description of Paul Keating's telephone conversation to Mark Latham, where although only sentence 5 features an explicit conjunction of concession and consequence, Paul Keating's speech acts are ordered in temporal sequence, describing his mood and view of the outcome of the by-election. The second paragraph featuring episodic reminiscences by Latham (sentences 8-10) is also made to cohere through external conjunction: the external conjunction of time *At one point* in sentence 9 and the external conjunction of concession *But* in sentence 10. The third paragraph is also based on an external conjunction of past (sentence 12), present (sentences 13 and 14) and future (sentence 15).

By contrast, in the **Copula** text, we have only one instance of external conjunction (sentence 13) which occurs in the illustrative episode. All the other conjunctions suggesting a sequencing of acts are instances of internal conjunction indicating rhetorical moves of questioning and answering: sentences 5 and 6, sentences 7 and 8, and sentences 9 and 10.

It should be noted that external conjunction does not always mean moving time forward, but it may be other contextual dimensions that take care of the moving forward of the story. As the text develops, its field is constructed through

conjunctions of various figures. What matters in the distinction between internal and external conjunction is whether the field is that of events or arguments. Sometimes it is not so much the sequencing as the recording of what happened that is significant in the development of a text, and the actual sequence of the events may be left rather in the background. This situation is exemplified by the following excerpt, **Monday, 6 July**, from Susan Tomes' *Beyond the Notes* (2004: 16-17). The author was the pianist of a chamber music group called Domus, which toured round many places in Britain and Europe holding concerts of chamber music in a huge tent-like structure called the Dome capable of seating 200 people that they designed and constructed. While the group stayed at a place, the Dome had to be left up the whole time, exposing it to the risk of its being "used as a hostelry during the night" and a joint for unsavoury characters during the day.

From sentence 1 to sentence 3, the sentences describe the setting of the day, of which the last part (the hypotactic elaboration introduced by *which activity*) mentions what was going on. Sentence 4 is apparently about things happening during the author's piano practice, but the relative order of heckling, shouting and sniggering is not mentioned; here the repeated occurrences of these acts are suggested from the context. But as is clear from sentence 5 involving the external conjunction of consequence to indicate her emotional reaction at the sight of the Dome used by people who would have been unreachable by music, the logic of the flow of this textual development is wholly external. What is being evaluated is the disparity between the efforts being made by Domus and their disappointing consequences.

This impression of foregrounded external conjunction is corroborated by a structural analysis of the clause complexes of the text, using the analytical scheme proposed by Ishikawa (2010, 2011):

**Table 1: Monday, 6 July**

	clause complex structure
1	1(reason: <i>existential</i> ) x2(result: <i>behavioural</i> )
2	1( <i>behavioural</i> ) +2(adversative:modalized behavioural) +3(positive: <i>cognitive</i> )
3	$\alpha$ ( <i>locative</i> ) $\beta$ [1(modalized nominalized attributive) +2[adversative: $\alpha$ ( <i>attributive</i> ) $\beta$ ( <i>perceptive</i> )]]
4	1( <i>behavioural</i> ) +2( <i>behavioural</i> ) +3( <i>behavioural</i> )
5	1( <i>emotive</i> ) +2( <i>cognitive</i> )

With the exception of sentence 3, all sentences show a top-level parataxis of the **grounded processes**, which means processes refer to real happenings and they are designated by italics. Even sentence 3 can be interpreted as having a grounded process at the topmost level because the locative relational process (*is playing host to*) can be considered as an ideational metaphor equivalent to a marked theme of place to the effect that *in the dome we find*.

When external conjunction is backgrounded in an essay, it loses much of its



text organizing force and recedes into the role of an instrumental element. The following passage, **Wasps**, from Marlene Zuk's *Sex on Six Legs* (2011: 81) is an example of external conjunction used to describe the procedure of a scientific experiment conducted by Liz Tibbetts.

In sentence 1, the sequence of steps in the experiment begins, of which the first step (nabbing) is described by sentence 2, followed by the painting and the returning of the wasps (sentence 3). Sentence 4 describes what was observed as the outcome of the changed facial expression of the wasps. Although these four clauses are linked by external conjunction, as is clear from the grounded processes constituting them, the sequence of events is placed in the background because it is buried in the description of the experimental design. As in the case of **Monday, 6 July**, the impression of whether external conjunction is foregrounded or backgrounded can be verified by the analysis of clause complex structures. In sharp contrast with those of **Monday, 6 July**, the clause complex structures of **Wasps** consist of hypotaxis except for the paratactic sentence 1. When the hypotactic clause involves more than circumstantials of time or place, the occurrence of the event in the main process is naturally influenced by that of the hypotactic clause because the other circumstantials tend to bring in the logico-semantic element in the entire clause, which should be regarded as tilting toward internal conjunction. From the clause complex structure analysis, all the hypotactic constructions except sentence 3 involve circumstantials which are not locational. Even sentence 1, which is paratactic at the topmost level, shows the same backgrounding effect in its elaboration clause, which features a purpose clause hypotactically following the material clause.

**Table 2: Wasps**

	clause complex structure
1	1[ $\alpha$ ( <i>cognitive</i> ) $\beta$ ( <i>behavioural</i> )] +2[1( <i>behavioural</i> ) =2[ $\alpha$ ( <i>material</i> ) $x\beta$ ( <i>purpose:perceptive</i> )]]
2	$\alpha$ [ $x\beta$ ( <i>purpose:material</i> ) $\alpha$ ( <i>behavioural</i> )] $x\beta$ ( <i>time:attributive</i> )
3	$x\beta$ ( <i>time:material</i> ) $\alpha$ ( <i>behavioural</i> )
4	$\alpha$ [ $x\beta$ ( <i>manner:verbal</i> ) $\alpha$ ( <i>attributive</i> )] $x\beta$ ( <i>concession:existential</i> )

### 3. Naturalness and analogy

The impression of naturalness in text development which we feel when we read essays seems to be best describable by contrasting the essay with a genre which is found at the other extreme on the scale of naturalness: scientific writing. Referring to the difficulties scientific writings present, Halliday (1993: 71) lists the following seven points as characteristic of scientific English:

1. Interlocking definitions
2. Technical taxonomies

3. Special expressions
4. Lexical density
5. Syntactic ambiguity
6. Grammatical metaphor
7. Semantic discontinuity

It is clear that essays are not characterized by any of these difficulties, but rather try to stay as far removed from these traits as possible. Halliday also refers to the style of writing, adopted by non-scientists, which incorporates these difficulties unnecessarily only to impress the reader (1993: 84), as described in the following excerpt where the emphasis in bold type is the current author's:

And we are all familiar with those who, not being scientists, have borrowed the trappings of scientific language and are using it purely as a language of prestige and power – the bureaucracies and technocracies of governments and multinational corporations. In bureaucratic discourse these features have no reason to be there at all, because there is **no complex conceptual structure or thread of logical argument**. But they serve to create distance between writer and reader, to depersonalize the discourse and give it a spurious air of being rational and objective.

In other words, Halliday thinks that the seven traits listed are necessary ills which contribute to the power of scientific language by enabling the construction of a “complex conceptual structure or thread of logical argument”. The naturalness required in essays may be equated with **the opposite of this cognitive endeavour**. That is, essays do not require the reader to strain his brains for the complex, subtle, and tedious thread of argument. The absence of such need for a concentrated effort to pursue conceptual constructions and lines of argument can account for some of the impressions the reader has of the essay such as desultory progression of topics, frequent deviations and informality. In other words, even if a text is devoid of many of the specific difficulties of scientific writing, it cannot be taken as an essay if it is characterized by a complex conceptual structure or thread of logical argument. The next excerpt, **A mind-body fantasy**, from Raymond Smullyan's (1983: 76-77) *5000 B.C. and Other Philosophical Fantasies* shows how demanding a logical argument can be without technical taxonomy, lexical density, syntactic ambiguity, or semantic discontinuity.

This excerpt is the beginning of the whole fantasy, which is more than seven times as long. Since it does not carry any clear markings of fiction, it can be regarded as an example of non-fictional prose. Although the first two paragraphs deal with the physics-psychology distinction, they do not feature any specialist vocabulary or syntactic/semantic difficulties. So Carnap's point of translatability of psychological language into physical language should not present much difficulty. The third paragraph (sentences 7 to 12) serves to provide an **analogy** illustrating Smullyan's point that the translatability does not mean the reducibility of one to the other. The rest of the fantasy discusses the implications of this hypothetical world where color classification coincides with shape classification for the mind-body

problem. To follow the analogy, the reader is expected to mentally draw parallels between Carnap's position and the situation in the hypothetical world. This kind of mental operation should be demanding for ordinary readers because a formal use of **analogy** is at the basis of **scientific models** which rely on the isomorphic relations between the model and what is modelled by it (Edwards, 1967: 354-359). When analogy is used to present a model, it deserves to be examined in terms of its consequences in order to verify its fit to the original. That is why the remaining text of **A mind-body fantasy** explores various consequences of the analogy, including the implausibilities of the analogy itself. This is a pure logical exercise.

The structure of this exposition can be revealed by a move analysis of the text using the theory of conversational moves proposed by Eggins and Slade (1997: 169-226), as in Table 3, where the numbers in the square brackets after the move name refer to the sentence the current move is directed at. The move analysis captures the interactive aspect of the text along with the engagement employed by the author to clarify the position of the relevant parties and the reader. All the moves are essentially addressed to the reader, but the positions which are important for the development of the argument are marked through projection, modality and explicit negation (Martin and White, 2005: 92-153). From the table we learn that an argument of the challenge type is being developed (Martin and Rose, 2008: 122).

**Table 3: A mind-body fantasy**

	move	voice	source
1	statement	Carnap	projection
2	(=)clarification[1]	Carnap	projection
3	counter[1,2]	Smullyan	projection
4	(=)clarification[3]	Smullyan	modality
5	(+)adversative[4]	Smullyan	negation
6	statement	Smullyan	projection
7	command		
8	(x)consequence[7]		
9	(+)positive addition[7]		
10	(x)consequence[9]		
11	(x)consequence[7,8,9,10]		
12	(x)consequence[7,8,9,10]		

Although move analysis is useful for characterizing the interactive stance of the author, it should be supplemented with a different type of analysis which can directly refer to the content of the argumentation. In order to analyse how analogy contributes to the development of the argument, we propose to apply the idea of figure to the representation of analogical models, which include both an analogy and what is modeled by the analogy. We call both simply models, which consist of *reln* (relation) and *elms* (elements), corresponding to processes and participants, respectively. Since an analogy can be arbitrarily complex in structure, we allow for circumstantial elements to augment the original figure. In Table 4, which shows an

analogy analysis of A **mind-body fantasy**, we have a circumstantial element called viewer, which roughly corresponds to Angle in the standard SFL circumstantial inventory.

**Table 4: a mind-body fantasy (analogy)**

	analogy presentation
1	model1: <i>reln</i> [translatable], <i>elms</i> [sentence of psychology, physical language]
2	model2: <i>reln</i> [describe], <i>elms</i> [sentences of psychology, physical occurrences]
3	model1 does not follow from model2
4	model1 may hold
5	model1 does not mean model2
6	announcing an analogy: model3
7	model3: <i>reln</i> [have the same extension], <i>elms</i> [color, shape]
8	instance1 of model3: <i>reln</i> [have the same extension], <i>elms</i> [spherical, red], instance2 of model3: <i>reln</i> [have the same extension], <i>elms</i> [cubic, green]
9	model3: viewer[half: color-sighted, half: color-blind]
10	parallels for model3: color=mental, shape=physical
11	consequence: color-blind=materialists, color-sighted=dualists
12	consequence: shape-blind=idealists

The table shows the precise parallelism permeating the text organization. The reader is deliberately expected to detect it following the text, which necessitates the identification of the relational predicate (*reln*) of model3 as having the same extension, whose recognition might require some exposure to set theory and formal semantics.

This example suggests that the naturalness of essays derives from their connection with the author’s real-world experience, as opposed to its absence in the fantasy. This point seems to apply with particular force to the use of analogy in essays because their characteristic avoidance of formal reasoning is likely to necessitate the use of analogy in intuitive ways, which is less demanding in the sense that the ordinary reader operates with concrete objects with which they have substantial experience. When an analogy is constructed on the basis of our daily experience, it tends to go through more elaborate steps of construction according to the complexity of what is going to be modeled by it. It seems that the author’s interactive stance to the reader also tends to be “detailed” rather than “formally precise”. The following excerpt, **M is for Modulation**, from Susan Tomes’ (2006: 75-77) *A Musician’s Alphabet* illustrates what happens when a fairly sophisticated concept is explained by means of an analogy.

The move analysis of the text supports our impression that the authorial stance is to be characterized as “detailed” or “copious”, as seen from the long sequence of follow-up moves for the initial statement and the elaborate specifications of the target clause, by which is meant the previous clause the current move is directed at. In Table 5, quite unlike what was found in Table 4 there are four specifications which identify a part, rather than the whole, of the target clause, which means that

the author takes some propositions apart in order to explain some concepts piecemeal. Sentence 2 supplies more detail to the picture of Mount Fuji mentioned in sentence 1. Sentence 4 explains the consequence of viewing Mount Fuji “from lots of different perspectives”. Sentence 8 brings an elaboration in the author’s thoughts in reaction to the circumstantial **matter**. In sentence 11 there is an elaboration of “the art of modulation,” one of the participants in sentence 10.

**Table 5: M is for Modulation (move analysis)**

	move	voice	source
1	statement	Tomes	projection
2	(=)clarification[participant of 1]		
3	(+)positive addition[1]		
4	(x)consequence[participant of 3]		
5	(+)adversative[4]		
6	(+)adversative[5]	Tomes	projection
7	(x)consequence[5,6]	Tomes	projection
8	(=)example[projection of 7]		
9	(x)comparison[8]		
10	(x)comparison[9]		
11	(=)clarification[participant of 10]		
12	(x)consequence[11]		

The same stance toward the reader can be demonstrated using an analogy analysis of the text as well. Instead of presenting what is modelled by analogy first, the essay starts with a very ordinary experience of turning over the leaves of a calendar which all show pictures of the same familiar object, Mount Fuji, in this case. From sentence 1 to sentence 7, the reader is guided through stages of understanding the analogical model, first from a description of a particular view, and then through a set of associated views, how they differ, and finally to the model itself and its significance. Sentences 8 and 9 adjust the direction of the abstract version of the analogy presented in sentence 7 by accommodating it to a model featuring different lights rather than different positions. In sentence 10, what is modelled by the analogy, the art of modulation, is introduced as a climax to all these preparatory steps of getting the reader used to the idea of travelling around an initial key position.

**Table 6: M is for Modulation (analogy analysis)**

	analogy presentation
1	announcing an analogy: instance1 of model1: <i>reln</i> [removed from the key position], <i>elms</i> [view1 out of the 36 views of Mount Fuji]
2	clarification of view1
3	clarification of the elements, i.e. the views
4	comparison of the elements
5	model1: <i>reln</i> [removed from the key position], <i>elms</i> [views of Mount Fuji]
6	model1: key-position[Mount Fuji]
7	the significance of the analogy
8	model2: <i>reln</i> [under a different light], <i>elms</i> [views of the same architecture]
9	model3: <i>reln</i> [removed from the key position], <i>elms</i> [views of a familiar object]
10	model4: <i>reln</i> [removed from the key position], <i>elms</i> [modulations]
11	clarification of model4
12	effect of model4

Although a single example may not suffice to demonstrate the point conclusively for all essays, it is clear that a proper choice of real-world experience can contribute to creating an analogy with a considerable explanatory power, and, in the author's experience, the ones we find interesting seem to offer many such examples.

#### 4. Conclusion

We have seen two approaches to characterizing essays as a literary genre. One is based on the distinction between internal and external conjunction. It has been shown that external conjunction is subdued in essays by being placed in non-locational circumstantial contexts. The other approach contrasts essays with scientific writings. As argued by Halliday and Martin (1993), scientific English suffers from many unwelcome drawbacks despite its power and general acceptance because it has evolved without any conscious and judicious design. One of the most serious annoyances is its tendency to create distance between the text and the reader. In this regard, essays seem to aim for the opposite stance toward the reader. We have shown how analogy can be regarded in an essay as a means of treating the reader to a detailed and copious contemplation of a sophisticated field of concepts without ever leaving the realm of real-world experience behind.

This attempt at characterizing the essay as a distinct genre still leaves a lot of lacunae to be filled in before its confines can be clearly delineated. Especially challenging is the task of identifying the components of the essay in terms of stages as is done with those genres presented in Martin and Rose (2008). As an attempt of initial probing, the present paper has proposed two broad characteristics which can distinguish essays from other types of text. Although this characterization has not yet achieved the primary goal of Martin and Rose's genre theory, i.e. that of providing a serviceable scaffold for students' compositions<sup>4</sup>, it captures an

underlying principle for developing and organizing essay texts, which is to stay as close to the reader's real-world experience as possible. A result of this might be that essays tend to stay away from the more clearly definable genres such as those belonging to Martin and Rose's four genre families, giving an impression of not belonging to any specific genre. In this regard, it might be further conjectured that the essay is really a family of several distinct genres. But to give a definitive answer to this conjecture, we still have to investigate some of the more fundamental commonalities in the family, as discussed in the paper.

Although we have tried to cover as wide a range of essays as possible in order to present an accurate picture of what the essay is like, we have not got as far as discussing more formal essays such as Amartya Sen (2005), which is a scholarly treatment of a number of issues of contemporary global significance based on meticulous data analysis and yet, compared with his more professional writings, the essays in the book are clearly directed more to the general reader. We hope we will be able to find new approaches to characterize more formal essays of this sort along with the less formal ones which we have dealt with in this paper.

### Acknowledgement

The style and presentation of this paper has greatly benefited from extensive comments by an anonymous referee. All the errors and insufficiencies are of course the current author's.

### Notes

- <sup>1</sup> The excerpt is treated as an essay based on Quine's preface to the book, of which it is one entry: "This is one of loosely linked series of loose-knit books inspired by Voltaire's *Philosophical Dictionary*. [...] Mine is philosophical in part, but lowlier themes occupy more than half of the book and afforded me more than half the fun,..."
- <sup>2</sup> The texts for analysis and discussion are all found in the appendix.
- <sup>3</sup> In this regard, Matsuo Basho's *Oku no Hosomichi (The Narrow Road to the Interior)*, which has the presentation of his haiku verses as its main objective, but whose text organization derives from the itinerary of his travel and follows what happened to him closely, using external conjunction mostly, is hard to categorize as an essay.
- <sup>4</sup> As discussed in Ishikawa (2010), one of Martin and Rose's goals of establishing their genre relations seems to be making genres into components of a larger text, which means a clearer and more serviceable characterisation of the essay could turn it into one such component usable in students' compositions.

### References

- Edwards, P. (ed.) (1967) *The Encyclopedia of Philosophy*, Vols. 5-6. New York: Macmillan Publishing Company.
- Eggs, S and Slade, D. (1977) *Analyzing casual conversation*. London: Continuum.
- Halliday, M.A.K. (1993) 'Some Grammatical Problems in Scientific English.' In M.A.K. Halliday and J.R. Martin, *Writing Science*. London: Falmer: 69-85.
- Halliday, M.A.K. and Hasan, R. (1976) *Cohesion in English*. London: Longman.
- Halliday, M.A.K. and Hasan, R. (1989) *Language, context and text: aspects of language in a social-semiotic perspective*. Oxford University Press.

- Ishikawa, A. (2010) 「社説からリサーチ・ペーパーへ」 *Proceedings of JASFL*, Vol. 4. October 2010. 105-118.
- Ishikawa, A. (2011) “An analysis of local textual cohesion surrounding contrastive concepts and positions in lecture texts” *Proceedings of JASFL*. Vol.5. October 2011. 87-100.
- Martin, J.R. and Rose, D. (2007) *Working with discourse: meaning beyond the clause*. Second ed. London: Continuum.
- Martin, J.R. and Rose, D. (2008) *Genre relations: mapping culture*. London: Equinox.
- Martin, J.R. and White, P.R.R. (2005) *The language of evaluation: appraisal in English*. New York: Palgrave.
- Latham, M. *The Latham Diaries* (2005) Melbourne Univ. Press.
- Quine, W.V. (1987) *Quiddities: an intermittently philosophical dictionary*. The Belknap Press of Harvard University Press.
- Sen, A. (2005) *The Argumentative Indian*. London: Penguin Books.
- Smullyan, R. (1983) *5000 B.C. and other philosophical fantasies*. New York: St. Martin's Press.
- Tomes, S. (2004) *Beyond the Notes*. Woodbridge: The Boydell Press.
- Tomes, S. (2006) *A Musician's alphabet*. London: Faber and Faber.
- Zuk, M.. (2011) *Sex on Six Legs*. New York: Houghton Mifflin Harcourt Publishing Company.

## Appendixes: Texts analysed

### Copula

<sup>1</sup>Logic-minded philosophers have cautioned us from time to time over the past century or so that the *is* of IDENTITY is one thing, the *is* of predication another. <sup>2</sup>The latter may best be viewed simply as a grammatical adapter for making an adjective play the grammatical role of an intransitive verb. <sup>3</sup>We sing “Thou art green in winter” apostrophizing the *Tannenbaum*, where the Germans directly conjugate the color adjective as a verb: *Du grünst in Winter*, “Thou greenest in winter”. <sup>4</sup>The Japanese are more extreme: their color words are verbs to begin with, across the board.

<sup>5</sup>It is good methodology to ask what this last remark really means. <sup>6</sup>It means that the Japanese color words agree in form and grammatical behavior with the multitude of Japanese words that do go over into what we call verbs when Japanese is translated along the most natural and convenient lines.

<sup>7</sup>And how do adjectives differ from intransitive verbs even in English? <sup>8</sup>Not at all, essentially, as predicates; but we use them also attributively, as in *green tree*. <sup>9</sup>Still might the adjective in its predicative use not simply be allowed to stand as a verb without the help of the copula – thus “You green in winter”? <sup>10</sup>The Semitic languages thrive without a copula

<sup>11</sup>Perhaps its principal utility for us is in marking the grouping of phrases. <sup>12</sup>I was told of a telegram sent by journalist to check on the age of Cary Grant: HOW OLD CARY GRANT. <sup>13</sup>Came the reply: OLD CARY GRANT QUITE WELL STOP HOW YOU. <sup>14</sup>The copula would have distinguished ‘How old is’ from ‘How is old’. <sup>15</sup>The adjective is predicative in the one and attributive in the other. <sup>16</sup>In some languages such an



ambiguity might be averted rather by a distinction in form between attributive and predicative, or by some convention of word order.

<sup>17</sup>The copula of predication has a converse, *-ing*. <sup>18</sup>Just as the one is an adapter for turning adjectives into verbs, so the other is an adapter for turning verbs into adjectives. <sup>19</sup>They thus cancel out: 'You are reading' reduces to 'You read'. <sup>20</sup>Granted, we have utilized the excess to register a shade of meaning: the progressive aspect, so called, as over against the habitual. (Quine, 1987: 36-37)

### **Sunday, 30 January (1994)**

<sup>1</sup>The day after the Werriwa by-election. <sup>2</sup>Paul Keating calls me at home with congratulations. <sup>3</sup>He laments the lack of crusaders in the Government, people who campaign with passion and commitment. <sup>4</sup>He sounds a bit downcast, like the glory days might be behind us. <sup>5</sup>But then he peeps up and is quite positive about the by-election result. <sup>6</sup>He says he got into Parliament too early, at 26, but the train only pulls in once every twenty years in safe Labor seats. <sup>7</sup>No doubt about that, you have to jump on board.

<sup>8</sup>There were times when I thought I would never make it into Federal Parliament, particularly after the Liverpool preselection fight in 1989. <sup>9</sup>At one point, I would have been happy enough to forget about politics and get a regular job. <sup>10</sup>But it was worth batting on. <sup>11</sup>Not that many Australians get to serve in the national Parliament—it's quite an honour.

<sup>12</sup>The polling in our campaign showed a lot of negativity about the Government's broken promises in last year's Budget. <sup>13</sup>The Opposition is not credible, however, under Hewson's leadership. <sup>14</sup>He's the best thing we have going for us. <sup>15</sup>But Keating is right to worry about the Government having to ask for sixteen years at the next election. <sup>16</sup>It's a big ask. (Latham, 2005: 24-25)

### **Monday, 6 July**

<sup>1</sup>No concert in the Dome today; everyone does private practice. <sup>2</sup>Everyone else practises in the house where we are staying, but as there is no piano, I have to practice in the Dome, and I discover all sorts of occupational hazards of being a member of Domus. <sup>3</sup>The Dome is playing host to various local youths apparently dealing in illegal substances, which activity they think is unobserved, but is easy for me to see in the aforementioned shiny black frontage of the Kawai piano as I play. <sup>4</sup>They heckle me a bit, shouting at me to play various pop songs, and generally sniggering at my efforts to practice phrasing. <sup>5</sup>I feel rather helpless and realize the naiveté of our wish to make everybody like chamber music....(Tomes, 2004: 16-17)

### **Wasps**

<sup>1</sup>Tibbets suspected that the wasps used their variable facial patterns to recognize and remember individuals, and she tested her idea in an ingenious if simple way: she painted the faces of wasps so that they no longer seemed familiar to their nest mates. <sup>2</sup>To minimize her risk of getting stung, she nabbed the wasps early in the morning, when the wasps were chilly and less inclined to object to being handled. <sup>3</sup>Once the redecorated insects were returned to their nests, Tibbets watched the reaction of the rest of the colony.

<sup>4</sup>As she had predicted, the wasps were much more aggressive to the altered individuals than they had been before, although the aggression subsided after about half an hour, indicating that they had learned the new facial pattern of their nest mate. <sup>5</sup>It was clear that the wasps were not simply reclassifying the painted females into rough categories, such as “familiar” or “unfamiliar”, because paper wasps use chemicals on their outer surface for that purpose; furthermore, a female perceived to be from outside the colony would have been ripped to shreds or chased away, not simply pushed around a bit more than before (Zuk, 2011: 81)

### A mind-body fantasy

<sup>1</sup>In Rudolf Carnap’s article “Psychology in Physical Language,” he argues that every sentence of psychology may be formulated in physical language. <sup>2</sup>As he expresses it, all sentences of psychology describe physical occurrences, namely, the physical behavior of humans and other animals.

<sup>3</sup>I do not see that the second formulation is really implied by the first. <sup>4</sup>It may indeed be perfectly possible that every statement in psychology may be *translatable* into a statement in physics. <sup>5</sup>But this does not mean that statements in psychology are *about* physical occurrences. <sup>6</sup>The following analogy will, I hope, add some insight into this point.

<sup>7</sup>Imagine (if you can!) a world with the very curious property that any two objects have the same color if and only if they happen to have the same shape. <sup>8</sup>So, for instance, all red objects are spherical and all spherical objects red; all green objects are cubical and all cubical objects green; and so forth. <sup>9</sup>Imagine also that half the inhabitants of the world are completely color-blind, and the other half see colors perfectly. <sup>10</sup>In this world, *color* is the analogue of *mental* and *shape* is the analogue of *physical*. <sup>11</sup>Hence, the materialists are the color-blind, and the dualists are the color-sighted. (<sup>12</sup>Unfortunately, I cannot fit pure idealists into this world, for who could they be other than people who could see colors but not shapes—and this is too outlandish even for me!) (Smullyan, 1983: 76-77)

### M is for Modulation

<sup>1</sup>Turning the calendar over to a new month one morning, I found that the next picture was one of Hokusai’s Thirty-six views of Mount Fuji. <sup>2</sup>It shows labourers unloading stores from a barn while invisible hands control kites flying merrily in the air above it, and the mountain looks on serenely in the background. <sup>3</sup>What a good idea this Japanese contemporary of Beethoven’s had, to show Mount Fuji from lots of different perspectives, often as the backdrop to a busy scene of everyday life. <sup>4</sup>The mountain looks different from each place. <sup>5</sup>We are not shown an iconic view of Mount Fuji as visitors from all over the world would recognize it; travelling around it is the point. <sup>6</sup>Yet we know that the mountain is the home key, so to speak, of the whole series.

<sup>7</sup>I started to think about the idea of travelling away from an agreed reference point to look at it from different angles, or under different light conditions. <sup>8</sup>The Impressionist painters, for example, have given us beautiful meditations on the same building or scene varying in colour at different times of day. <sup>9</sup>But even more intriguing is the idea of going away to look at something familiar from several viewpoints. <sup>10</sup>In music this has a parallel in the art of modulation, which plays such a crucial role in Western music from the seventeenth century onwards. <sup>11</sup>All such pieces base their structure on the idea of

starting out from a home key, travelling to a closely related key to present a new idea, roaming through a number of adventurously distant keys, and then returning to the home key where the original theme reemerges. <sup>12</sup>Listeners do not need to be able to identify the actual keys to sense that the music is moving to different regions, and they have a satisfying consciousness of a journey away from and back to a homeland. (Tomes, 2006: 75-77)

# クチコミサイトにおける修辞機能の 商品評価の高低による違い —修辞ユニット分析による検討—

Differences of Rhetorical Functions on a Community Site “@cosme”  
Depending on High or Low Ratings for Products  
—An Application of Rhetorical Unit Analysis to Texts on the Web—

田中弥生  
Yayoi Tanaka  
神奈川大学非常勤講師  
Kanagawa University (Part Time Lecturer)

## Abstract

Word-of-mouth community sites like “@cosme” have grown in use and popularity in Japan. People write their opinions, read others’, and get information on some products on these sites. The aim of this study is to examine similarities and differences between texts which show whether certain products are good or bad, rating them on the “@cosme” through Rhetorical Unit Analysis (RUA). The RUA is a discourse analysis tool designed for identifying rhetorical functions of messages as well as degrees of de-contextualisation/contextualisation of texts. The result indicates that messages have differences in the rhetorical function while there are some similarities. The findings of this study conclude that characteristics of community sites could be identified using the RUA.

## 1. はじめに

インターネット上のソーシャルメディア利用が盛んである。中でもクチコミサイトは消費者の購入の決め手とされる割合が28.6%で最も高いと報告されており（社団法人 日本通信販売協会 2010）、さまざまな分野での分析が進められている。クチコミサイトに関する先行研究としては、マーケティングや心理学的な研究の他、クチコミサイトへの投稿の言語表現を世代別・投稿媒体別・評価別に比較した田中（2008a）、携帯電話からとパソコンからのクチコミ投稿における言語表現を比較した田中（2008b）などがあるが、談話分析の視点での研究は進んでいない。

修辞ユニット分析（Rhetorical Unit Analysis 以下、RUA）は選択体系機能言語理論において用いられる談話分析手法のひとつで、脱文脈化言語（de-contextualised language）・文脈化言語（contextualised language）の相違を捉える枠組みとして知られている（Cloran, 1994, 1999）。修辞構造理論（Rhetorical

Structure theory、以下 RST)同様、テキストがどのような意味的なまとまり(chunk)、もしくは節の集合から構成されているのかを説明するための手法であるが、RSTはテキストの構成を要素間の論理関係によってモデル化するのに対し、RUAは要素間の階層や順序によってモデル化するという違いがある。またRSTは、要素間の関係(nexus)の論理関係を付与することで意味単位を特定するのに対し、RUAは出現する節の修辞機能の変化によって意味単位を特定するという点でも違いが認められる(Mann et al., 1992; Cloran et al., 2007)。本研究においては、節の修辞機能を特定するため、RUAを用いることとした。RUAは、英語においては母子会話や、生徒と教師の会話等の分析に活用され(Cloran, 1999)、知識伝達の分析に有用な枠組みと考えられている。日本語に適用した研究は佐野(2010b)、佐野と小磯(2011)などがある。またインターネット上のコミュニケーションに適用した研究はQ&Aサイト「Yahoo!知恵袋」を対象とした田中と佐野(2011a, 2011b, 2011c)、田中(2011)などがあるが、クチコミサイトの分析はまだ進んでいない。

RUAは発話機能(speech function)、中核要素(central entity)、現象定位(event orientation)の3つをメッセージ単位で認定して修辞機能(rhetorical function)を特定し、その結果として脱文脈化の程度(degree of de-contextualisation)を知ることができる。佐野(2010b)が述べているように、テキストの意味単位を特定するための手法だが、その過程でメッセージの修辞機能の種類の特定を行う。クチコミサイトは、知識伝達の場の一つであるといえるが、RUAを用いて脱文脈化の視点で分析することによって、一般性・抽象性の観点からその知識伝達の様相を知ることができると考えられる。

クチコミサイトは、商品やサービスなどの対象物について、実際に使用した感想などを述べる場である。そのため、個人的な経験や感想で占められていると予測できる。しかし、インターネット上のQ&AサイトであるYahoo!知恵袋にRUAを適用した結果では、個人的な質問に対して一般的な内容を合わせて提供する回答も見られ(田中と佐野, 2011c)、個人的な経験や感想、意見を述べる際に、物事の定義や汎用的な説明などを加えることもあることが明らかになっている。テキスト内での修辞機能の用いられ方や脱文脈化の程度を知ることが、メッセージを送る際の、聞き手や読み手に対する話し手や書き手の意識を知るために有益であると考えられる。

本稿では、クチコミサイトにおいて商品を高く評価している投稿(以下、高評価)と低く評価している投稿(以下、低評価)の修辞機能と脱文脈化程度をRUAによって確認し、評価の高低と投稿の書き方の関わりを明らかにすることを検討した。

以下、2で分析方法、3で分析結果と考察、4でまとめと今後の課題を述べる。

## 2. 分析方法

### 2.1 分析対象と分析手順

本研究で分析したデータは以下のとおりである。

クチコミサイト : みんなのクチコミサイト@cosme  
http://www.cosme.net  
商品に対する評価 : 高 (星7つ or 6つ) / 低 (星なし or 1つ or 2つ)  
投稿期間 : 2年間 (2005/12/25~2007/12/19)  
データ取得時期 : 2007年12月  
データ数 : 高評価 100件、低評価 100件

RUAの手順は、1. メッセージとその種類の認定、2. 発話機能・中核要素・現象定位の認定、3. 修辞機能の特定と脱文脈化指数の確認、である。なお、Cloran(1999)に基づき、脱文脈化言語を「一般化された要素の習慣的・恒久的な行動や状態について表現する言語」、文脈化言語を「物質的状况に存在する要素の現在の行動や状況について表現する言語」とする。なお各種認定及び用語は原則として佐野(2010a)、佐野と小磯(2011)に依った。

## 2.2 分析対象のメッセージの認定と種類の認定

まず、テキストをメッセージ単位に分割(segment)する。メッセージは原則として節を最小単位として表わされるものと捉え、「位置づけ positioning」、「拘束 bound」、「自由 free」のいずれかに分類し、さらに「拘束」は「拘束;意味的従属」と「拘束;形式的従属」に分類する。「位置づけ」は挨拶・定型句・フィラーなど述部を含まない節のみによって構成されるもの、「自由」は独立して時制やムードなどを表わすものである。「拘束;意味的従属」は従属するメッセージの状況(時間・場所・原因・結果等)を説明し、従属しているメッセージの一部と考えられるもので、基本的には選択体系機能言語理論において hypotactic/enhancing に該当するものである(佐野, 2010a)。「拘束;形式的従属」は意味的には並列の関係だが時制(過去)などの側面で従属するメッセージに形式的に依存するもので、基本的には paratactic/elaborating もしくは paratactic/extending に該当する(佐野, 2010a)。なお、主部や述部が省略されていると考えられる場合には補足してメッセージに分割する。上述のように、「位置づけ」は述部を含まないものであり、また「拘束;意味的従属」は単独ではなく、節複合全体として一つのメッセージと考えるため、RUAでは「自由」と「拘束;形式的従属」について修辞機能の認定を行う。メッセージの種類の認定について(1)に例を示す。なお、本稿の用例は「みんなのクチコミサイト@cosme」からの出典である。

- (1) a. 私は今までこのサイトで知った色々な化粧品を試してきました  
〈自由〉
- b. はっきり言って、これが一番すごいと感じています☆ 〈自由〉
- c. 泡で顔を優しく洗顔 〈自由〉

- d. 鏡を見て 〈拘束;意味的従属〉
- e. ビックリ 〈自由〉
- f. 白い! 〈自由〉
- g. マジ白い(\* $\geq m \leq$ \*) 〈自由〉
- h. 石鹸によくある、つっぱる感じもないです 〈自由〉
- i. でも、今の季節乾燥肌の人には向かないかもしれません 〈自由〉
- j. 安くて、〈拘束;形式的従属〉
- k. おの大きさ 〈自由〉
- l. コスパもよし! 〈自由〉
- m. 絶対リピート!!! 〈自由〉

(1b)の「はっきり言って」のような機能語的性質が強い場合は述部とは考えずメッセージとは認定しない(早川他, 2011)。(1d)の「鏡を見て」は後続する(1e)の「ビックリ」の状況を示すものなので〈拘束;意味的従属〉となり、主節である「ビックリ」の一部と考え、「鏡を見て」のみでは修辞機能を特定しない。また(1j)の「安くて」は後続する(1k)の「おの大きさ」に形式的には従属しているが意味的には並列であるため〈拘束;形式的従属〉となり、修辞機能を特定する。なお、「おの大きさ」は「この大きさ」の入力ミスと考えられる。

話し手自身や他者による発話や考えが発話の中に引用されていると考えられる場合は、引用された部分(被投射節)を分析対象とする。例えば、(1b)の「これが一番すごいと感じています」は書き手の感じた内容が引用されているため全体を1つのメッセージと認定して、「これが一番すごい」の部分を分析する。同様に、(2)では「しばらくはこちらをリピートしていく」が分析対象となる。

(2) しばらくはこちらをリピートしていきましょう。(～～)

また、(1a)の「このサイトで知ったいろいろな化粧品」の「このサイトで知った」や、(1h)の「石鹸によくある、つっぱる感じ」の「石鹸によくある、」のような埋め込み節は1つのメッセージとは認定しない。

### 2.3 発話機能の認定

メッセージを認定した後、発話機能を確認する。発話機能は、「提言 proposal」か「命題 proposition」のどちらかに分類する。Hallidayらは、やりとり(exchange)される対象と機能について、やりとりする対象(commodity)は品物・行為(goods&service)あるいは情報(information)で、機能(role)は提供(giving)か要求(demanding)であるとしている(Halliday and Matthiessen, 2004 表1参照)。

表 1: 発話機能(Halliday and Matthiessen, 2004 : 107)

role in exchange	commodity exchanged	
	(a)goods&service	(b)information
(i) giving	“offer” would you like this teapot?	“statement” he’s giving her the teapot
(ii) demanding	“command” give me that teapot!	“question” what is he giving her?

「提言」は(a)の品物・行為の提供あるいは要求、すなわち交換に関するメッセージ、「命題」は(b)の情報の交換に関するメッセージが該当する。一般にクチコミサイトは情報を提供する場であり、クチコミサイトの投稿の発話機能は、基本的には表1で背景を灰色で示した「情報を提供する部分」に該当すると考えられる。上述の(1)(2)のメッセージも情報を提供しており、発話機能は「命題」に分類する。

### 2.4 中核要素の認定

次に中核要素の認定について述べる。中核要素はメッセージの中心となるものがコミュニケーションの場面に存在するか否かによって特定する要素である。基本的には主語によって表現されるが、当該のメッセージのみでなく、照応など前後のメッセージを用いて判断する場合もある。また、「このカレーは野菜がたっぷりだ」のように、述部「野菜がたっぷりだ」が「このカレー」の性質を表している場合には、「このカレー」を中核要素と認定する。

中核要素の分類を図1に示す。中核要素はまず「状況内要素 co-present entity」「状況外要素 absent entity」「定言要素 generalised entity」のいずれかに分類し、「状況内要素」はさらに「参加要素 interactants」「非参加要素 non-interacting entity」に分類する。なお、本稿では中核要素、現象定位、修辞機能の訳語は原則として佐野(2010a)、佐野と小磯(2011)に依った。

本研究ではインターネット上のクチコミサイトへの投稿を分析対象とするため、対面等の通常のコミュニケーションとは異なる部分もある。図1の各要素をクチコミサイトでの状況にそって検討していく。



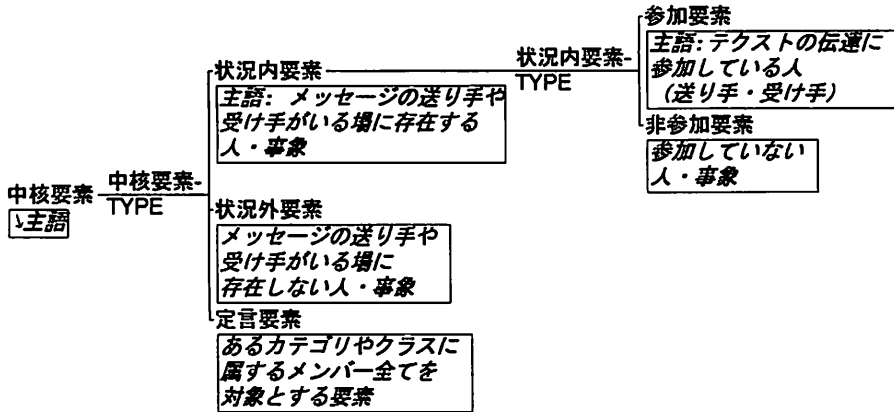


図 1: 中核要素の分類 (佐野と小磯, 2011)

### 2.4.1 状況内要素

主語が「メッセージの送り手や受け手がいる場に存在する人・事象」である場合に「状況内要素」と認定され、さらに「参加要素」と「非参加要素」に分類される。

#### A) 状況内;参加要素

「状況内;参加要素」は主語が「メッセージの送り手や受け手がいる場に存在する人・事象」でなお且つ「テキストの伝達に参加している人」の場合である。基本的には一人称、二人称が該当する。典型的なものは「私は」である。対面では、例えば両親と娘の3人で会話をしている場面で娘から母親に向けて発せられた「明日わたしお弁当いらない」の「わたし」が該当する。クチコミサイトでも、(3)のように、「わたしは」と明示されている場合、および(4)のように「私は」が省略されていると考えられる場合が該当する。なお、例文では中核要素部分を太字で示している。また、省略されている主語はφで示し、省略されていると考えられる部分を括弧内に示す。

(3) わたしは購入を見送りました。

(4) φ (=私は) ずっと使ってます★

対面等では直接のコミュニケーションの相手である「あなたは」も典型的な「状況内;参加要素」である。例えば娘から父親への質問「お父さんビール飲む？」の「お父さん」が該当する。インターネット上のクチコミサイトは通常特定の相手に向けられてはいないが、クチコミサイトを閲覧したり投稿したりする不特定の相手をさして用いられる(5)のような「みなさん」などが使用されることがある。

(5) みなさんお顔や体に使っているようですが、

「みなさん」は世間一般の人を表す場合もあり得るが、本研究のデータでは(6)(7)の「みなさん」のようにクチコミサイトに投稿している人をさしていると判断できるもののみであったため、「状況内;参加要素」と認定した。

(6) 私もみなさんに便乗して良い評価をつけたかったのですが

(7) みなさんの口コミとお値段の安さから購入しましたが、

## B) 状況内;非参加要素

「状況内;非参加要素」は、「メッセージの送り手や受け手がいる場に存在する人・事象」で、なお且つ「テキストの伝達に参加していない人・事象」である。対面では、例えば両親と娘の3人で会話をしている場合、母親から娘に向けて送られた「昨日お父さんが花束をくれたの」というメッセージの主語「お父さんが」は、その場にいるがそのメッセージの伝達には参加していないので、中核要素は「状況内;非参加要素」となる。また、「このカレーはとても辛い」の「このカレーは」は、その場にあるがテキストの伝達には参加していないため、「状況内;非参加要素」である。

クチコミサイトにおける(8)の「この石けん」については、実際に投稿者の手元にあるか否かは明らかではないが、クチコミサイトの場合、クチコミの対象物は時間と空間を超えてその場に存在するものと考え、「状況内;非参加要素」と認定した。

(8) この石けん・・・私には全然合いませんでした。

また、化粧品のクチコミサイトの場合には、自分の肌の状態や使用感について述べるものも多い。(9)の「お肌が」は投稿者のお肌であり、また、(10)の「かゆみが」は投稿者が感じたかゆみであるため「状況内;非参加要素」と認定した。なお、メッセージの種類が「拘束;意味的従属」のものは【 】で示している。

(9) 【これで洗顔し出してから】お肌がツルツルになりました。

(10) でも【3回くらい使用したときに】かゆみが現れました。

## 2.4.2 状況外要素

「状況外要素」は「メッセージの送り手や受け手がいる場に存在しない人・事象」である。夫婦の会話で夫から妻に向けた「おばあちゃんが明日歌舞伎を観に行くそうだ」や「ラジオ体操はなかなか体にいいね」というメッセージにおけるその場にはいない「おばあちゃんが」および「ラジオ体操は」が該当する。クチコミサイトにおける(11)の「旦那は」や(12)の「薬局とかが化粧品でないものを化粧品と称して売るのは」が「状況外要素」である。

- (11) 旦那は平気で使用していますが、
- (12) ちなみに、薬局とかが化粧品でないものを化粧品と称して売るのは薬事法違反になります。

2.4.3 定言要素

「定言要素」は、「あるカテゴリやクラスに属するメンバー全てを対象とする要素」で、例えば「醤油は大豆からできている」の「醤油は」が「定言要素」となる。主語のみでなく述部もあわせて判断する。(13)の「パーム油って」は、パーム油というカテゴリ全体を指しているため、「定言要素」と認定される。

- (13) パーム油って、石けんの硬さを出して溶け崩れを抑える油であって、

なお、「パーム油は 500ml 入り 800 円です」というメッセージの場合には、パーム油というカテゴリ全体を指しているのではなく、その店舗での販売価格について説明していると考えられるため、定言要素とは認定されない。

2.5 現象定位の認定

次に現象定位の認定について述べる。現象定位は、メッセージによって表現されている出来事がいつ起こったかを、メッセージが伝達されている時 (Time of speaking 以下、Ts) を基準とした時間的な位置を特定して示す要素である。現象定位の分類を図2に示す。

Ts で起こっていれば「現在 concurrent」または「過去 prior」、Ts で起こっていないことであれば「未来 future」または「仮定 hypothetical」に分類できる。さらに「現在」は「非習慣的・一時的 non-habitual/temporal」「習慣的・恒久 habitual/timeless」に分け、「未来」は「意図的 volitional」「非意図的 non-volitional」に分ける。以下で図2の分類をクチコミサイトでの状況にそって検討していく。

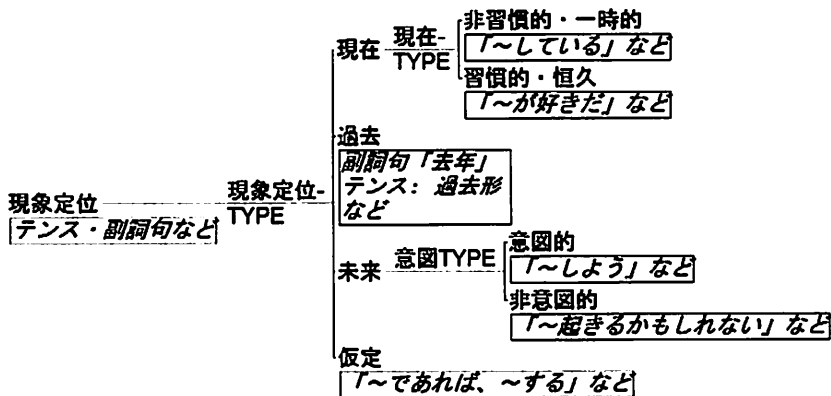


図 2. 現象定位の分類 (佐野と小磯, 2011)

## 2.5.1 現在

### A) 現在;習慣的・恒久

メッセージで述べていることが Ts において起こっていて、習慣性や恒久性について聞いたり述べたりしている場合には、「現在;習慣的・恒久」と認定する。習慣性は、例えば「いつも」「毎～」などの表現があることやそれらを補えることが指標となり、恒久性は物事の定義や変わらない性質について述べているものが該当する。前掲の(4)や(10)は習慣について述べ、(12)および(14)は性質について述べているメッセージで、ともに現象定位は「現在;習慣的・恒久」である。なお、例文では現象定位部分を下線で示す。

(4)' φ (=私は) ずっと使ってます★

(10)' 旦那は平気で使用していますが、

(12)' パーム油って、石けんの硬さを出して溶け崩れを抑える油であって、

(14) φ (=この石けんは) 無添加ですが、

(4)'および(10)の「～て(い)ます」は、「～している」の丁寧体である。図2において「～している」は「現在;非習慣的・一時的」の例として挙げられており、後述の(15)(16)が該当するが、必ずしも「～している」の形式が「現在;非習慣的・一時的」と認定されるのではない。

### B) 現在;非習慣的・一時的

メッセージで述べていることが Ts において起こっていて一時的なもの、非習慣的なものは「現在;非習慣的・一時的」と認定する。(15)のように一時的な状況を表すものや、(16)(17)(18)のような感想や印象を述べるものが該当する。

(15) φ (=石けんは) まだいっぱい残ってますが、

(16) φ (=私は) みんなの情報に本当に感謝してます m( )m

(17) φ (=この石けんは) たしかに大きいです。

(18) φ (=この石けんは) しかも敏感肌で乾燥肌の私に合わないみたい  
いで

(17)について、「大きい」という石けんの特徴を述べているとして「現在;習慣的・恒久」と認定することも考えられるが、前掲(14)の「無添加」がより客観的であるのに対して、(18)の「敏感肌で乾燥肌の私に合わないみたい

いで」とも同様に主観的な判断であるにとらえ、本研究では、投稿者の感想や印象と判断できるものについては「現在;非習慣的・一時的」と認定した。

### 2.5.2 過去

Ts より前に起こったことを述べているメッセージの現象定位は「過去」と認定する。(19)(20)が該当する。

(19) φ (=私は) やっとの思いで手に入れたのですが、

(20) 【体にも化粧水が必要だと感じるほど、】φ (=肌が) 乾燥しました  
…

### 2.5.3 未来

Ts では起こっていないことを述べるメッセージの現象定位は「未来」あるいは「仮定」である。「未来」はその行動・現象が意図できるかできないかによって「意図的」と「非意図的」の2つに分類される。

#### A) 未来;意図的

(21)の「食器洗いに使おう」は、Ts で起きていなくて、意図できる行動のため「未来;意図的」となる。

(21) φ (=私は) 食器洗いに使おうと思います。

#### B) 未来;非意図的

Ts で起きていなくて投稿者の意図できる行動・現象ではない場合は、「未来;非意図的」となる。(22)の「苦い思い出がよみがえる」のは投稿者の意図できる現象ではないため該当する。

(22) 【これから店で見かけるたびに】苦い思い出がよみがえりそう・・・

### 2.5.4 仮定

「仮定」は、「A が生じた場合、B が起こる」という因果関係を持つものが該当する。(23)は「拘束;意味的従属」メッセージ「他のにしたら」という条件によって「又くすみ始める」という結果が生まれるので「仮定」となる。

(23) 【多分他のにしたら】又くすみ始めると思いますね(´>д<)

## 2.6. 修辞機能の特定と脱文脈化指数の確認

発話機能と中核要素と現象定位の組み合わせによって、修辞機能が特定される。表 2 は佐野 (2010b) および佐野と小磯 (2011) の修辞機能の特定表に脱文脈化指数を合わせて示したものである。脱文脈化指数とは、中核要素の here (発話地点との空間的な距離) の程度と現象定位の now (発話時点との時間的な距離) の程度によって近いものから遠いものまで修辞機能を線上

に示した際の指数で、1 から 14 までである。脱文脈化指数の数値が大きいものほど脱文脈化の程度が高く一般的・汎用的で、小さいものほど脱文脈化の程度が低く個人的・特定のであることを示す。

表 2: 修辭機能の特定と脱文脈化指数

			発話機能							
			提言	命題						仮定
				現象定位						
				現在		過去	未来			
非習慣的・一時的	習慣的・恒久	意図	非意図							
中核要素	状況内	参加	[1] 行動	[2] 実況	[7] 自己記述	[3] 状況内回想	[4] 計画	[5] 状況内予想	[6] 状況内推測	
		非参加	n/a	[8] 観測						
	状況外			[9] 報告	[13] 説明	[10] 状況外回想	[11] 予測	[12] 推量		
	定言			n/a	[14] 一般化					

「n/a」は該当なし／背景が灰色の部分が修辭機能の種類／[ ]内は脱文脈化指数

(24)では、各メッセージの後に《発話機能&中核要素&現象定位⇒修辭機能[脱文脈化指数]》を示した。

- (24) a. φ (=私は) いつもは、□□□□を使用していますが、  
《命題&状況内;参加&現在;習慣的・恒久⇒自己記述[7]》
- b. 【この石鹸がお安いのに低刺激ということで】φ (=私は) 購入しました。 《命題&状況内;参加&過去⇒状況内回想[3]》
- c. φ (=この石鹸は) あわ立ちもよく、  
《命題&状況内;非参加&現在;非習慣・一時的⇒実況[2]》
- d. φ (=肌は) ピリピリしないし、  
《命題&状況内;非参加&現在;非習慣・一時的⇒実況[2]》
- e. φ (=肌は) つっぱらないし  
《命題&状況内;非参加&現在;非習慣・一時的⇒実況[2]》
- f. φ (=この石鹸は) 敏感肌の私には最高です！！  
《命題&状況内;非参加&現在;非習慣・一時的⇒実況[2]》

- g.  $\phi$  (=私は) このあと いつも、〇〇〇〇をつけていますが  
《命題&状況内;参加&現在;習慣的・恒久⇒自己記述[7]》
- h. 【ローションのしみ込みもよく、】お肌がプリプリに!  
《命題&状況内;非参加&現在;非習慣・一時的⇒実況[2]》
- i.  $\phi$  (=この石鹸は) 私のお気に入りです。  
《命題&状況内;非参加&現在;非習慣・一時的⇒実況[2]》

このように、メッセージ毎に修辞機能を認定し、脱文脈化指数を確認していく。(24)では、まず(24a)で習慣を述べ、次に(24b)でクチコミの対象物を購入した事実を述べている。その後、(24c)から(24e)で使用感についての感想を述べ、(24f)で評価し、さらに、(24g)で習慣を述べてから、(24h)で肌の状態、(24i)で対象物への評価を再度述べている。感想や評価は修辞機能「実況」が、習慣は「自己記述」が、過去の事実は「状況内回想」が用いられることがわかる。感想や評価を述べる際に用いられている修辞機能「実況」は脱文脈化指数が[2]で空間的にも時間的にも「今ここ」に近いために脱文脈化の程度が低いのに対して、自己の習慣を述べる「自己記述」は脱文脈化指数が[7]と、感想や評価に比べて高い。これは習慣というものは、現在のことだけでなく過去から未来も含めた時間的な幅をもつためである。また、過去の事実を述べる修辞機能「状況内回想」の脱文脈化指数[3]が、「実況」の脱文脈化指数[2]より高いのは、Ts と時間的に距離があるためである。

### 3. 分析の結果と考察

表3に商品に対する評価の高低別に脱文脈化指数と修辞機能の頻度と割合を示した。

表 3: メッセージの修辞機能の評価別頻度と割合

	[2] 実況	[3] 状況内 回想	[4] 計画	[5] 状況内 予想	[6] 状況内 推測	[7] 自己 記述	[8] 観測	[9] 報告	[10] 状況外 回想	[11] 予測	[12] 推量	[13] 説明	[14] 一般化	計
高 評 価	533	214	43	14	5	90	3	99	30	0	2	5	1	1,039
	51.3%	20.6%	4.1%	1.3%	0.5%	8.7%	0.3%	9.5%	2.9%	0.0%	0.2%	0.5%	0.1%	100%
低 評 価	252	401	45	3	4	8	5	78	35	2	0	2	5	840
	30.0%	47.7%	5.4%	0.4%	0.5%	1.0%	0.6%	9.3%	4.2%	0.2%	0.0%	0.2%	0.6%	100%
計	785	615	88	17	9	98	8	177	65	2	2	7	6	1,879

「高評価」では「実況」「状況内回想」「報告」「自己記述」の順に多く用いられている。「低評価」では「状況内回想」「実況」「報告」の順に多く用

いられている。

また、表4に、各投稿における修辞機能使用率と独立性の検定の結果を示した。

「高評価」のクチコミ100投稿のうち修辞機能「実況」が用いられているのは99投稿であったため、99%と示した。また、「低評価」のクチコミ100投稿のうちで修辞機能「状況内回想」が用いられているのは97投稿で、97%と示している。ほとんどの「高評価」クチコミで「実況」が用いられ、ほとんどの「低評価」クチコミで「状況内回想」が用いられていることがわかる。

表4：投稿毎の修辞機能出現率（単位：％）

	[2] 実況	[3] 状況 内 回想	[4] 計画	[5] 状況 内 予想	[6] 状況 内 推測	[7] 自己 記述	[8] 観測	[9] 報告	[10] 状況 外 回想	[11] 予測	[12] 推量	[13] 説明	[14] 一般 化
高評価	99	74	40	13	4	57	2	50	24	0	2	4	1
低評価	86	97	39	3	4	8	5	40	24	2	0	2	3
フィッシャーの 正確確率検定※	**	**	n. s.	*	n. s.	**	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.

※ 両側検定。\*\*: $p<.01$  \*: $p<.05$  n. s.: 有意差なし

修辞機能ごとにフィッシャーの正確確率検定を行ったところ、「実況」「状況内回想」「自己記述」は有意水準1%で、「状況内予想」は有意水準5%で差があることがわかった。このことから、「高評価」を特徴づける修辞機能は「実況」「状況内予想」「自己記述」で、「低評価」を特徴づける修辞機能は「状況内回想」であるといえるだろう。

「高評価」の例には前掲の(24)が該当する。「低評価」の例を(25)に示す。

- (25) a. 【ロコミを見て】 $\phi$  (=私は) スーパーで買いましたが  
《命題&状況内;参加&過去⇒状況内回想[3]》
- b.  $\phi$  (=この石けんは) 匂いがくさかったです。  
《命題&状況内;非参加&過去⇒状況内回想[3]》
- c. 【洗いたては、つっぱるのが嫌な私にとって】 $\phi$  (=この石鹸は)  
合いませんでした。《命題&状況内;非参加&過去⇒状況内回想[3]》
- d.  $\phi$  (=この石けんの価格は) 二つ入りで262円だったと思いき  
が《命題&状況内;非参加&過去⇒状況内回想[3]》
- e. 【安いので】 $\phi$  (=私は) 気に入りましたが  
《命題&状況内;参加&過去⇒状況内回想[3]》
- f. 【使ってみると・・・】 $\phi$  (=私は) ダメでした。



## 《命題&amp;状況内;参加&amp;過去⇒状況内回想[3]》

「高評価」で最も多く使用されていた「実況」と、「低評価」で最も多く使用されていた「状況内回想」は、脱文脈化指数は[2]と[3]でともに低く、より自分に近い個人的なことを述べているという点では共通しており、クチコミサイトでは、脱文脈化の程度が低いことがわかる。しかし、時間的観点において「実況」はTsの時点のことを述べている修辭機能であるのに対し、「状況内回想」は過去のことを述べている修辭機能であり、「低評価」では「高評価」よりも「今」から離れている点が異なる。また、検定の結果有意差のある「状況内予想」と「状況内回想」はいずれも個人的なことであるが、「高評価」が今後のこと、「低評価」が過去のことを述べている点が異なる。

「高評価」の例である(24)では、(24b)で購入の事実が過去として表現され、(24c)から(24e)で使用した感想が現在で表現されているのに対し、「低評価」の例である(25)では、購入の事実、使用した感想や評価がすべて過去のこととして表現されている。これは、「高評価」の場合にはクチコミしている対象物の使用が継続しているのに対して、「低評価」の場合には、使用を中止したなどの理由で、対象物との関係が過去のものになっていることによると考えられる。また、低評価の場合に、例えばより直接的な「私はこの商品は嫌いです」といった「実況」は避けられ、どういことが起こったのかを表す「状況内回想」で距離を置いた述べ方、いわば婉曲表現が好まれるとも考えられる。

評価の高低によって用いられる修辭機能に違いがみられたことから、RUAによる修辭機能や脱文脈化指数を確認することによってその投稿が高評価のクチコミか低評価のクチコミかを判定できる可能性が示唆される。

クチコミサイトの脱文脈化指数が全体的に低いのは、クチコミサイトの主目的が当該の対象物についての感想や意見、使用した経験を述べることであり、ことに起因するものと考えられる。Q&A サイト Yahoo!知恵袋への化粧品に関する質問・回答投稿の RUA 分析では、脱文脈化の程度が低い個人的な内容の質問に対して脱文脈化の程度が高い一般的な内容も含めた回答が投稿され、また、個人的な内容を質問する際に一般的なこともあわせて述べる投稿もあることが明らかになっている(田中, 2011)。それに対して本研究の結果で示された全体的な脱文脈化の程度の低さは、クチコミサイトの特徴である可能性がある。

#### 4. まとめと今後の課題

本稿では、インターネット上のクチコミサイトに RUA を適用して、クチコミの対象物に高い評価をつけている投稿と低い評価を付けている投稿で用いられる修辭機能と脱文脈化程度を確認し、評価の高低と投稿の特徴の関わりを明らかにすることを検討した。その結果、@cosmeでは、高い評価をつける場合にも、低い評価をつける場合にも「今ここ」に近い「実況」や「状況内回想」が多いが、高い評価においてはより現在に近いもの、低い評価に

においては、過去のこととして表現する傾向があることが明らかになった。

本研究の分析対象では、脱文脈化の程度が高い、すなわち一般的、汎用的なメッセージは少なく、個人的経験を述べるものが規範であるとうかがえた。しかし、この傾向が今回分析対象としたサイト特有のものか、化粧品を対象物としたクチコミに特有のものであるか、あるいはどのような対象物であってもクチコミサイトに共通するものなのか、また、高評価、低評価の枠に含まれない「どちらともいえない」と評価している投稿ではどのような特徴が見られるかについては、現時点では述べられない。サイトや対象物が異なれば脱文脈化の程度の高い一般的事象が述べられることが多い場合もあるのか、RUAを用いてクチコミサイトを分析することによって、コミュニティやカテゴリ、クチコミの対象物の違いによる一般性・汎用性の観点から様相を明らかにすることができるかと考える。異なるサイト、異なる対象物のクチコミの分析を今後の課題としたい。

## 謝辞

本研究では、株式会社アイスタイル様のご協力により「みんなのクチコミサイト@コスメ」のデータを使用させていただきました。記して感謝の意を表します。また、本誌匿名査読者から有益な指摘及び示唆を頂戴しました。記して感謝申し上げます。

## 参考文献

- Cloran, C. (1994) *Rhetorical Units and Decontextualisation: an Enquiry into some Relations of Context, Meaning and grammar*. Nottingham: University of Nottingham.
- Cloran, C. (1999) 'Contexts for learning.' In F. Christie (ed.) *Pedagogy and the Shaping of Consciousness*, London: Cassell, 31-65.
- Cloran, C., Stuart-Smith, V. and Young, L. (2007) 'Models of discourse.' In R. Hasan, C. M. I. M. Matthiessen and J. J. Webster (eds) *Continuing Discourse on Language : a functional perspective*, Equinox Publishing Ltd, London, UK & Oakville, USA. 647-70.
- Halliday, M. A. K. and Matthiessen. C.M.I.M. (2004) *An Introduction to Functional Grammar (3rd ed.)* London: Arnold.
- 早川知江、佐野大樹、水澤祐美子、伊藤紀子 (2011) 「機能文法における節境界の問題と認定基準の提案」『機能言語学研究』第6巻, 17-58.
- Mann, W. C., Matthiessen, C. M. I. M. and Thompson, S. A. (1992) 'Rhetorical Structure Theory and Text Analysis.' In W. C. Mann and S. A. Thompson. (eds) *Discourse Description: Diverse linguistic analyses of a fund-raising text*. Amsterdam, John Benjamins: 39-78.
- Mann, W. C. & S. A. Thompson (1988) *Rhetorical Structure Theory: Toward a Functional Theory of Text Organization*. *Text* 8: 243-81.
- 佐野大樹 (2010a) 「日本語における修辞ユニット分析の方法と手順 ver.0.1.1 ー選択体系機能言語理論 (システムック理論) における談話分析ー (修辞機能編)」 [http://researchmap.jp/systemists/資料公開/ 閲覧日](http://researchmap.jp/systemists/資料公開/閲覧日) 2011.1.19

- 佐野大樹 (2010b) 「選択体系機能言語理論を基底とする 特定目的のための作文指導方法について —修辞ユニットの概念から見たテキストの専門性—」『専門日本語教育研究 12』19-26.
- 佐野大樹、小磯花絵 (2011) 「現代日本語書き言葉における修辞ユニット分析の適用性の検証—「書き言葉らしさ・話し言葉らしさ」と脱文脈化言語・文脈化言語の関係—」『機能言語学研究』第6巻, 59-81.
- 社団法人日本通信販売協会 (2010) 『第3回インターネット通信販売利用実態調査報告書 2010年/インターネット通信販売の利用実態』
- 田中弥生 (2008a) 「クチコミサイトにおける世代別・媒体別言語表現の分析」『言語処理学会第14回年次大会(NLP2008)予稿集』911-914.
- 田中弥生 (2008b) 「電子コミュニケーションの配慮意識表現 —クチコミサイトへの携帯電話からの投稿にみられる特徴—」『青山 国際コミュニケーション研究』第12号 49-69.
- 田中弥生 (2011) 修辞ユニット分析を用いた Q&A サイトの質問と回答における修辞機能の展開の検討」『社会言語科学会第28回大会発表論文集』226-229.
- 田中弥生、佐野大樹 (2011a) 「Yahoo!知恵袋における質問の修辞ユニット分析—脱文脈化-文脈化の程度による分類—」『信学技報』110(400), NLC2010-32, 13-18.
- 田中弥生、佐野大樹 (2011b) 「修辞ユニット分析からみた Q&A サイトの言語的特徴」『言語処理学会第17回年次大会(NLP2011)論文集』248-251.
- 田中弥生、佐野大樹 (2011c) 「Yahoo!知恵袋における質問と回答の分類—修辞ユニット分析を用いた脱文脈化-文脈化の程度による検討—」『社会言語科学会第27回大会発表論文集』208-211.

# クライアントの過程構成のマッピングより得られる 変化測定尺度としての起動者性 —心理療法を基に—

## Agency as Measurement Standards of Change Obtained from the Mapping of Clients' Transitivity System -Based on Psychotherapy Interviews-

加藤 澄

Sumi Kato

青森中央学院大学

Aomori Chuo Gakuin University

### Abstract

In psychotherapy interviews, observing which choices clients make between ergative, middle or ergative, effective forms in their utterances shows how they construe their experiential world. This provides the therapist with important information needed to lead the therapy to success. This study quantified the type of transitivity clients use in their sessions, picked up from both the beginning and transferring period of the session, which indicates the sign of clients' change as well as what form each of the types belongs to in terms of ergative interpretation. In addition to these, some auxiliary verbs, which indicate what viewpoints clients set in construals of their own experiential world, were quantified. These quantitative data show that in a successful case, the clear transference from medium to effective form, as well as the change of frequency of some auxiliary verbs occurs at a statistically significant level. Based on these findings, qualitative analysis determined Agency played an important part in changing the client's ways of construing experience through which the client's change is measured.

### 1. はじめに

流派を超えて、心理療法の基本目的は、クライアント(以後、Cと略記する)が現在直面している問題となる状況を打開、あるいは改善すべく、Cの内面に変化をもたらすことである。従来、心理療法の研究者・臨床家は、認知的角度あるいは論証的見地から変化を捉えてきたが、そこで使われる言語上の変化については、ほとんど注意を払ってこなかった(加藤, 2011)。しかし言葉がそれぞれの人間の経験世界を構成するという視点に立てば、心理療法面接セッションを、第1次データである言語面から分析することは、セラピーの進展に多くの情報を提供しうるものとなる。そこで本研究を、言語観察によって、変化の軌跡を実証的に捉え解明していこうとする研究の一環として位置付ける。方法論として、選択体系機能言語学(Systemic Functional Linguistics,

以後 SFL と略記する)より、経験構成的メタ機能の観点から過程構成を取り上げ、Cがその経験世界をどのように構築するかを、Cの視点特定という観点から、過程構成のうち物質過程における起動者性のマッピングをはかり観察する。

加藤(2011)は、心理療法面接逐語記録より「なる」表現と受動文を取り上げ、それらを SFL における起動的解釈より捉え、セッションでの C の発話に現れるこれらの表現の頻度の変化を観察し、C の経験世界構成の変化測定の尺度として、プロセス/効果研究の手法となりうる可能性について論じている。本研究では、この先行研究で得られた結果に鑑み、過程型のうち物質過程の起動者性、話者の視点を表す補助動詞を取り上げ、これらのマッピングを通して得られる C の経験世界の視点構成を観察することにより、どのような臨床上の情報が得られるのかを考察し、またその情報が C の変化を測る尺度となりうるものであること、ひいてはプロセス/効果研究の手法としての可能性を有するものであることを論じる。

心理療法では、C が自身の経験世界をどのように捉えているかを精細に把握することが、セラピスト(以後、T と略記する)にとって重要な課題の 1 つである。C の経験世界構築の有り様が、C の態度、感情、性格、経験世界の捉え方を発現させるもので、心理療法を進めていく上で、重要な資料を T に提供する。本研究では、セッションの初期と変化の兆しが見られる転換期とで、C の過程構成構築上の視点の表れ方に違いが見られるのではないかという仮説を立て、異なる療法アプローチによる 4 事例の面接逐語記録について、過程型のタイプのうち物質過程をとりあげ、起動的解釈の観点から中間態の視点、実効態の視点どちらが支配的であるかを観察した。C の経験構成に起動者性(Agency)という視点が獲得されているかどうかを見て、変化の尺度としうるかどうかを検討するのが目的である。面接初期の C は、自己の経験世界を因果的視点から捉えるという視点がまだ育たず、セラピーを経るにつれて、起動者 (Agent) が獲得されると想定され、そのことによる視点の変化が C の変化であるとの仮説を立てた。因果的視点から経験世界を捉えられるようになることが、C を取り囲む問題事象への解決へと導くからである。よって転換期には、自分を悩ませていた問題が因果関係の視点から語られると想定され、その際、選択される過程型は実効態となる。

しかし文化的背景から、日本語は自己を取り巻く経験世界を、主観的、受動的に捉える傾向が強く、そこでは外界を自然の成り行きと捉えて、因果関係の枠組みで事象を客観的に切り取るという視点が極めて希薄である。このことは、自動詞中心の過程構成、自発態などの表現構造に見られるように、中間態の言語志向へ大きく傾斜する特徴を持つことが証明している。こうした文化的背景から派生する日本語自体の特質を視野に入れた上でなお、臨床プロセスにおいて、中間態から実効態への C の視点の移行が観察されるのかどうかという点が、本研究の実証研究としての主眼である。

これと関連させて、Schafer (1976) の行為言語 (action language) の根拠性の実証をはかる。行為言語とは、C が自己の経験世界の構成を、主体を主語

とした動詞と副詞構成を原則とした過程構成で語ることである。概して、Cは、自己の問題を自己の行為ではないように語る傾向がある。例えば、「～になった」「孤立した」「疎外されている」といったように、Teruya (2006) による起動的解釈の日本語への適用の定義で言えば、中間態の表現で構築する傾向がある<sup>1</sup>。これを Schafer は「放棄された行為 (disclaimed action) とし、これらの表現を行為言語に戻していくことが治療プロセスであると考ええる。これは SFL の観点からは、中間態から実効態への限定的転換と考えられる。Schafer のこの主張は、セラピーのプロセスをあまりに単純化しているとして批判も多いが、一方でサイコセラピーのあり方の1つの基本側面を示している。本研究では、この主張の根拠を、セラピーの第一次データである言語観察を通して、実証する。

## 2. 資料と方法

### 2.1 資料

本研究では、異なるアプローチによる4事例より、初期と変化の兆候が見られるセッションをそれぞれ1セッションずつ抽出し、分析データとした。事例1は来談者中心療法<sup>2</sup>、事例2, 3, 4は統合的認知行動療法によるセッションである<sup>3</sup>。抽出は、2人の臨床家による合議によってなされた。その際の評定基準は、担当Tによる面接報告と逐語記録を読み込んだ上での臨床家の総合的判断によるものである。表1は各事例の概要である。これら4事例のうち事例1は、症状の変化が比較的明確とされるもので、最終的には成功事例となったものであり、事例2は、依然不安定要素は残るものの、症状に改善の跡が見られるため、Tが見切りをつけて終結としたもの、事例3は、現在も進行中で、小康状態を保ちながら治療期間は長期にわたっている。事例4は症状に改善が見られず、Cのドロップアウトに終わったもので、分析データとしたのはその最終セッションである。

表1 分析事例概要

事例	Cの年齢/ 性別	主訴・問題	療法アプローチ	セラピーの帰結	分析対象とした セッション
事例1	20代/女性	社会的不適応による 抑鬱	来談者中心療法	16回で終結	第5回、9回
事例2	20代/女性	情緒不定・自己愛性 人格障害	統合的認知行動療法	26回で終結	第3回、15回
事例3	20代/女性	社会的不適応による 抑鬱	統合的認知行動療法	現在も進行中	第4回、22回
事例4	20代/女性	心理的な要因のある 鬱	統合的認知行動療法	21回で中断	第6回、21回

### 2.2 方法

過程構成は人間に、現実の表現を作り出すのを可能にする文法機構で、過程構成のシステムを通して、人間は経験世界を定義することができる (Halliday, 1994)。Halliday は、人間の経験世界を処理、解釈構築するのに、物質 (～する doing) , 心理 (～感覚する sensing) , 関係 (～である being) とい

う3つの基本過程を設け、これら3つの過程型の境界上に、行動、発言、存在という副次的過程型を設けた。これらの過程型のタイプのうち本研究では各セッションごとに、(1) 物質過程をとりあげ、発話総形態素数に占める物質過程の下位分類である「する」タイプを起動的解釈に従って、実効態・中間態、いずれに分類されるかを計量し、また、(2) 初期・転換期という2つの時期別に、すべての過程中心核部のうち受け身型過程中心核部と、視点を示す補助動詞の発話総形態素数に占める割合を計量し、さらに(3) 物質過程の実効態・中間態・受身型過程中心核部・「～てしまう」「なる」表現について、2つの時期において、頻度の出方に違いが見られるのかどうか統計による検証をはかった。

本研究では、Halliday の英語を基にして作られた過程型の分類をそのまま日本語に適用する。日本語に即した記述分析として、龍城(2008)が形容詞を入れた微細にわたる体系網を提唱しているが、本研究の目的は、起動的解釈による視点の変化を特定するもので、この目的からすると、英語の記述分析の過程型をそのまま適用することに問題はないと判断されたこと、また体系網が細微にわたる分類は、統計的検証を困難にし、輪郭が明確化されないことが想定されることから、オリジナルの分類を適用することにした。

### 3. 理論的枠組み

#### 3.1 他動的解釈と起動的解釈

「過程を引き起こすものは何か」(Halliday, 1994: 162)、つまり、「過程がみずからの内部から引き起こされるのか、それとも外部から引き起こされるのか」(Halliday, 1994: 162)といったように、過程が生じる因果関係を視点として、他動的解釈(transitivity)を補うものとして、Halliday(1994)は起動的解釈(ergativity)を導入している。本研究では、Hallidayによる起動的解釈の日本語への適用を以下のように捉える。図1は起動的解釈、図2は図1を他動的解釈でみた場合の例である。

	a		おもちゃが	壊れた(能動態)
起動的・中間態			媒体	過程中心核部:物質過程
	b		おもちゃが	壊された(受動態)
起動的・中間/実効態			媒体	過程中心核部:物質過程
	c	花子が	おもちゃを	壊した(能動態)
	d	花子に	おもちゃを	壊された(受動態)
起動的・実効態		起動者	媒体	過程中心核部:物質過程

図1 起動的解釈

図1において、bは受動文であり、Hallidayでは受動文は起動者を前提としているので基本的には実効態となる。しかし、工藤(1990)によれば、日本語の受動文で、対象にはたらきかけ、その変化をも捉える動詞を持つものでは、行為者が構文化されず背景化された場合、主語(起動者)によって行

われる動作は背景化され、実体 (媒体) において生じる変化が前景化され、「結果の継続」を表すようになる。そこで、本論が拠って立つ工藤による受動文の機能特性について、以下に論じる。表2は、受動文・能動文の機能特性をあげたものである。これに沿って以下に論じる。

表2 受動文・能動文の機能特性

能動文	受動文
行為者の前景化=受け手の背景化	受け手の前景化=行為者の背景化
動作持続=動作の前景化	結果持続=受け手の変化・結果側面の前景化
行為者のテーマ化	受け手のテーマ化

### 3.1.1 行為者の背景化

工藤 (1990: 85)は、行為者の背景化として、(i)意味的には、行為者の存在を前提としつつも、特定化されず構文的には表示されない場合、(ii) 意味的に行為者を行為者として表示せず、原因・手段化、場所化、所有者化し、結果、行為者が介在しない出来事として捉えられるようになり、自動詞構文に近づいていく場合の2つのケースに分けて議論している。以下にそれぞれの例をあげる (工藤：1990: 85-87)。

- (1) 「みんな病院に運ばれたらしいな」(砂の器)
- (2) 彼は父の男手一つで育てられた。(人間の証明) ⇒彼は父の男手一つで育った (自動構造文)。

(1)の受動文の場合、構文的に行為者が削除されても、行為者の存在が示唆されているのに対して、(2)では意味的にも行為者の存在を前提としないのが2者の違いである。(2)の場合、「彼は男手一つで育った」という自動構造に近づいてゆく。自動構造は起動的解釈の中間態に該当し、行為者とその働きかける動作の側面は切り捨てられていて、それには触れず、自ずから起こるものとして捉えられる。そこでは、能動文との対立性が失われる。従って、これら2点より、工藤 (1990) は、受動文は他動=能動文との対立関係と、自動詞構文との相関関係の中で、その機能・意味を探っていかなければならないとしている。基本的に中間態は、過程中核部が自動詞によって具現され、実効態は、過程中核部が他動詞によって具現されるからである。

これをセラピーの状況設定で捉えると、行為者性がもっぱら背景化され、Cが受け手のテーマとされることは、そうした状態をもたらした原因あるいは行為者、つまり因果関係への気づきが欠落することになり、そこでは自然発生した状況のただ中に置かれるという経験世界観がCを支配していることを反映させるものとなる。

### 3.1.2 アスペクト的意味における「結果化」(加藤 2011)

工藤 (1990) は、能動文との対立という視点からみれば、受動文は受け手



の観点から捉えることであり、それは行為者の背景化ならびに、行為者の働きかける動作の側面の背景化となり、受け手の変化＝結果の側面の前景化につながることで、つまり結果維持というアスペクト的意味をもたらすものとなるとしている。実体に変化をもたらす動詞を伴った受動態が「結果の継続」を表すと、主語によって起こされた行動は背景に退き、変化が前面に押し出される。結果性がアスペクトにおいて表現されるので、起動者は「時間において明らかにする段階」では存在しない。それは結果段階と同じで、起動者の省略は、その場合必須となる(工藤, 1990:91)。起動的解釈から説明すれば、過渡中核部は媒体を通して実現される地点では、起動者は明らかに存在する。媒体+過渡中核部の核心部の実現をもたらすのは起動者であるからである。しかし一旦、その核心部が起動者によって実現されると、核心部だけが起動者によって引き起こされた変化を具現する時間に耐えることができるというのが工藤の主張である。

こうした受動文の特性をセラピーの文脈で考えると、コンテキストにより、「結果の継続」と解釈される場合は、Cを生きづらくさせている問題の原因が、Cに内在化されたままとなっていると捉えられる。行為者の背景化ならびに、行為者の働きかける動作の側面の背景化となり、それは受け手の変化＝結果の側面の前景化につながるため、Cの「なる」的経験世界観を映し出すものとなるのである。

しかし、本研究は、この点については、3.1で述べたように、コンテキストによってそのように解釈される場合もあるが、動作受動文という解釈もありうるという立場をとる。

### 3.1.3 受け手のテーマ化という要素より受動文が選ばれる場合

受動文は、テキスト・タイプによって用いられ方が異なる。文をディスコースの中で捉える立場から、文のテーマを何にするかによって、テーマ上の統一性、あるいは結束性を保証するために、受動文が要求されるということが起る。基本的に対話ディスコースでは、話し手が主題化されるが、臨床において、「私」、つまり話し手が自己を受け身的に捉える経験世界観からは、必然的に受け手のテーマ・ディスコース、受動文が選ばれる傾向が強いと言えよう。従って、受動文の減少は、総じてCの受動的な世界観の希薄化を示すものと捉えられる。

## 3.2 Teruya (2006)の中間態

以上が工藤の議論であるが、Teruya (2006) は上述 (2) に従い図1のbを状態受動文として中間態としている。これはbにアスペクトの形態の「～している」を付して「こわされている」とした時、結果の継続が明確になり起動者の非構文化は義務的となる。しかし本研究では、状態受動文としての解釈は限定的ととり、動作受動文の場合との2つの解釈が可能と捉え、状態受動文の場合は中間態、動作受動文の場合は実効態との立場をとる。なお図1のaについては起動者を前提とせず、「媒体+過渡中核部」の組み合わせから中

間態であることは明白であるが、bと同様、意味上、「結果の継続」を表す場合があることを加えておく。

なお、この結果化を表す動詞は、対象の変化をとらえる動詞に限られ、はたらきかけの動作のみをとらえているものについてはその限りではない。以下のような動詞である(工藤, 1990)。

i) 対象にはたらきかけてゆく動作とともに対象=受け手の変化をもとらえていて、最も他動性の強いもの。

殺す・壊す・切る・割る・焼く・煮る・開ける・起こす・倒す・消す・建てる・掘る・結ぶ・上げる・載せる・入れる・外す・落とす・移す

ii) 対象にはたらきかけていく動作のみをとらえているもの。

叩く・打つ・蹴る・押す・引っ張る・撫でる・触る・揉む・さする・いじる・つつく・搔く

起動的解釈では、過程が生じるための外的要因として機能する参与要素を起動者、それを通してその過程が実現される参与要素を媒体 (Medium) とする。過程を実現するためには、参与要素が最低1つ必要であるが、過程の実現に契機を与えるという意味が媒体にはこめられている。これを他動的 (transitive) 解釈と対照させると、節の意味解釈がさらに明確になる。図2は図1を他動的解釈の視点から捉えたものである。

他動的・中間態	a	おもちゃが		壊れた (能動態)
他動的・中間/実効態	b		おもちゃが	壊された (受動態)
他動的・実効態	c	花子が	おもちゃを	壊した (能動態)
	d	花子に	おもちゃを	壊された (受動態)
		行為者	対象	過程中核部：物質過程

図2 他動的解釈

図1の中間態で媒体とされたものが、図2の中間態では行為者、また実効態では対象と解釈されるといったように、媒体の意味役割によって因果のプロセスが確定され、節の他動性が特徴づけられる。起動的解釈が過程の因果関係を捉えるのに対して、他動的解釈では、行為者 (Actor) が何らかの行為を行った場合に、「その行為が行為者を超えて何か他の事物に拡張するのかわしないのか」(Halliday, 1994:162)、つまり他動的か自動的かの区別に関わる「拡張」が問題とされる。Thibault (1993)は、他動的解釈を「1つの変数がもう1つの変数へ作用する」過程とするのに対して、起動的モデルには、ただの一般的「因果関係」以上の意味が関係するとし、他動的モデルの線状でメカニカルな因果関係と違い、自己調整的な循環的因果関係の論理を文法化しているとする。図3は、起動的解釈の中間態と実効態の力学関係を図示した

ものである。

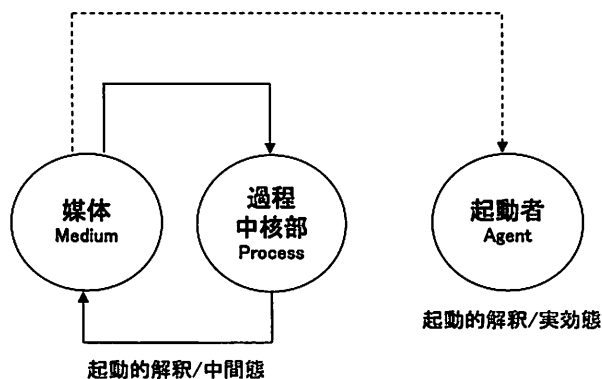


図3 起動的解釈モデルの力学関係図 (Thibault 1993: 135)

図3では、媒体+過程中核部の関係は、因果関係の自己調整の円環をなしている。点線は、潜在的な起動者の存在を示している。起動者は単に外から媒体+過程中核部に作用する独立変数として存在するのではなく、起動者が文法化された時に、1つの自動調整の円環の中で、起動者、媒体、過程中核部をつなぐ因果関係の回路のもう1つの部分として機能することになる。文法化されない場合は、因果関係の円環は存在してはいるが、媒体+過程中核部という基本的な核心部に還元されている。

### 3.3 他動的解釈と起動的解釈がもたらすセラピーのプロセス上の違い

3.1で示したように、形態上は、他動的解釈と起動的解釈も違いがない。しかしセラピーで、他動的解釈ではなく起動的解釈が必要であるとする理由について、ここでは論じる。

Thibault (1993: 136-138) は節の文法の経験的意味論における他動的視点と起動的視点の二重の意味解釈は、事実上、因果関係の2つのモデルを具現しているとしている。例えば Mary shook her hand は他動的視点からすると、Mary (行為者) did something to her hand (対象) であり、Mary は対象に直接作用する。一方、起動的解釈では、Mary (起動者) caused her hand (媒体) to do something と捉えられる。その際、Mary の行動は故意の行為から生じたのかもしれないし、あるいは不本意な力による間接的な作用によるものだったのかもしれないという意味合いを含蓄する。

別の例で言えば、John rolled the ball という例を考えた場合、他動的解釈では単に、John did something to the ball と捉えられるが、その場合、因果関係の説明は (John の行動の理由、意図など) 含意されない。他動的解釈は単に、John の行動が直接ボールを転がらせると述べているに過ぎず、一方、起動的解釈では、John と ball の間に直接的な関係はないが、因果関係の説明を暗に示している。ボールの働きにおける John の役割の因果関係、つまりその中で、起動者の行為の陰に横たわる因果的理由や力 (例えば、John の能力、信念、

意図、願望など)への深慮が暗に示されるのである。この場合の解釈は John caused the ball to do something となり、John の行動に対する理由づけが暗示される。

これらの違いの認識がセラピーで重要な意味を持つ。C がこうした言語学の理論上の解釈に通じていることは、C が言語学者でない限りほとんどありえないし、またそうである必要もない。しかし T がこの解釈の違いに通じていることは、セラピーを進める上で意義深いものとなる。T の問いかけの発話構築に違いをもたらすからである。例えば C が、「私は死にたいんです」と言った場合、T がその理由を尋ねるとする。他動的・実効態あるいは、起動的・中間態の尋ね方は以下のような発話であり、日本語表現としては最も自然な構文である。

	どうして	(君は)	そう	思うの？
他動的・実効態	状況要素	感覚者	現象	過程中核部:心理過程
起動的・中間態	状況要素	媒体	現象	過程中核部:心理過程

図 4 結果を起点とする尋ね方

図 4 の問いの構文構成に忠実な答え方は以下である。

	家庭内の不和のために	(私は)	そう	思うんです
他動的・実効態	状況要素	感覚者	現象	過程中核部:心理過程
起動的・中間態	状況要素	媒体		過程中核部:心理過程

図 5 結果を起点とする述べ方

これは結果が生じてしまったことを出発点とした表現で、「家庭内の不和のために」は状況要素であって、媒体となる「私」と作用域が示されるだけで、そこには起動者性は生じない。これに対し、図 6 は、起動者を尋ねる表現である。

	何が	君に	そう	思わせるの？
起動的・実効態	起動者	媒体	現象	過程中核部:使役+心理過程

図 6 起動者を尋ねる表現

セラピー、特にナラティブ・セラピーでは、C の問題を外在化することが C に変化をもたらす重要な要素となる。問題の原因の外在化とは、C がその否定的な自己認識によって問題の原因が、ともすれば自己に固有のまたは本来備わったものとして捉えがちになっている状況で、それを外在化することによって、C 自身の属性として捉えられていた問題の原因が、外的な要因によって構築されたものであるという認識を C に植え付けることである。典型的な言語的介入が、「何が君にそう思わせるの？」(What makes you think so?) といった表現である。図 6 は「何が (what)」を外的起動者として使役構造を用い、外的起動者を探ろうとする過程構成である (加藤, 2011)。

佐藤 (1986) は基本的な使役構造の文は、人間の人間に対する働きかけの表現、因果関係の表現の 2 つに分かれるとしている。本研究では 因果関係を表す表現としての使役構造文を扱っているが、日本語における原因・結果・理由・帰結の示し方には使役文の他に、①後置詞を用いた原因の状況語（「～のため（に）」「～のせい（で）」「～によって」「～のゆえに」など）②条件付けを表現する節複合における従属節（「～するので」「～するから」「～すれば」「～すると」など）③文末表現（「～からだ」「～のだ」「～ためだ」など）がある(佐藤, 1990: 104)。佐藤はこれらの表現と使役文あるいは SFL で定める起動的・実効態の違いは、前者が状況語従属節の中に原因・理由を示すため、主述語の結び付きの中では結果としての出来事を表すのみであるのに対し、使役文では話し手は行為者に焦点を当て、その視点から媒体の変化を述べるところにあるとしている。

T が用いる起動的・実効態の表現によって外的起動者の存在が示唆され、C は問題から自分を切り離し、新たな経験世界の解釈を獲得することができるようになる。客観的現実世界は不変のままだが、C によって捉えられる経験世界に違いがもたらされるのである。外的起動者を特定することで、C には問題の原因が自らの属性としてではなく、外在化された事象として捉えることが可能となる。問題の原因を自己に本来備わった属性と見なせば、C は自己自身を変えることは不可能と諦め、無力感を抱くことになる。こうして問題が永続することになる。しかし問題の原因を外在化することで、C は問題の原因から切り離された自己、あるいは自己から切り離されたものとしての問題の原因を体験することができるようになるのである。

ナラティブ・セラピーで多用されるこうした使役構文を用いた表現として、他に「君の不安は君にどんな罨をしかけてくるの?」「君の鬱は君にどんなことをさせたり思わせたりするの?」「君の拒食症はどんな手を使ってくるの?」「君の不信感をサポートしているのは何?それは何とグルになっているの?」などがあり慣習的な用法を無視した自由なヴァリエーションが用いられている。否定的使役構造 (negative causative) では、ある行為がなされないようにする外的起動者の探索が行われる。「何が君に君を悩ませている問題について話すのを妨げているんだろう」「何が今の生活を君が素直に受け入れるのを邪魔しているんだろう」といったような表現である (加藤, 2011)。

本研究では T の発話における起動的解釈の実効態・中間態の計量は行っていない。T のその観察は別課題であるが、ここでは C の変化を誘引する語彙・文法資源としての起動的解釈に T が通じておけば、セラピーの戦略的・有効な活用をはかることができることを提示しておく。

### 3.4 本論が観察対象とする過程型

Halliday and Matthiessen (2004) はすべての過程型が両視点から分析できるとしているが、Eggs (1994) では、中間態と自動節が、実効態と他動節が同義と捉えられ、また Davidse (1992) は、これら両視点は互いに排他的であるとの見方を示している。Thompson (2004: 137) は、英語における起動的解釈

と他動的解釈との関係は、問題が多いとし、実際のテキスト分析において妥協的な立場をとり、テキスト分析において起動的解釈を適用するのは、変化が自ら引き起こされたのか外的要因によって引き起こされたのかが最も重要な要素であり、また *we altered the color* (他/起動的・実効態)/ *the color altered* (他/起動的・中間態) の組み合わせに見られるように動詞が可逆性を持ち、同時に他動的構成として2重の解釈も可能となりうる物質過程に限るのが有用であるとしている。本研究においても、物質過程における変化だけを観察するが、それは日本語をこれらの解釈に適用する際に、物質過程以外の過程型については、以下のような問題点が生じるからである。先ず、以下の心理過程から考えてみたい。

	I	like	John
他動的解釈	感覚者	過程中核部:心理過程	現象
起動的解釈	媒体		

図7 like タイプの場合

	John	pleases	me
他動的解釈	現象	過程中核部:心理過程	感覚者
起動的解釈	起動者		媒体

図8 please タイプの場合

Halliday は心理過程は図7に示したような双方向の過程として表示されるとし、like タイプと please タイプとがあるとしているが、必ずしも正確な意味的対応をするわけではないとしている。図7より *I like John* は起動者がなく、この文と意味的対応をする *please* を用いた時に、現象が起動者になる。翻って日本語を考えた場合、自然な表現として、このようなペアは成り立ちにくい。上述の例を引けば、「私は太郎が好きだ」と意味的対応をする表現で、太郎という現象を起動者に据えた表現といえ、太郎が私の気に入らせた」といった使役表現にするか、「太郎が私の好みを満たした」といった別の表現になるが、これらは自然な日本語口語表現とは言い難い。日本語では現象を起動者とする表現は、話し言葉では極めて不自然で、ためにCが起動者の存在を認識したとしても、Cの発話に実効態の表現が用いられる可能性は低く、Cの変化の測定尺度とはならないと判断した。表3は事例1の心理過程中核部に用いられた表現をすべてあげたものである。

表3 事例1で用いられた心理過程中核部の語彙資源

事例1-初期	苛々する・うんざりする・が一んとする・がっくりくる・我慢する・感じ がする・気がする・気がつく・気を遣う・気を遣う・ぐらぐらする・後悔 する・孤立する・すっきりする・緊張する・ぞっとする・大切にする・同 情する・どきどきする・はっきりする・腹が立つ・はらはらする・びたっ とくる・必要とする・へばり付く・ぼや一んとする・覚える・堪る・感じ る・苦しむ・見る・見詰める・考える・考え出す・思う・焦る・親しむ・ 耐える・知る・怒る・悲しむ・分かる・聞く・落ちる
事例1-転換期	いじいじする・感じがする・気がする・孤立する・する・超越する・つか む・はっきりする・割り切る・感じがする・感じる・慣れる・気がする・ 気にする・苦しむ・ <u>苦しめる</u> ・決める・嫌悪する・見える・考える・困 る・思う・持つ・焦る・心配する・知る・働く・動く・動揺する・悲観す る・不貞腐れる・分かる・聞く・捕られる・抱く・立つ

表3の表現は事例1-9の「苦しめる」を除き、すべて起動者不在で中間態となり、セッション間で実効態が増加するという観察が得られなかった。他事例についても同様であるため、心理過程を除外した。行動過程における心理過程に近い表現も同様で、行動者が媒体となるが、起動者不在であるため計量データに含めない。

また発言過程については、各事例『人が「～」と言った』といったように、発言者がすべて人であり、「言内容+受信者(ほとんどC)」という組み合わせパターンがほとんどであることと、発言するという行為の捉え方が中間態であっても実効態であっても臨床上、注目点はないと考えられるためである。

関係過程節は、動詞による関係過程節と形容詞、形容動詞、名詞+コピュラによる関係過程節の2つのカテゴリーに分けられる。前者は基本的には中間態であるが、まれに実効態、非該当に分類されるものも見られた。後者は中間態と捉えられ、例えば、「私の母は横暴だ」という文を因果関係で捉えると、母を横暴にした原因、つまり属性付与者の存在が問題となるが、それは「母」の幼少時の生い立ち、あるいは現在の夫との関係性、または母親自身の先天的な要因に端を発するものかもしれない。もし先天的な要因が原因であるならば、人為的な関与の及ばない事象となる。いずれにしても、人為的なものかそうでないかの判断のしようがないため、一様に中間態とみなすのが妥当と判断した。同定文に関して、同様のことが言える。よって、心理過程同様、変化測定尺度となりえず、これも計量からは除外する。但し、同じく関係過程節に分類される「～なる」については、加藤(2011)のパイロット・スタディの結果より、変化測定の評定尺度として確立しようという仮説が立てられ、過程型のタイプとは別個にして評定尺度として設けることにした。

よって、本研究では物質過程を除く他過程型のタイプにおける上述の問題点より、物質過程のみの計量結果を論考対象とする。

### 3.5 物質過程計量の内訳

Halliday は物質過程を「する」タイプと「起こる」タイプに分けている。「起こる」タイプは「する」タイプとは異なり、外部起動者を持たない。「起こる」過程は自発的なものであり、外部の起因者は過程の展開にとって不要である。以下は、「起こる」タイプと「する」タイプの例である。

「起こる」タイプ：

(3) 転勤で、環境がすごい変わって、もう・・・

「する」タイプ

(4) 何も隠したりせずに、素直に打ち明けられるようになって。

図9は各事例より、「起こる」タイプと「する」タイプの割合を示したもので、物質過程全体における「起こる」タイプの割合が、各事例とも微少であることがわかる。

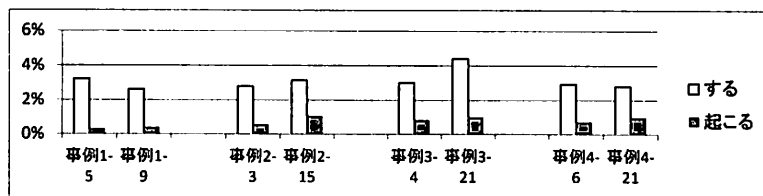


図9 「する」と「起こる」タイプの頻度割合

「起こる」タイプか「する」タイプかの識別は、コンテキストとの注意深い照合の上、なされている。例えば図1の例で言えば、通常「おもちゃが壊れた」は、誰かが壊したから壊れたという解釈を想定するが（この場合は「する」タイプ）、コンテキストによっては、「起こる」タイプの解釈もありうるため、注意を要するということである。仮にそのおもちゃが特殊な材質でできていて、それが気温の変化などで割れる、ひびが入るなどの自発的变化を起こす場合も想定されるからである。この場合は、「起こる」タイプとなる。厳密に言えば、気温の変化等の自然界の物理現象が外的起動者になるわけであるが、少なくともセラピーの設定では、こうした自然現象を外的起動者と見なしても意味を持たないので考慮に入れない。しかし、人為的な事象の場合は、コンテキストによって、二者間で解釈の転換がなされている。

逆に「起こる」タイプとして分類される「死ぬ」は、自然死の場合、生命体の生理現象としての死として、外的起動者を持たないとみなされるが、セラピー設定において「私は死にたいんです」とCが言う場合<sup>4</sup>、Tがあえて外的起動者を想起させる問い、図6の例で言えば、「何があなたを死にたがらせるのですか」を用いることで、問題の外在化が可能となる。特に事例1, 4のような鬱患者は、死にたいと思う傾向を自己の属性と考えがちであるため、Tに外的起動者の存在を認知させることは重要である。



#### 4. 結果と考察

##### 4.1 計量結果

図 10 から 13 は、4 事例の初期と転換期における物質過程の実効態・中間態の総形態素数に占める割合を計量したものと、受け身文と使役文、「なる」表現、それに補助動詞、「ある・おく・もらう・やる・いく・くる・くれる・あげる」の頻度を同じく総形態素数に占める割合で計量したものである。各図のグラフの棒で、塗りつぶされてある方が初期を示し、塗りつぶされていない棒が転換期を示す。また表 4 は、各事例ごとに、5 つの語彙-文法的資源「受身」「てしまう」「なる」「実効態」「中間態」が、初期と転換期で頻度の出方に違いが見られるのかどうかを  $\chi^2$  乗検定によって検証をはかった。表より、結果、事例 1 から 3 では、2 つの時期で、これらの語彙-文法資源の出方に有意差が見られ、失敗事例である事例 4 においては、見られないことがわかった。また、有意差が出た事例 1 から 3 では、個別の項目のどこに差があるかを示すために、表には残差分析結果を示している。これらの計量結果がセラピー設定上、何を意味するのかを以下に論じる。

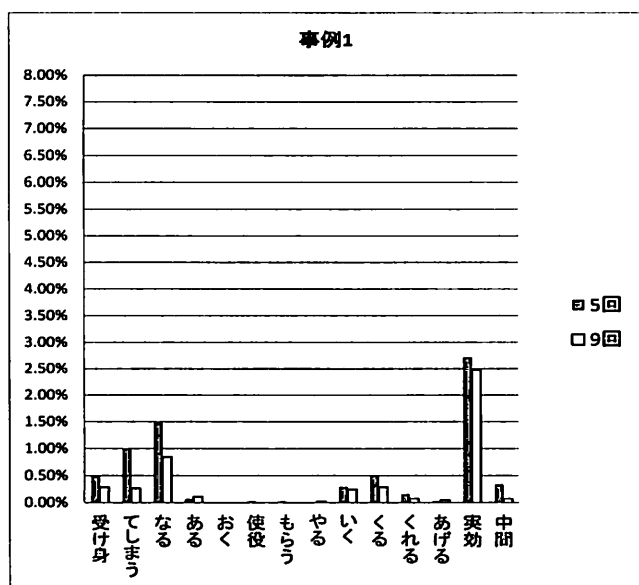


図 10 頻度割合/事例 1

加藤：クライアントの過程構成のマッピングより得られる変化測定尺度としての起動者性

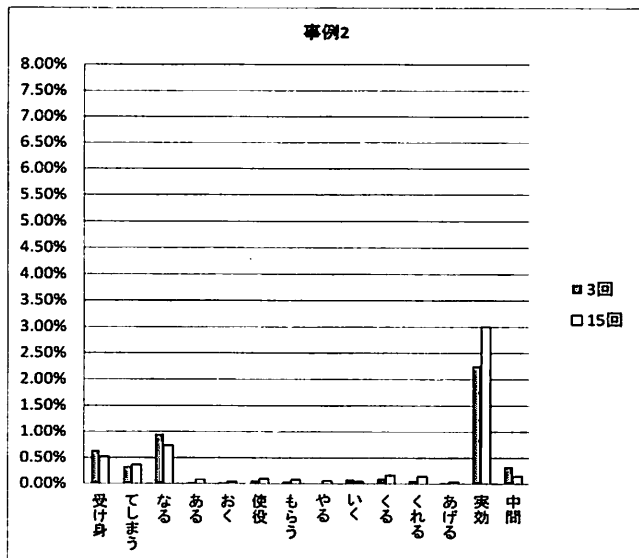


図 11 頻度割合/事例 2

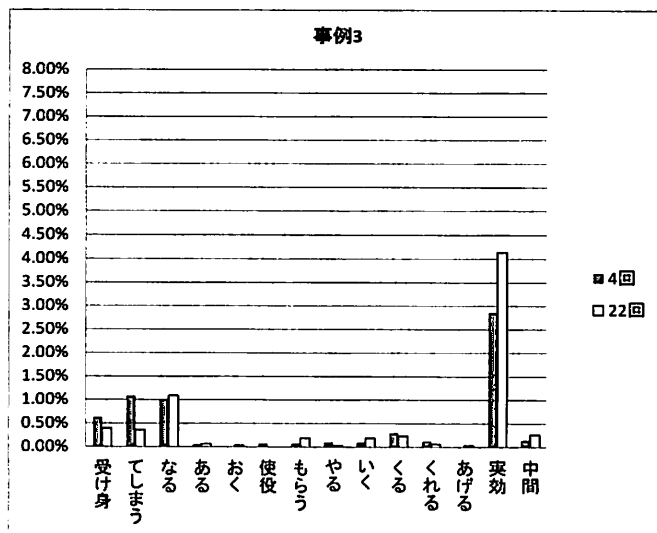


図 12 頻度割合/事例 3

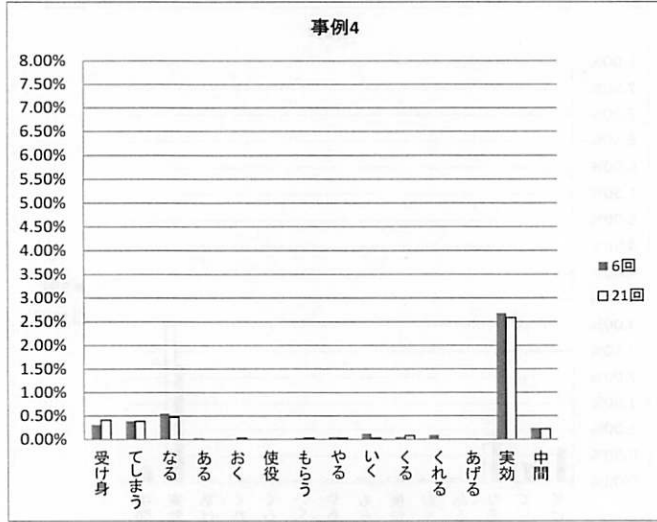


図 13 頻度割合/事例 4

表 4 事例別語彙-文法資源の出方の変化の相違

事例		受け身	～てしま う	なる	実効態	中間態	自由度	$\chi^2$ 乗値	P値
事例1	初期	22	44	66	118	16	4	21.693	p<0.1
	転換期	13	12	38	115	3			
残差分析結果			p<0.1		p<0.1	p<0.5			
事例2	初期	31	16	46	109	16	4	11.186	p<0.5
	転換期	29	20	41	167	8			
残差分析結果					p<0.1	p<0.5			
事例3	初期	25	43	40	114	6	4	21.813	p<0.1
	転換期	12	11	33	126	8			
残差分析結果			p<0.1		p<0.1				
事例4	初期	13	16	23	112	10	4	0.878	n.s.
	転換期	15	14	17	94	8			
残差分析結果									

n.s.: 非有意

#### 4.2 臨床的視点から捉える日本語の実効態・中間態構成

本論では、3.2 の議論より、変換期には、実効態の表現が増え、中間態の表現が減少するという仮説を立てた。表 4 より、先ず実効態・中間態の計量結果を見ると、成功事例である事例 1 では、「中間態」が転換期に有意に減少していることがわかる。これは 3.2 の議論より、セラピーでは C が問題に感じられなくなっている状況から脱するには、起動的解釈における外的起動者の視点、つまり実効態の経験世界構成が獲得されること、中間態の視点が弱まることを裏付けるものである。しかし実効態は、逆に有意に減少し、仮説に反する結果となった。これについては、物質過程だけを観察対象としたためという見方も可能である。セッションによっては、他の過程型タイプの頻度の増減の観察が必要な場合もある。例えば事例 1 では、図 14 に示すように、心理過程の「認知」が多くなっているという現象に注目したい。3.3

で述べたように、日本語の習慣的表現用法上、心理過程は中間態より変化のしようが考えられないため、形態上の変化の測定は難しいが、図 14 より、心理過程の内訳を見ると、情緒が転換期にほぼ半減し、認知が増加している点に注目したい。情緒が減少するのは、感情を表す過程型が減ることということで、同じく認知を表す過程型が増えることは、C の経験世界への認知、臨床的視点からは、洞察・気づきが進んでいるという解釈が可能である。

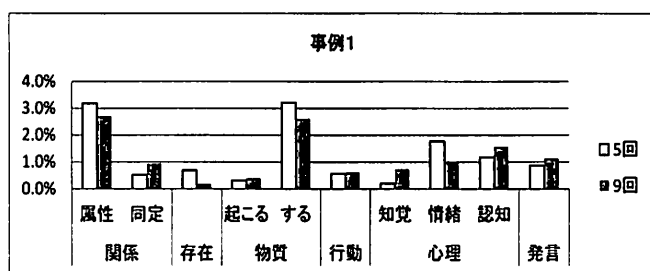


図 14 過程型タイプ別計量結果/事例 1

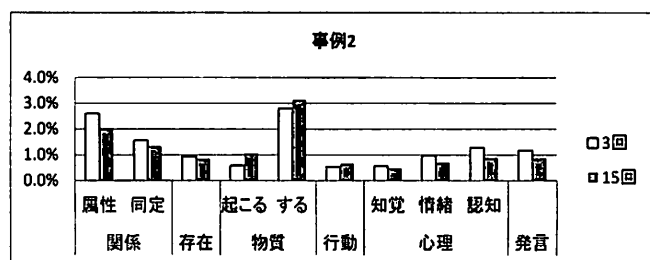


図 15 過程型タイプ別計量結果/事例 2

特定の感情にがんじがらめになっているCを、その感情を客対化することによってその問題感情から切り離し、C の「感情の内省」を促すというプロセスは、流派を問わず、セラピーの重要な局面である。感情体験と認知的内省の統合を経て、C は1つの感情処理を達成し、それが C の変化を示す尺度となる。従って、心理過程における情緒から認知への頻度の増加は、C の洞察・気づきの進捗を反映するものとの推察も可能である (加藤, 2012)。情動処理については、5で改めて述べる。

よって、特に臨床家の評定で成功事例とされるものに関しては、心理過程の情緒と認知を示す過程型の頻度の増減も、合わせて参照するのが望ましい。

なお事例 2 と 3 については実効態が有意に増加していることを示している。また中間態については、事例 3 は有意差が見られなかったが、事例 2 については、有意に減少していることがわかった。事例 1 と同じく、図 15 で心理過程の増減を見てみると、事例 2 では特に心理過程が増加するという傾向は観察できなかった。よって事例 1 と比べて、まだ感情の抽象的認知処理段階に達していないという見方も可能である。事例 4 では、実効態・中間態とも、有意差は観察できなかった。これは本研究が立てる仮説からすると、改善への転換が見られないとみなすことができ、結果的にクライアントのドロップアウトに終わっている。

これらの結果を基に、図 16 に C の視点の転換モデルを示す。

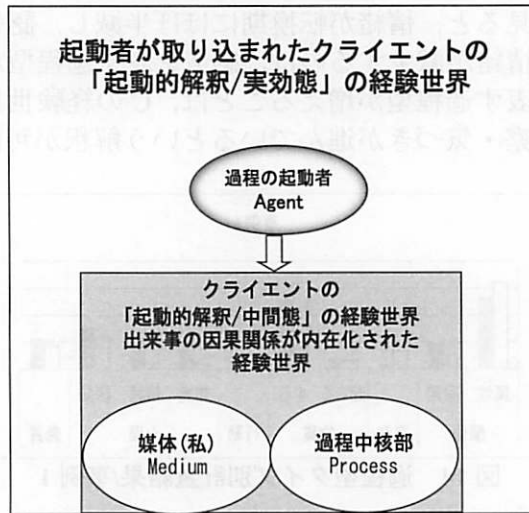


図 16 C の経験世界の捉え方の視点転換モデル (加藤 2011)

図 16 において、網掛け部分が起動的解釈から見たセラピー開始時における C が捉える経験世界で、中間態の経験世界である。そこでは C は、出来事が当事者の意図を越えたところで、自ずから成っているとする経験世界観に支配されている。そのため、問題と自己自身が同一視された状態に置かれる。こうした世界観がまさに C の問題状況を硬直化させる原因と見なすことができ、状況打開のために、C の発話の過程構成に起動者の導入が求められる。この操作は過程構成の起動的解釈の中間態から、実効態への移行によって具現される。ここで、起動的・中間態の見地から経験世界を捉えると、そこに外的起動者の存在が示唆され、自分（「私」）を媒体として認識することで、問題あるいは出来事を因果関係で考える視点が獲得される。そこで起動者の位置に、原因となるもの、例えば、「過去のトラウマ」、「家族関係」、あるいは具体的な人物などを配置し、それを構文化することによって、網掛けで示された経験世界観より脱することができるのである。それが使役構造文であれば、視点の転換は明確度を増す。

中間態から実効態への視点の転換は先述したナラティブ・セラピーのように、T の積極的な言語的介入によって引き起こされる場合もあれば、セラピーの展開に伴って、C が自ら気づきとして獲得する場合もあり、どちらのプロセスをとるかは流派によって異なる。なお、使役形は、本研究の事例では、極めて低い頻度でしか観察されず、統計的検証の俎上に載せることはできなかった。

#### 4.3 文化的要因変数

臨床概念としての図 16 の C の視点転換モデルは、文化的要因変数の影響を考慮に入れて捉えられなければならない。日本人は、動作主が実際は存在

するのに、それを統語構造に織り込まずに表現するのを常とする。例えば、「部屋を汚してしまった」とは言わずに、「部屋が汚れてしまった」という表現が好まれる。あるいは、「私は彼にライバル意識（あるいは怒り）を燃やしている」とは言わずに、「ライバル意識（あるいは怒り）に燃える」という表現が一般的である。「トランクが重くて持ち上がらない」のは、正確に言うと、「持ち上げることができない」のであるが、日本語では、前者の自動詞による表現が慣習的である。これらの動詞は起動的解釈の中間態とみなせよう。

また受け手の視点を表す表現として、影山が脱使役化（脱使役化動詞：他力の存在を陰に隠して対象の変化のみを表す）として分析できるとする「預ける」に対して「預かる」、「教える」に対して「教わる」、「授ける」に対して「授かる」、「ことづける」に対して「ことづかる」、「言いつける」に対して「言いつかる」、「申し付ける」に対して「申しつかる」、などの授受動詞の表現も発達している。これらの動詞ペアの后者は、例えば「AがBを預かる/教える」としてヲ格目的語をとるという点では他動詞であり、これらのペアは「自他」の交替ではない。しかし意味的にはもとの他動詞（預ける/教える）の行為者が脱使役化によって統語構造からはずされているため自動詞的あるいは受身的である（影山，2001: 32）。「落とし物が見つかる/警察に見つかる・矢が的に当たる/毒気に当たる・作品に手を触れる/湿気に触れる・テープを聞く/初めて鶯の声を聞く・ビールを冷やす/不注意で肩を冷やす」（森田，1999: 160）などのように同じ語彙で、能動・受動両方に働く自発的な受けの姿勢を表す動詞も豊富である。可能・自発・自動詞「なる」表現なども、いずれも主体の視点から捉えた受け手の発想に基づく文法現象である。

こうした特徴を備えた日本語は、動作主はあくまで任意的な要素で、意味の焦点から外されている（ヤコブセン，1989）。上述の例のような自発表現が、英語よりも日本語に圧倒的に多い理由としてヤコブセン（1989: 238）は、プロトタイプ論式に、表現対象が他動原型にあてはまるか、自動原型に当てはまるかに関する捉え方という発想の違いに起因するというよりも、一定の事態に係わる関与物のうち、どちらに関心を持つかという関心の置き所の違いであるとしている。つまり、英語のような「する」型の言語では、ある事柄に対して、誰（何）がそれを引き起こしたかという動作主側に関心を向け、日本語のような「なる」型言語では、結果としてどうなったかという対象物寄りに関心を向けるとし、それは個々の文化の異なる自然環境、生活体制、歴史的背景の反映の産物であるとする。

必然、こうした文化に根ざした表現習性が、臨床の場でも免れ得ず、それに増して病が誘引となる中間態の経験世界観がCの中に存在するという仮説から、その水増し部分がセラピーを通して、除かれるかどうかが変化測定の尺度となるのではないかという仮説を立て、量的実証を本研究では試みた。結果、もともと動作主が意味の焦点からはずされている中間態の言語観が支配的なところに、英語の Agency の概念を導入し、それを尺度として臨床プロセスを捉えるという試みは、本研究の事例分析結果を見る限り、実証の見

通しが立ったと言える。

#### 4.4 「なる」表現

Halliday は become を属性付与的な動詞として関係過程節に入れている。この become を日本語に対応させると「なる」という訳語になるが、日本語で言う「なる」の意味は多様である。佐藤 (2005) は、「なる」の意味範疇を変化のプロセスを述べる語彙資源と (グラスが粉々になる), コピュラと置換可能である「非変化」の「なる」として, ①計算的推論の「なる」, ②対人的行為の「なる」とに分けて議論している。以下のような例である。

(5) 計算的推論： 彼は 66 年の早生まれなので, 私と同じ学年になる。

(6) 対人的行為： こちらはお手洗いになります。

本研究では, 前者は Halliday の解釈に従い, 変化のプロセスと言ってもあくまで属性付与とする見方をとる。話者の個人的判断ではなく, 一定のルールに従った客観的推論で, 必然的に「～との結論に至る」という捉え方であり, 後者は, 属性付与であるが, 佐藤の踏み込んだ議論では, 話者個人の伝達行為としてではなく, 帰属する社会組織の立場で伝達すると「～である」とする捉え方で, 発話行為のスタイルとしての自己の背景化, 非個人的な立場で発話しているとされる (佐藤, 2005)。必然, 中間態の立場となる。これらは変化のプロセスを述べる「なる」と合わせて, コピュラと置換可能である「非変化」のそれは関係過程節として捉える。

池上 (1981) は, 日本語を「なる」的な言語として, 「する」的な言語としての英語と対比させて論じている。池上によれば, 英語が「する」的視点傾斜の言語であるのに対して, 日本語は「なる」的視点が言語表現に色濃く根ざした言語である。このように日本の言語文化が「なる」的なものに大きく傾斜するものであるとすれば, 「なる」自体を観察することは, 日本語の自動詞的表現を包括的に考える上で有用な情報を提供するであろう。

「なる」的世界というのは, 物事が当事者の意図を越えた次元で引き起こされ, また必然的にそうした状況に置かれるといった経験世界の捉え方である。これを心理療法の文脈で捉えた時, まさにこうした経験世界観が C の問題となる状況把握に膠着状況をもたらすと考えられる。図 17, 18 に示すように, 「なる」表現を起動的・実効態で表現すると「する」になる。つまり, 「なる」は他動, 起動両解釈において中間態の世界であり, これを両解釈において実効態にしたものが「する」的世界となる。

他動的・ 中間態		a	(私は)	不安に	なる
		b	(私は)	死にたく	なる
			体現者	属性	過程中核部：関係過程
他動的・ 実効態	過去のトラウマが	c	私を	不安に	する
	過去のトラウマが	d	私を	死にたく	させる
	始動者（属性付与者）		対象	属性	過程中核部：関係過程

図 17 「なる」の他動的解釈

起動的・ 中間態		a	(私は)	不安に	なる
		b	(私は)	死にたく	なる
			媒体	作用域	過程中核部：関係過程
起動的・ 実効態	過去のトラウマが	c	私を	不安に	する
	過去のトラウマが	d	私を	死にたく	させる
	起動者		媒体	作用域	過程中核部：関係過程
使役構造	過去のトラウマが	e	私を	不安に	ならせる
	過去のトラウマが	f	私を	死にたく	ならせる（させる）

図 18 「なる」の起動的解釈

しかしこの「する」を物質過程ととるのは誤りである。例えば、図 17 と 18 の c は、「不安」という状態に至らしめるといふ広義の使役と捉えられる。同じく図 17 と 18 の d では、動詞を伴うことで使役としてののはたらきがより明確になっている。

加藤 (2011) は、心理療法 2 事例について初期と回復期における「なる」表現の頻度変化を統計的検定にかけ、回復期では「なる」表現が有意に減少することを示している。本研究では、4 事例について計量したところ、いずれも有意差は得られなかった。今後さらに症例などの変数を厳密に固定させた上で、事例数を増やし、検証をはかる必要がある。

また、加藤 (2010) では、「なる」の使用は、回復期で使われても、(7) と (8) の例のように、肯定的な変化について言及するものが多いことが確認されている。このことから「なる」に関しては、肯定的か否定的か、使用上の極性を含めた計量が有用な情報を提供しよう。

(7) 人から離れても、自分で選んで決めていこうっていう気になりましたし。

(8) でもそういうことがあってから、何でもないなって思うようになったんです。

なお、池上は、「なる」に対比させて「する」を当てているが、「する」が必ずしも英語と同じ意味合いを持つとは限らない。字義通りに取れば、「する」は能動的な行為として実効態に分類されるが、自分の感覚器官に感知されるものとして、話者側から受動的に捉えられる叙述を表す「する」の場合、受動的な自発現象を表す。森田 (1999: 151) は、『「する』』と言いながら、内実



はおのずとそう『なる』発想は、さらに進めば、真実は成り行きであるにもかかわらず、いかにも己の意志でそのように事を行なったかのような裏返しの表現」とし、例として、「匂いがする・音がする・声がある・味がする・予感がする・胸騒ぎがする・胸がどきどきする・吐き気がする・うまく行きそうな気がする」などをあげている。本研究の事例でも、「感じがする・気がする」をはじめ、このタイプの表現が頻出するがこれらは物質過程の「する」タイプとは異なるもので心理過程として捉えている。

#### 4.5 受け身型過程中核部

本論が立てた仮説は、受け身型過程中核部の減少は、3.1の工藤の議論の3.1.1より、行為者性の背景化に伴ってCが受け手のテーマ化が生じ、Cの問題の状態をもたらした原因あるいは行為者、つまり因果関係への気づきが欠落した状態からの脱却を示唆のものであるということである。

計量にあたっては、「～している」というアスペクト形態が付かない過程中核部は、状態受動文・動作受動文との区別が曖昧となるため、同じく3.1の工藤の理論の3.1.2の「結果化」の視点は含めず、3.1.1の「行為者の背景化」に限った立場から、「～している」を含め、あらゆる受け身型過程中核部を計量データに含めている。よって、動作受動文と状態受動文をそれぞれ実効態・中間態と区別することはせずに、また、別項目である実効態・中間態と重複することはなく、受け身型過程中核部として、独立項目としている。

加藤(2011)による先行研究では、初期と回復期において頻度差は見られたが、統計的有意差は観察できなかった。本研究においても、失敗事例である事例4を除き、他3事例については、頻度割合だけを見れば、明らかに転換期において受動文の出現頻度が減少しているが、統計的検証は得られなかった。「なる」同様、症例等の変数をできる限り固定した上で、事例数を増やした観察が必要である。

#### 4.6 視点を表す補助動詞

日本語は、自己を客体化して話すことは稀で、外界事象を主観的に捉えて述べるため、その際の主観的視点を表す補助動詞が発達している。本研究では、「ある」「おく」「もらう」「やる」「いく」「くる」「くれる」「あげる」などの授与動詞の頻度数が少なく、統計的検証の俎上には載せられなかった。また臨床上の概念と照らし合わせた規則性は観察されなかった。

補助動詞の中で、出現頻度において注目すべき項目が、「～てしまう」である。加藤(2011)では、「なる」「受動文」と同じく、「～てしまう」と「なる＋～てしまう」の出現頻度が計量され、2事例において、回復期にこれらの表現が減少することが観察されたが、統計的検証は得られていない。本研究では、4事例中、事例1と3において、転換期に「～てしまう」が、統計的に有意に減少することがわかった。

寺村(1992)は、「てしまう」をアスペクトを表す表現とし、基本的に行為・動作、出来事が完了したことを特に強調する表現であるとしている。この場

合の「しまう」の補助動詞としての中心的な意味は、本動詞の「モノをしまう」などの「しまう」の意味を受けついでいる。完了を表す動詞にこの「しまう」が付くと、「大事な人を失ってしまう」など、「その事が起こって、もはや起こる前の状態に戻ることはできない」(寺村, 1992: 153), つまり自分ではどうすることもできない場合は、話し手の悲嘆,あるいは自らの行動の結果であれば、後悔という心理状態を伴うものとなる。また、元の状態には戻れない,あるいは取り返しがつかないという心理には、「おいしいものにはつい手が出てしまう」のように、自分の意志によって行動を起こすか起こさないかを決めることが可能であるにもかかわらず、意識より早く体が動いたという意味合いを含むとしている。

吉川 (1973: 228-) では、基本的に寺村の解釈に沿っているが、さらに整理されて述べられ、「てしまう」の働きとして、次の5点に細別されている。

- i. ある過程を持つ動作がおしまいまで行われることを表す。  
＜動作の完了＞  
例： ぜんぶの組がことばを送ってしまうと組の終わりの人が書いた紙を読み上げた (三上)
- ii. 積極的に動作に取り組み、これを片付けることを表す。  
＜積極的動作による完結＞  
例： 殺し屋を雇うて金沢へやり相手をあっさり消してしまうんや。  
(白い巨塔)
- iii. ある動作・作用が行われた結果、取り返しがつかないという気持ちを表す  
＜消極的な動作・作用による完結＞  
例： 目標の灯はどこかに消えてしまった。(砂の女)
- iv. 動作が無意志的に行われることを表す。  
＜無意志的動作＞  
例： みんなあわててしまいました。(三上)
- v. 不都合なこと、期待に反したことが行われることを表す。  
＜不都合・反期待＞  
例： とんでもないことになってしまうぞ。

iを基本として、吉川 (1973) は iを「ことばを送ること」を時間相の中の一過程として捉え、アスペクト的なもの、iv と v を過程という視点から離れた全くムード的なもの、そして ii と iii を両者の中間に位置するものとしている。つまり、iのようにアスペクトとして「てしまう」を捉えた場合、ある動作の終了局面を扱っているが、ii と iii では、このアスペクト的側面

とともにムード的な側面、つまり話し手の気持ちであるが、ii では動作に取り組む際の積極性を、iii では取り返しがつかないという気持ちを表すという意味合いが含まれているということである。藤井(1992: 18)は、吉川のムード的視点をさらに進め、これを「話し手の現実に対する感情・評価的な態度」として、モダリティを構成するとしている。この感情・評価的な態度は話し手のもので、「してしまう」が1人称に用いられる時には、話し手自身の行動に対する後悔、無念さ、困惑、自己卑下、慨嘆、腹立ちといった否定的感情表現となる。2人称で用いられた場合は、相手への非難・忠告、3人称では、第三者の行動に対する話し手の不満、失望、慨嘆となる(藤井, 1992: 27)。

本研究では ii~v の意味合いを持つ表現を計量し、事例1と3で、転換期において「～しまう」が減少することが統計的有意差で確かめられた。このことは、Cの経験世界観から、「取り返しがつかない」「後悔」「困惑」観が払拭されつつあることの現れと解釈できる。これもまた、Cの視点を表出させる重要な資源と見なせる。

#### 4.7 総合的プロセス診断

表4より、事例1では「～しまう」「中間態」が転換期において有意に減少を示すという結果が得られたことから、本研究が立てた仮説からすると改善の兆候を示すという診断が可能である。事例2では、実効態において有意に増加、中間態において有意に減少傾向が見られ、これについても同様に、改善の兆候を示すものとしての仮説を裏付けるものとなった。事例3では「～てしまう」が有意に減少、「実効態」が有意に増加していることで、事例1,2同様、仮説を裏付ける結果が得られている。事例4では、いずれの項目も有意差が観察できなかった。

これらの結果を総合的に診断すると、事例1,2,3とも、症状の改善への変化が観察されるということが言えるということになる。事例1については、臨床家の査定が最も高く、事例2は1よりは劣るものの、改善への変化が見られるとされ、3については、査定は事例1ほど高くはないが、「小康状態」を保っているとする臨床家の評定に沿うものとなった。事例4については、評定者が失敗事例とする査定を裏付けるものとなった。

事例1は、劇的によくなったケースであり、その意味ではモデル・セッションとして参照される稀なケースである。心理療法の成果の実態は流派によっても異なるが、終結とするレベルは多様である。また事例4のようなドロップアウトも多く、Sledge et al. (1990) は、短期療法と長期療法を受けたC、それぞれのドロップアウト率を調べたところ、前者が67%、後者が61%であったことを報告している。こうしたドロップアウト率は、療法の流派によっても異なることが様々なドロップアウト研究より報告されている。いずれにしても明確な成果を示す状況展開となるケースは決して多くないというのが、臨床の現状である。よって事例1のようなケースは、1つのモデルとして、効果測定尺度を構築する試みにおいて、有用な情報を提供する。

## 5. 放棄された行為としての言語行動から action language への移行

Schafer (1976: 9-15)は、Cの心理上生じる様々なプロセスをすべて行為と見なし、無意識的な行動も含めてすべてC自身が選び取った活動であるとの認識をTは促すべきであるという立場から、Cが自らの言語行動を、名詞、形容詞は避け、動詞、副詞で表現すべきだと主張する。こうした主張に基づき、以下のような言語行動が奨励される。

(9)

- a. She is lethargic. → She behaves lethargically.
- b. He became more friendly. → He worked (or talked or played) with others in a more friendly manner than before.
- c. A change was occurring in his attitude from friendliness to belligerence.  
→ He changed from acting friendly to acting belligerently.
- d. No hope was held that things could get better.  
→ No one hoped any longer to be able to improve his or her situation.
- e. The goal of perfection was emphasized.  
→ He (or she) emphasized the goal of perfection.
- f. It makes me feel happy. → I think of it happily.

Schafer では be や become の使用には注意を要するとして、(9a) と (9b) のような関係過程節は退けられる。日本語で言えば、「なる」表現、形容詞・形容動詞を過程中核部とする文、あるいはコピュラ文は適切ではないということになる。Cは自主的に行動を選び取り、行為者として能動的に活動するのだとする視点を獲得すべきだという行為言語主義に立てば、必然、(9e) のような受動表現は能動表現に置き換えられるべきだという主張となる。そうされることによって、Cは被害者意識が軽減され、受け身的に苦しむといったことがなくなっていくと考えられる。また Schafer は、(9f)のような使役構文も原因を外的なものに帰することになり、よくないとしている。

Schafer の主張は、中間態から実効態への移行が C の変化測定の尺度となるのではないかという本研究の仮説と一部重なるので、ここで共通する部分を明確にしたい。まず、Schafer の行為言語の主体が人（特に I [C をさす]）でなければならず、それは過程中核部が能格他動詞と非能格自動詞で主語が I であることを求め、その他は排除される。これは他/起動的解釈では実効態になり、この形態が増加することを本研究では、変化尺度とする。しかし本研究では、動作主、あるいは起動者を I に限ってはいない。従って、この面では部分的に共通性があるということになる。一方、Schafer が除外するその

他の Agent が、本研究では問題の外在化を促し、大いに奨励されるべきであるとする点は明らかに異なる点である。2 点目は、行為言語は受身形と「なる」表現を、C の受動的な経験世界観を示すものとして、C の症状改善とは逆行する視点を表出させる資源であると捉える点は、本研究と見解を一にする。

Schafer の行為言語論の主張とは、「放棄された行為 *disclaimed action*」あるいは行為者主体が背景化された行為に、行為者主体を明確化させ、C に「自分が～する」の気づきを与えることであると言える。いわば、自らのものであることが放棄された行為を、1 つ 1 つ主体に返していくプロセスである (岡野, 1989)。これはセラピーの 1 つの基本側面を定義している。Schafer の発想があまりに単純化されているとされるのは、行為言語が抽象的な表現を認めない点で、これは臨床上の概念として、基本的な誤りを呈する。一見、放棄された行為と見えるものは、2 つの捉え方があり、1 つは、C の受動性を示すものであるから、矯正されなければならないというのが Schafer の主張で、もう 1 つは、C の経験世界の認知が、問題・出来事を外在化して客観化された表現を用いることで具現されるという点である。後者を Schafer は排除している。例えば、Schafer は C の名詞表現の使用を行為言語に反するものとしているが、名詞は C の感情の認知を促す重要な役割を果たす語彙-文法資源である。

セラピーを成功に導く要件として、「感情の内省化」がある。人は情動を経験すると、その意味を探索しようとするもので、情動の経験と認知的な探索や内省の過程が統合されて、はじめて 1 つの情動体験が処理されたといえる。その際の情動処理の進行具合は、自らの情動経験をどの程度象徴化して語り、そこに意味を見出し、今後の問題解決に役立てられるかなどに反映される (伊藤, 2006)。こうした象徴的コントロールは、C をがんじがらめに行っている特定の感情を抽象化・概念化することで、それを自己アイデンティティから切り離すことによってなされる。

名詞化の基本機能は、一致した表現、あるいは整合形の文が名詞化されると、叙法部から独立できることで主語が除かれ、そのため行為者性が除かれるという点である。これによって行為は特定の個人から離れて「もの」化され、それによって一般化・概念化・抽象化が起こる。C の問題情動が「もの」化されることによって、C に本来備わっている属性としてではなく、外在化された現象として見なされることが可能となる。感情の概念化によって、古い情動体験が処理され、新しい情動と認知の統合がなされる。この情動処理とは、C が体験した情動をどの程度象徴化して語れるかによってはかられる。Greenberg & Safran(1987) は、感情の情報処理は情動と認知が統合され、新しい認知 - 感情的意味構造が構成されることで完了するとしている。こうして「感情の内省」がなされる。名詞化によって自分の情動が命名され、それが象徴的コントロールとして働く。ここから C は象徴化された情動体験を問題解決に向けて役立てていけることになる。

これらの議論より、認知を示す抽象化された表現と、Schafer の主張する具

体的な行動を反映させる行為言語の両方が、適度のバランスを持って表出されるのが理想ということになる。Schaferの行為言語論に関しては、精神分析の立場から、無意識の概念への説明がなされないのと、回復がすべてCの行動の能動性の発露に収斂するのといった批判がある（岡野, 1989）。しかし言語データを使って、実証を試みようとする先行研究はなく、また Schafer自身も後になって、この考えを強く推し進めることはなくなった。本研究では、起動的解釈による実効態の増加が変化尺度となりうるとする仮説より、実証する試みを行い、結果、限定的にはあるが、Schaferの主張がセラピーの1つの骨子となる側面を示していることを示した。

## 6. 結論と今後の課題

本研究では、Cの視点の偏向性を示す表現として、視点を示す語彙・文法資源を取り上げ、これらがCの経験世界構築の視点をどう反映させるのか、そしてセッションを重ねる過程でのこの表現の使用頻度の変化をどう捉えるかについて論じた。以下、語彙-文法資源ごとにまとめる。

### 6.1 物質過程における起動者性

過程型のタイプのうち物質過程をとりあげ、SFLにおける起動的解釈の中間態と実効態をセラピーの文脈で捉えると、中間態では行為者性が剥奪され、媒体に擬似的に行為者性がもたらされることで、Cの生を生きづらくさせている問題を固定化させる素地となる。問題の原因＝自分自身という図式である。実効態に視点を転換させることによって、問題の原因となる起動者が構文化され、Cは自分を悩ませている現象を、因果関係から捉え直せるようになるという仮説より、初期と転換期のセッションの過程構成のマッピングをはかり、こうした変換がはかられているかどうかを検証したところ、成功1事例と小康事例の2事例において、実効態が転換期に有意に増加していること、また同じく成功2事例において、中間態が有意に減少していることから、効果/プロセス研究における測定尺度として、注目してよい項目であると思われる。症例などの変数を厳密に固定した上で、事例数を増やした検証が今後の課題である。

### 6.2 「なる」

失敗事例も含め、すべての事例において、度数上は、明らかに転換期において減少傾向を見せたが、統計的検証は得られず、症例などの変数を厳密に固定した上で、事例数を増やした検証が今後の課題である。

### 6.3 受動表現

能動文との対立という観点からみれば、受動文は受け手の観点から過程を捉えることであり、そこに行為者の存在が構文化されない場合は、行為者の背景化ならびに行為者の働きかける動作の側面の背景化となり、それは受け手の変化＝結果の側面の前景化、つまり結果化、結果の継続というアスペク

ト的意味がもたらされる場合がある。これは対象の変化を捉える動作にあてはまる。この結果の側面の前景化が、Cの「なる」的経験世界観を固定化させるものと捉えられる。よって受動文の減少が変化の尺度となりうるものであることが本研究の仮説であった。

計量データでは、受動文もまた失敗事例を除き、度数上は、明らかに転換期において減少傾向を見せたが、統計的検証は得られず、この減少がまだ偶然の域を出ないという結果にとどまった。症例などの変数を厳密に固定した上で、事例数を増やした検証が今後の課題である。

#### 6.4 補助動詞

Cの視点を表す補助動詞として挙げた項目のうち、「～しまう」表現が、事例1と3において、転換期に有意に減少する傾向を示した。「～しまう」の減少は、Cの経験世界が、「取り返しがつかない」「後悔」といった無力観から解放されつつあることの現れと解釈できる。変化の測定尺度として注目してよい項目である。

#### 6.5 今後の課題

日本語が中間態が支配的な言語表現形態であるにもかかわらず、このような結果が出たことは、病が中間態の経験世界構築に加担していることを実証するものである。これをプロセス/効果研究の尺度として確立するには、症例などの変数を厳密に固定した上で、事例数を増やした検証が必要である。

本研究では、Cの側の変化の観察に終始したが、同時にTの側から、各流派が起動者性を促すのに、どのような言語的アプローチを行うのかを明らかにすることも重要な課題である。行為者性の問題は、欧米の臨床心理の研究において重要な問題となっているが、行為者性をどう促すか、そのプロセスを明らかにしようとする研究はあまり進んでいない。

加えて疾患別の分析も重要である。本研究が扱った事例は、抑鬱、自己愛性パーソナリティ障害といった異なる症状の事例である。本研究では、実効態が増え、中間態が減少することが変化尺度となるとの仮説で議論を進めてきたが、妄想性統合失調症のように、過剰な起動者性が観察されるケースでは、逆に起動者性を減じることによって症状が抑えられるケースもあろう。疾患もまた固定されなければならない変数となる。

本研究を、Cの語彙-文法資源が心理療法の流れを通して変化することを示し、それがプロセス/効果研究の観察素材として、異なる心理療法のプロセスを比較するための共通の分析手法となりうるものであることを提示する研究の一環に位置づけている。現在の日本の臨床心理学では、学派間に共通する分析方法、異なる心理療法のプロセスを比較するための共通の尺度がない。特定の心理療法理論の解釈の仕方に依拠せず客観的に言語的相互作用及び意味のレベルの変化を解析するための1つの手法として、本研究で得られた観察結果の他にも過程構成のマッピングから解明できるものは多い。別課題とする。

## 註

- 1 Teruya (2006) は、行為者が構文上表示されない場合、中間態とみなしている。行為者が構文化されない受動態では、行為者性が背景化され、持続的結果化を示すためである。
- 2 1940年代に Rogers, C.R.によって開発された療法。カウンセリングの基本とされるもので、諸派ある中でも主要な療法とされ、流派を問わずTに折衷的に多く用いられている手法である。基本的に、無条件の共感でCの話に「ただただ」耳を傾けるというもので、無条件の共感を得ながら話を聞いてもらうことで、Cは自分が理解されているという安心感を持ち、孤立感、孤独感から開放される。一方で、話すという作業を通じて、情緒的混乱、内的混乱が整理され、洞察を得るというプロセスを辿る。
- 3 来談者中心療法と認知行動療法の折衷型である。認知行動療法の特徴を述べれば、人の行動や心の動きを導くものは認知であるという前提で、その認知を矯正することでCの問題を解決していこうとする療法である。
- 4 セラピーでは大いにありうることで、事例1と事例4のCが度々繰り返している。

## 参考文献

- Bateson, G. (1980) *Mind and Nature. A Necessary Unity*. London:Fontana.
- Davidse, K. (1992) 'Transitivity/ergativity: the Janus-headed grammar of actions and events', In Martin Davies and Louise Ravelli (eds.) *Advances in systemic linguistics*, 105-135. London: Pinter Publishers.
- Eggs, S. (1994) *An Introduction to Systemic Functional Linguistics*. London: Pinter Publishers.
- 藤井由美 (1992) 「[してしまう]の意味」『ことばの科学 5』17-40. 東京：むぎ書房.
- Greenberg, L.S. and Safran, J.D. (1987) *Emotion in Psychotherapy: Affect, Cognition and the Process of Change*. New York: Guilford Press.
- Grinder, J. and Bandler, R. (1999) *The Structure of Magic II*. Palo Alto: Science & Behavior Books, Inc.
- Halliday, M.A.K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar*. London: Edward Arnold. (山口登・笈寿雄 訳 『機能文法概説：ハリデー理論への誘い』 東京：くろしお出版, 2001年.)
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学 言語と文化のタイポロジーへの試論』日本語叢書 東京：大修館書店.
- 伊藤義徳 (2006) 『感情研究の新展開』263-278. ナカニシヤ出版.
- 影山太郎 (2001) 『日英対照動詞の意味と構文』東京：大修館書店
- 加藤澄 (2009) 『サイコセラピー面接テキスト分析』東京：ひつじ書房.
- 加藤澄 (2011) 「[なる]視点より[する]視点への変換プロセスの解析—心理療法におけるCの変化」『機能言語学研究』第6号.
- 加藤澄 (2012) 「TCMからJTCMへの改訂版の開発と日本語心理療法への応用性」日本心理臨床学会第31回秋季大会発表.
- 工藤真由美 (1990) 「現代日本語の受動文」『ことばの科学 4』47-102. 東京：むぎ書房.
- Levin, B. and Hovav, M.R. (1995) *Unaccusativity: At the syntax-lexical semantics interface*. Cambridge: MIT Press.



- 町沢静夫 (1999) 「認知療法, 認知行動療法」氏原寛 他編. 『心理臨床大事典』 360-364. 東京: 培風館.
- Matthiessen, D. (1995) *Lexicogrammatical Cartography*. Tokyo: International Language Science Publisher.
- 森田良行 (1999) 『日本人の発想, 日本語の表現』 中公新書. 東京: 中央公論新社.
- 中村雄二郎 (1997) 『感性の覚醒』 東京: 岩波書店.
- 野口裕二 (2002) 『物語としてのケア—ナラティブ・アプローチの世界へ』 東京: 医学書院.
- 野島一彦 (1999) 「クライアント中心療法」氏原寛 他編. 『心理臨床大事典』 288-293  
東京: 培風館.
- 岡野憲一郎 (1989) 「言語と洞察—R・シェーファーの臨床的言語論」『現代のエスプリ—言葉と精神療法』 113-123.
- 佐藤琢三 (2005) 『自動詞文と他動詞文の意味論』 東京: 笠間書院.
- Schafer, R. (1976) *A New Language for Psychoanalysis*. New Haven and London: Yale University Press.
- 佐藤里美 (1986) 「使役構造の文」『ことばの科学 1』 89-179. 東京: むぎ書房.
- 佐藤里美 (1990) 「使役構造の文 (2)」『ことばの科学 4』 103- 157. 東京: むぎ書房.
- Sledge, W.H., Moras, K., Hartley, D.E., and Levine, M. (1990) Effect of time-limited psychotherapy on patient dropout rates. *American Journal of Psychiatry*, 147, 1341-1347.
- 寺村秀夫 (1992) 『日本語のシンタクスと意味』 東京: くろしお出版.
- 田畑治 (1995) 「第3章 来談者中心カウンセリング」『カウンセリング』 内山喜久雄・高野清純・田畑治. 45-132. 東京: 日本文化科学社.
- 龍城正明 (2008) 「日英語の過程型に関する考察—the Kyoto Grammar による日本語過程型分析」『同志社大学英語英文学研究』 83, 69-98.
- Teruya, K. (2006) *A Systemic Functional Grammar of Japanese*. Vol. 2. Continuum
- Thibault, P. J. (1993) 'Using Language to Think Interpersonally: Experiential Meaning and the Cryptogram of Subjectivity and Agency in English.' *Cultural Dynamics*, 6, 1.
- Thompson, G. (2004) *Introducing Functional Grammar* (2nd edition). London: Arnold
- White, M. and Epston, D. 1990. *Narrative Means to Therapeutic Ends*. New York: W.W. Norton & Company.
- ヤコブセン, ウェスリー. 1989. 「他動性とプロトタイプ論」『日本語学の新展開』 東京: くろしお出版.
- 吉川千鶴子. 1995. 『日英比較 動詞の文法』 くろしお出版.
- 吉川武時. 1973. 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房 1976 に所収 (高橋太郎の「すがたともくろみ」も所収)

# ***JASFL*** ***Occasional Papers***

Volume 1 Number 1 Autumn 1998

## Articles (論文)

- Thematic Development in *Norwei no Mori*:  
Arguing the Need to Account for Co-referential Ellipsis** ..... 5  
ELIZABETH THOMSON
- Synergy on the Page: Exploring *intersemiotic complementarity*  
in Page-based Multimodal Text**..... 25  
TERRY D. ROYCE
- Intonation in English – Workshop** .....51  
WENDY L. BOWCHER
- 日本語の「主語」に関する一考察 ..... 69  
On the Definition of "Subject" in Japanese  
塚田 浩恭 HIROYASU TSUKADA
- イデオロギー仮説の落とし穴 ..... 79  
A Theoretical Pitfall in the Ideology Hypothesis  
南里 敬三 KEIZO NANRI
- 談話の展開における「観念構成的結束性」と書記テキストの分類 ..... 91  
'Ideational Cohesion' in Discourse Development and in the Classification of Written Text  
佐藤 勝之 KATSUYUKI SATO
- 英語における節の主題：選択体系機能理論におけるメタ機能の視点からの再検討..... 103  
Theme of a Clause in English: A Reconsideration from the Metafunctional Perspective in Systemic  
Functional Theory  
山口 登 NOBORU YAMAGUCHI

# ***JASFL***

## ***Occasional Papers***

Volume 2 Number 1 Autumn 2001

### Articles (論文)

- Linguistic Analysis and Literary Interpretation** ..... 5  
RICHARD BLIGHT
- A Note on the Interpersonal-Nuance Carriers in Japanese** ..... 17  
KEN-ICHI KADOOKA
- Schematic Structure and the Selection of Themes** ..... 29  
HARUKI TAKEUCHI
- Theme, T-units and Method of Development: An Examination of  
the News Story in Japanese** ..... 39  
ELIZABETH ANNE THOMSON
- セミオティックベースとそれを利用したテキスト処理について ..... 63  
The Semiotic Base as a Resource in Text Processing Systems  
伊藤紀子、小林一郎、菅野道夫 NORIKO ITO, ICHIRO KOBAYASHI & MICHIO SUGENO
- 選択体系機能文法の英語教育への応用：節、過程中核部、主題の分析による  
作文の評価 ..... 73  
Applying Systemic Functional Grammar to English Education: Evaluating the Writing  
of EFL Students Base on the Analysis of Clause, Process and Theme  
佐々木真 MAKOTO SASAKI
- 日本語の対人的機能と「伝達的ユニット」—The Kyoto Grammarによる分析試論— ..... 99  
(pp.99-113) The Interpersonal Function and the Communicative Unit for Japanese:  
From the Approach of The Kyoto Grammar  
船本弘史 HIROSHI FUNAMOTO
- 日英翻訳におけるThemeに関する課題 ..... 115  
Thematic Challenges in Translation between Japanese and English  
長沼美香子 MIKAKO NAGANUMA
- テキストの中の母性 ..... 129  
Maternity in Text  
南里敬三 KEIZO NANRI

# *JASFL*

## *Occasional Papers*

Volume 3 Number 1 Autumn 2004

### Articles (論文)

- Lexicogrammatical Resources in Spoken and Written Texts** ..... 5  
Chie HAYAKAWA
- On the Multi-Layer Structure of Metafunctions** ..... 43  
Ken-Ichi KADOOKA
- An Attempt to Elucidate Textual Organization in Japanese** ..... 63  
Keizo NANRI
- A Comparative Analysis of Various Features Found in Newspaper Editorials and Scientific Papers, Including 'Identifying Clauses'** ..... 81  
Makoto OSHINA & Kyoko IMAMURA
- Constructions of Figures** ..... 93  
Katsuyuki SATO
- Technocratic Discourse: Deploying Lexicogrammatical Resources for Technical Knowledge as Political Strategies** ..... 105  
Kinuko SUTO
- Application of Syntactic and Logico-semantic Relationships between Clauses to the Analysis of a Multimodal Text** ..... 157  
Haruki TAKEUCHI
- An Analysis of Narrative: its Generic Structure and Lexicogrammatical Resources** ..... 173  
Masamichi WASHITAKE
- 選択体系機能言語学に基づく日本語テキスト理解システムの実装** ..... 189  
Implementation of a Japanese Text Understanding System Based on Systemic Functional Linguistics  
伊藤紀子、杉本徹、菅野道夫  
Noriko ITO, Toru SUGIMOTO & Michio SUGENO
- タスク解決に関する対話における修辞構造を用いたステージの規定** ..... 207  
The Definition of Stages Using Rhetorical Structure in Dialogue on Task Solutions  
高橋祐介、小林一郎、菅野道夫  
Yusuke TAKAHASHI, Iichiro KOBAYASHI & Michio SUGENO
- 外国為替記事のドメインのモデル化—機能的分析** ..... 225  
The Domain Modelling of Foreign Exchange Reports: a Functional Analysis  
照屋一博 Kazuhiro TERUYA

# 機能言語学研究

## JAPANESE JOURNAL OF SYSTEMIC FUNCTIONAL LINGUISTICS

Vol. 4 April 2007

### Articles

- 文法的メタファー事始め ..... 1  
The Grammatical Metaphor As I See It  
安井 稔  
Minoru YASUI
- A Systemic Approach to the Typology of Copulative Construction ..... 21  
Ken-Ichi KADOOKA
- Text Structure of Written Administrative Directives in the Japanese and  
Australian Workplaces ..... 41  
Yumiko MIZUSAWA
- A Case Study of Early Language Development: Halliday's model (1975)  
of Primitive Functions in Infants' Protolanguage ..... 53  
Noriko KIMURA
- 日本語ヘルプテキストへの修辞構造分析と対話型ユーザ支援  
システムへの応用 ..... 83  
An Analysis of Rhetorical Structure of Japanese Instructional Texts and its  
Application to Dialogue-based Question Answering Systems  
伊藤紀子、杉本徹、岩下志乃、小林一郎、菅野道夫  
Noriko ITO, Toru SUGIMOTO, Shino IWASHITA, Ichiro KOBAYASHI & Michio  
SUGENO

# PROCEEDINGS OF JASFL

Vol. 1 October 2007

---

## Articles

- 日本語テキストにおける過程構成の統計的分析 ..... 1  
藤田 透
- 『羅生門』の研究 ―物質過程を中心に― ..... 9  
鷲嶽正道
- 日中・中日翻訳におけるテキスト形成的機能：  
「出発点」の特徴に関する対応分析 ..... 19  
鄧 敏君
- 日本語テキストにおける Theme の有標性への視点 ..... 21  
長沼美香子
- サイコセラピーにおけるクライアントの洞察と談話の結束性との連関 ..... 45  
加藤 澄、エアハード・マッケンターラー
- 米国の煙草の広告の Reading Path ..... 59  
奈倉年江
- アスペクト表現における対人的機能の考察 ..... 65  
船本弘史
- 「日本語を母国語とする幼児における Primitive functions (Halliday 1975)  
の出現と使用に関するケーススタディ」 ..... 75  
木村紀子
- 日本の英語教科書にみられるジャンル ..... 89  
早川知江
- The Role of Genre in Language Teaching: The Case of EAP and ESP ..... 105  
Virginia M. Peng
- Texts, Systemics and Education: An Expansion of a Symposium  
Contribution to the 2006 JASFL Conference ..... 115  
David Dykes

# PROCEEDINGS OF JASFL

Vol. 2 October 2008

---

## Articles

- The Kyoto Grammar の枠組みによる品質を表す形容詞の分析 ..... 1  
藤田 透
- 日本語助動詞の研究：多義性から多機能性へ ..... 11  
船本弘史
- Grammatical Intricacy, Genre, Language Function and Pedagogy ..... 23  
Howard DOYLE
- 日本語・英語の「説得」：観念構成的意味を中心に ..... 39  
佐藤（須藤）絹子
- Are There Modal Imperatives? – Just Someone Dare Say No! ..... 51  
David DYKES
- 英語教育におけるジャンルと過程型 ..... 67  
早川知江
- サイコセラピーにおける問題の外在化のための語彙-文法資源 ..... 83  
加藤 澄
- 日本語テキストの Subject と Predicate の役割に関する一考察 ..... 97  
水澤祐美子
- Honorifics and Interpersonal Function ..... 107  
Miroslawa KACZMAREK
- イデオロギーの復興 ..... 123  
南里敬三
- 「は」と「が」そのメタ機能からの再考 ..... 115  
龍城正明

# 機能言語学研究

## JAPANESE JOURNAL OF SYSTEMIC FUNCTIONAL LINGUISTICS

Vol. 5 June 2009

### Articles

- An Analysis of Intonation from the Viewpoints of Strata and Metafunctions..... 1  
Ken-Ichi KADOOKA
- An Analysis of the Polysemy of Processes Realised by Japanese Adjectives:  
The System Network for Process Types in the Kyoto Grammar ..... 17  
Toru FUJITA
- 日本語の新聞報道記事のジャンル構造 ..... 33  
鷲嶽正道
- Genre-Based Approach to Teaching Tense in English Classes:  
Tense in Art Book Commentaries ..... 47  
Chie HAYAKAWA
- Interpersonal Strategies of ENGAGEMENT in Public Speaking:  
A Case Study of Japanese and Australian Students' Speech Scripts.....69  
Keiko OZAWA
- 「話し言葉らしさ・書き言葉らしさ」の計測  
- 語彙密度の日本語への適用性の検証 - ..... 89  
佐野大樹
- 語彙的意味の共有度より導かれる治療アプローチの違いと  
サイコセラピーにおけるテキスト性の捉え方 ..... 103  
加藤 澄
- Concession and Assertion in President Obama's Inauguration Speech ..... 131  
David DYKES



# PROCEEDINGS OF JASFL

Vol. 3 October 2009

---

## Articles

文言テキストの2つの解釈

—「漢文訓読」とプリンストン大学「古典中国語」— ..... 1

佐藤 勝之

ESL/EFL リーディング教科書の批判的談話分析 .....15

阿部 聡、田中 真由美

ジャンルと英語教育：美術書にみる文法資源選択の偏り ..... 25

早川 知江

日本語の形容詞と動詞が具現する過程型： ..... 39

The Kyoto Grammar の選択体系網を用いた分析

藤田 透

日本語における無助詞の機能 — 主題性を中心に — ..... 49

福田一雄

日本語における経験機能文法の構築 ..... 59

南里敬三

日本における SFL の英語教育への応用：5 文型と be 動詞を中心として ..... 73

佐々木真

# PROCEEDINGS OF JASFL

Vol. 4 October 2010

---

## Articles (論文)

- 日本語の呼称表現の会話における機能 ..... 1  
小堀千寿
- The Genre of, and the Genres within, the English Conversation:  
Successfully Creating Conversational Texts in the EFL Classroom ..... 13  
Anthony G. RYAN
- Critical Discourse Analysis of a Government Approved Textbook:  
Aiming for its Application to English Language Teaching ..... 29  
Mayumi TANAKA
- A Systemic Functional Study of Particles in Japanese and Cantonese:  
an Initial Exploration ..... 41  
Ayako OCHI and Marvin LAM
- 日本語の Visual Syntax ..... 59  
奈倉年江
- 3 種類の日本語ヘルプテキストの修辞構造分析と比較 ..... 69  
伊藤紀子、岩下志乃、杉本徹、小林一郎
- 節境界に関わる問題：動詞の文法化 ..... 79  
早川知江
- Modeling Time and Space in Narrative Research Interviews ..... 93  
Patrick KIERNAN
- 社説からリサーチ・ペーパーへ ..... 105  
石川 彰
- 日本機能言語学会第 17 回秋期大会プログラム ..... 119

# 機能言語学研究

## JAPANESE JOURNAL OF SYSTEMIC FUNCTIONAL LINGUISTICS

Vol. 6 April 2011

### Articles

- A Cross-linguistic Study of Punch Line Paratone in Japanese and English .....1  
Ken-Ichi KADOOKA
- 機能文法における節境界の問題と認定基準の提案 .....17  
早川知江、佐野大樹、水澤祐美子、伊藤紀子
- 現代日本語書き言葉における修辞ユニット分析の適用性の検証 .....59  
—「書き言葉らしさ・話し言葉らしさ」と  
脱文脈化言語・文脈化言語の関係—  
佐野大樹、小磯花絵
- 社会的機能に基づくテキスト分類法の構築に向けて .....83  
—システム理論の観点から—  
水澤祐美子、佐野大樹
- ジャンルによる社説記事の分析：一試案 .....105  
石川 彰
- Evaluation and Identity Extending Appraisal Theory to Explore .....127  
Positionings of Self  
Patrick Kiernan
- A Socio-Cognitive Journey: Construction of an Adiachronic LS Model .....147  
Keizo NANRI
- In Search of the Persona of a Parenting Advice Writer .....175  
David DYKES
- 「なる」視点より「する」視点への変換プロセスの解析 .....187  
—サイコセラピーにおけるクライアントの変化測定—  
加藤 澄

# PROCEEDINGS OF JASFL

Vol. 5 October 2011

---

## Articles (論文)

- The Analysis of Evaluative Stances across Genres of Research  
-Following the Prosodies of Value in Attitudinal Terms-..... 1  
Tomoyo OKUDA
- 日本語の CIRCUMSTANCE System について..... 11  
早川知江
- The Kyoto Grammar による助動詞群の過程構成中での分析..... 25  
藤田 透
- 広告画像の‘排他性’はどのように具現されるのか。..... 37  
奈倉年江
- An Expert Advice Writer’s Persona: Three Faces of Role Enactment..... 43  
David DYKES
- マクロ・ジャンルとしての新聞..... 53  
鷲嶽正道
- 英字新聞記事におけるアプレイザルのはたらきについて  
—テキストにおける主情報の展開とその評価—..... 61  
飯村龍一
- Evaluative Resources for Managing Persona in Narrative..... 75  
Patrick KIERNAN
- An Analysis of Local textual Cohesion Surrounding Contrastive Concepts  
and Positions in Lecture Texts..... 87  
Akira ISHIKAWA
- 日本語関係過程の意味構造  
— 指注文・指定文・同注文・同一性文の区別について—..... 101  
福田一雄
- 日本機能言語学会第 18 回秋期大会プログラム..... 115

# PROCEEDINGS OF JASFL

Vol. 6 October 2012

---

## Articles (論文)

- 法副詞 *no doubt, doubtless, undoubtedly* の生起文脈について  
—過程構成の観点から—..... 1  
鈴木大介
- A First Look at Classroom Curriculum Genres  
in Japanese Tertiary EFL ..... 11  
Thomas AMUNDRUD
- 日本語のモダリティ：階層下降か文法的比喩か..... 19  
早川 知江
- 日本語と英語の天気予報におけるマルチモダリティー..... 33  
鷲嶽正道
- 修辞ユニット分析による Q&A  
サイトアットコスメ美容事典と Yahoo!知恵袋の比較..... 45  
田中弥生
- Exploring Identity Negotiation in an Online Community..... 59  
Patrick KIERNAN
- Characterising the Argumentative Nature of Opinion Articles..... 73  
Akira ISHIKAWA
- 日本機能言語学会第 19 回秋期大会プログラム ..... 87

# 『機能言語学研究』および*Proceedings of JASFL* 作成と投稿のための規約

## 作成と投稿のための規約

### 1. 使用言語

日本語または英語

### 2. 原稿の種類

(1) 研究論文 (2) 書評・紹介 (3) 研究ノート

### 3. 独創性

投稿原稿は以下の条件を満たす場合にのみ出版の対象として考慮する。

- (1) 著者のオリジナルな著作であること。
- (2) 他の出版物に同時に応募しないこと。
- (3) 他の学会で既に発表した内容のもの（同一の内容のもの、同一のタイトルのも、発表言語だけを変えたもの等）、重複発表と見なされるものは受け付けない。また重複発表と見なされたものは発表後であっても採択の許諾を取り消すこととする。
- (4) 著作権は各著者に属する。ただし再版の権利は日本機能言語学会に属する。

### 4. 投稿資格

投稿は会員にかぎる。ただし共著の場合は筆頭著者が会員であればよい。

### 5. 審査方法

審査の際はすべての原稿は無記名とし、3名の審査員が審査する。

### 6. 書式と構成

#### 6.1 書式設定とファイル形式

用紙をB5とし、余白は上下左右各25ミリをとる。使用するワープロソフトは問わないが、ファイルはMicrosoft Word互換のファイル(docまたはdocxファイル)として保存、投稿する。

#### 6.2 フォント設定と行間

日本語で書く場合のフォントはMS明朝（11ポイント）、英語で書く場合はTimes New Roman（11ポイント）の文字サイズを用いることとし、シングルスペースの行間とする。

#### 6.3 語数

『機能言語学研究』：日本語の場合 22000 文字以内、英語の場合 7000 語以内とする。

*Proceedings of JASFL*: B5 14 ページ以内とする。

#### 6.4 要旨

執筆する言語にかかわらず、論文要旨を必ず英語で100字～200語にまとめ、冒頭に記載する。

#### 6.5 タイトル

日本語で執筆する場合には英語のタイトルを必ず記載する。タイトルの表記法は下記を参考にする。

例： 日本におけるSFL理論の英語教育への応用  
On Application of SFL to English Education in Japan

#### 6.6 セクション構成と段落

日本語で執筆する場合、セクションおよび段落の最初は字下げをする。ただし、英語で執筆する場合、セクションの最初は字下げ（インデント）せず、2段落目からインデントする。セクションのタイトルは左寄せとする。またセクションの番号は「1」から始めることとする（「0」は使用しない）。

### 7. 参照方法

参照したすべての文献（著書、モノグラフ、論文他）は本文中の適切な場所で明示すること。その方法は以下を参照すること。

#### 7.1 直接引用

原文をそのまま引用する場合は必ず「」内に入れる。引用文が4行を超えるときは本文の中に挿入せず、全文をインデントして本文から一行空けて切り離す。

#### 7.2 著者への参照方法

- a. 著者名が本文に記されている場合は、その直後に出版年とページのみを（ ）に入れて示す。例「Halliday (1994 : 17) が述べているように...」
- b. 特定の個所ではなく、より一般的に参照する場合は、著者名の直後に出版年のみを（ ）に入れて示す。例「Hasan (1993) は次のように述べている。すなわち...」
- c. 著者名が本文中に記述されない場合は、著者名も（ ）に入れ、（著者、コンマ、年）の順で記載する。例 (Martin, 1992)。」
- d. 著者が2名の場合は二人の姓を入れる。例 (Birrell and Cole, 1987)
- e. 著者が3名以上の場合は筆頭著者名のみを出し、ほかは「他」として全著者名は出さない。例 (Smith et al., 1986)
- f. 同じ著者の同じ年の出版物を2冊以上参考文献として使う場合は、それぞれの著作の出版年に 'a', 'b' 等の文字を付記して区別する。例 (Martin, 1985a)
- g. 同一個所に複数の参考文献を付ける場合には、すべての文献を1つの（ ）内に入れ、各文献をセミコロンで区切る。例 (Maguire, 1984; Rowe,

1987; Thompson, 1988)

### 7.3. 略語

同一文献に2回目以降言及する場合にも最初の場合と同様にして、‘*ibid.*’, ‘*op. cit.*’, ‘*loc. cit.*’等の略語は用いない。

## 8. 参考文献

参考文献は本文で引用・参照したもの、および原稿の準備段階で使用した文献すべてをリストに載せること。著者の姓のアルファベット順、同一著者ならば出版年の順に並べる。

### 8.1. 書籍

1つの文献の記述は、著者名、( )に入れて出版年、著作名、出版地、出版社、必要ならばページの順序に出す。記載方法は下記の例に倣うこと。

#### a. 単著の例：

寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味』第2巻 東京：くろしお出版

Halliday, M. A. K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar 2<sup>nd</sup> edition*. London: Arnold.

#### b. 共著の例：

益岡隆志、田窪行則(1992)『基礎日本語文法』東京：くろしお出版

Martin, J. R. and Rose, D. (2004) *Working with discourse: meaning beyond the clause*. London: Continuum.

#### c. 単一編纂者図書の場合の例：

龍城正明(編)(2006)『ことばは生きている』東京：くろしお出版

Christie, F. (ed.) (1999) *Pedagogy and the Shaping of Consciousness: Linguistic and Social Process*. London: Cassell.

#### d. 複数編纂者図書の場合の例：

仁田義雄、益岡隆志(編)(1989)『日本語のモダリティ』東京：くろしお出版

Hasan, R. and Williams, G. (eds) (1996) *Literacy in Society*. London: Longman.

### 8.2. 雑誌の論文

論文名は「 」内に入れ、雑誌名は『 』内に入れ、巻、号、ページを記載する。英語の場合は雑誌名をイタリックにし、巻、号、ページを記載する。ただ



し英語の場合、タイトルはそのまま表記する。また編集図書の一セクションを形成している場合は ‘ ’ で囲むこととする。

例：

安井稔(2007)「文法的メタファー事始め」, 『機能言語学研究』4: 1-20

龍城正明 (2008) 「「は」と「が」そのメタ機能からの再考」, *Proceedings of JASFL*, 4: 115-149

Halliday, M.A.K. (1966) Notes on transitivity and theme in English, Part1, *Journal of Linguistics*, 3.1: 37-81.

Matthiessen, C.M.I.M. (2004) ‘Descriptive motifs and generalizations’. In A. Caffarel, J.R. Martin and C.M.I.M. Matthiessen (eds), *Language Typology: a Functional Perspective* 537-674. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

## 9. 註

註はできるだけ避ける。どうしても必要な場合は簡潔にし、本文の最後、参考文献の前に置く。

## 10. 図、表、地図、グラフ

これらはすべて本文中該当箇所に挿入する。コンピューターでスキャンしたり、写真撮影したりする際不鮮明にならないよう、文字、数字、線等は太く、はっきりと書いておくこと。

## 11. 校正

著者は編集者から送付された編集済みファイルの校正（初稿のみ）をする。

## 12. 原稿提出

原稿電子ファイルで、添付ファイルとして提出すること。フォーマットはMS-Word互換ファイル(doc., .docx)とする

## 13. 原稿送付先

[jasfleditor@gmail.com](mailto:jasfleditor@gmail.com)

## **Notes for contributors to *Japanese Journal of Systemic Functional Linguistics and Proceedings of JASFL***

### 1. Language

Manuscripts may be submitted in English or Japanese.

### 2. Types of Manuscripts

**3. Originality**

Manuscripts are considered for publication only on the understanding that they are not simultaneously under consideration elsewhere, and that they are the original work of the author(s). Any previous form of publication and current consideration in other languages are not accepted. If the manuscript has been deemed as the same content published before in other books and journals, the validity of selection is eliminated and the article is excluded from the journal. Copyright is retained by the individual authors, but JASFL is authorized to reprint.

**4. Qualification**

JASFL members are exclusively eligible to contribute to publications; however, regarding an article by multiple authors, the main author at least is requested to be a JASFL member.

**5. Assessment procedures**

Articles are subject to the usual process of anonymous review. Articles are read by three reviewers.

**6. Formats**

**6.1 Document format**

All pages can be created with any word processor under a condition that the file is saved as Microsoft WORD format (.doc, .docx) on B5-sized paper, with margins of 25 mm or 1 inch on every side.

**6.2. Fonts and Spacing**

Manuscripts are typed in Times New Roman (11 point) with single spacing.

**6.3 The word limit**

*Japanese Journal of Systemic Functional Linguistics:*

Manuscripts are not allowed to go beyond 7,000 words.

*Proceedings of JASFL:*

Manuscripts are not allowed to go beyond 14 pages in the B5 format.

**6.4 Abstract**

An English abstract of 100-200 words is included in the beginning of the text.

**6.5 Title**

English title is required when a manuscript is written in Japanese.

**6.6. Indentation and Section Number**

Indentation is required from the second paragraph of a section. The first section number starts with "1", NOT "0".

**7. Format for References in the Text**

All references to or quotations from books, monographs, articles, and other sources should be identified clearly at an appropriate point in the main text, as follows:

### 7.1 Direct quotation

All direct quotations should be enclosed in single quotations. If they extend more than four lines, they should be separated from the body and properly indented.

### 7.2 Reference to an author and more than one authors

- a. When the author's name is in the text, only the year of publication and the page should be enclosed within the parentheses, e.g. 'As Halliday (1994: 17) has observed ...'
- b. When the reference is in a more general sense, the year of publication alone can be given, e.g. 'Hasan (1993) argues that ...'
- c. When the author's name is not in the text, both the author's name and year of publication should be within the parentheses and separated by a comma, e.g. (Matthiessen, 1992)
- d. When the reference has dual authorship, the two names should be given, e.g. (Birrell and Cole, 1987)
- e. When the reference has three or more authors, the first author's name should be given and the rest should be written as 'et al.', e.g. (Smith et al., 1986)
- f. If there is more than one reference to the same author and year, they should be distinguished by use of the letters 'a', 'b', etc. next to the year of publication, e.g. (Martin, 1985a).
- g. If there is a series of references, all of them should be enclosed within a single pair of parentheses, separated by semicolons, e.g. (Maguire, 1984; Rowe, 1987; Thompson, 1988).

### 7.3 Abbreviation

If the same source is referred to or quoted from subsequently, the citations should be written as the first citation. Other forms such as '*ibid.*', '*op.cit.*', or '*loc.cit.*' should not be used.

## 8. Reference List

The Reference List should include all entries cited in the text, or any other items used to prepare the manuscript, and be arranged alphabetically by the author's surname with the year of publication. This list should be given in a separate, headed, reference section. Please follow the examples given:

### 8.1 Books

#### a. A single-authored book

Halliday, M. A. K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar 2<sup>nd</sup> edition*. London: Arnold.

#### b. A multiple-authored book

Martin, J. R. and Rose, D. (2004) *Working with discourse: meaning beyond the clause*. London: Continuum.

### **c. A single-edited book**

Christie, F. (ed.) (1999) *Pedagogy and the Shaping of Consciousness: Linguistic and Social Process*. London: Cassell.

### **d. A multiple-edited book**

Hasan, R. and Williams, G. (eds) (1996) *Literacy in Society*. London: Longman.

## **8.2 Articles in journals and edited books**

Halliday, M. A. K. (1966) Notes on transitivity and theme in English, Part1, *Journal of Linguistics*, 3.1: 37-81.

Matthiessen, C.M.I.M. (2004) 'Descriptive motifs and generalizations'. In A. Caffarel, J.R. Martin and C.M.I.M. Matthiessen (eds), *Language Typology: a Functional Perspective* 537-674. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

## **9. Notes**

Notes should be avoided. If they are necessary, they must be brief and should appear at the end of the text and before the Reference.

## **10. Figures, tables, maps, and diagrams**

These items must be inserted in an appropriate position within the article, and should carry short descriptive titles. They must be precisely and boldly drawn to ensure scanning or photographic reproduction.

## **11. Proofs**

Authors will be sent proofs for checking and correction.

## **12. Submission of a manuscript**

A manuscript for submission must be saved as a MS-Word compatible file, and be submitted as an attachment file.

## **13. Correspondence**

Manuscripts are to be sent to: [jasfleditor@gmail.com](mailto:jasfleditor@gmail.com)

# 機能言語学研究

## JAPANESE JOURNAL OF SYSTEMIC FUNCTIONAL LINGUISTICS

### 機能言語学研究（第7巻）

発行	2013年5月31日
編集・発行	日本機能言語学会
代表者	龍城正明
編集者	佐々木真
印刷所	株式会社 あるむ 〒460-0012 名古屋市中区千代田 3-1-12 Tel. 052-332-0861（代）
発行所	日本機能言語学会事務局 〒460-0002 名古屋市中区丸の内 1-17-31 清原名古屋ビル 5F （株）名古屋教育ソリューションズ内 Tel. 052-211-3367（代） Email: <a href="mailto:secretary@jasfl.jp">secretary@jasfl.jp</a> URL: <a href="http://www.jasf.jp">http://www.jasf.jp</a>

# JAPANESE JOURNAL OF SYSTEMIC FUNCTIONAL LINGUISTICS

Vol. 7 May 2013

## Articles

- Koto* and *no* in Japanese: Conditions to Work ..... 1**  
**as Nominal Group Heads**  
Chie HAYAKAWA
- A Functional Analysis of the Explanative Modality ..... 23**  
**in Japanese**  
Ken-Ichi KADOOKA
- Two Characteristics of the Essay as a Genre ..... 43**  
Akira ISHIKAWA
- Differences of Rhetorical Functions on a Community Site ..... 59**  
**“@cosme” Depending on High or Low Ratings for Products**  
**—An Application of Rhetorical Unit Analysis to**  
**Texts on the Web—**  
Yayoi TANAKA
- Agency as Measurement Standards of Change Obtained ..... 75**  
**from the Mapping of Clients’ Transitivity System**  
**—Based on Psychotherapy Interviews—**  
Sumi KATO

Japan Association of Systemic Functional Linguistics